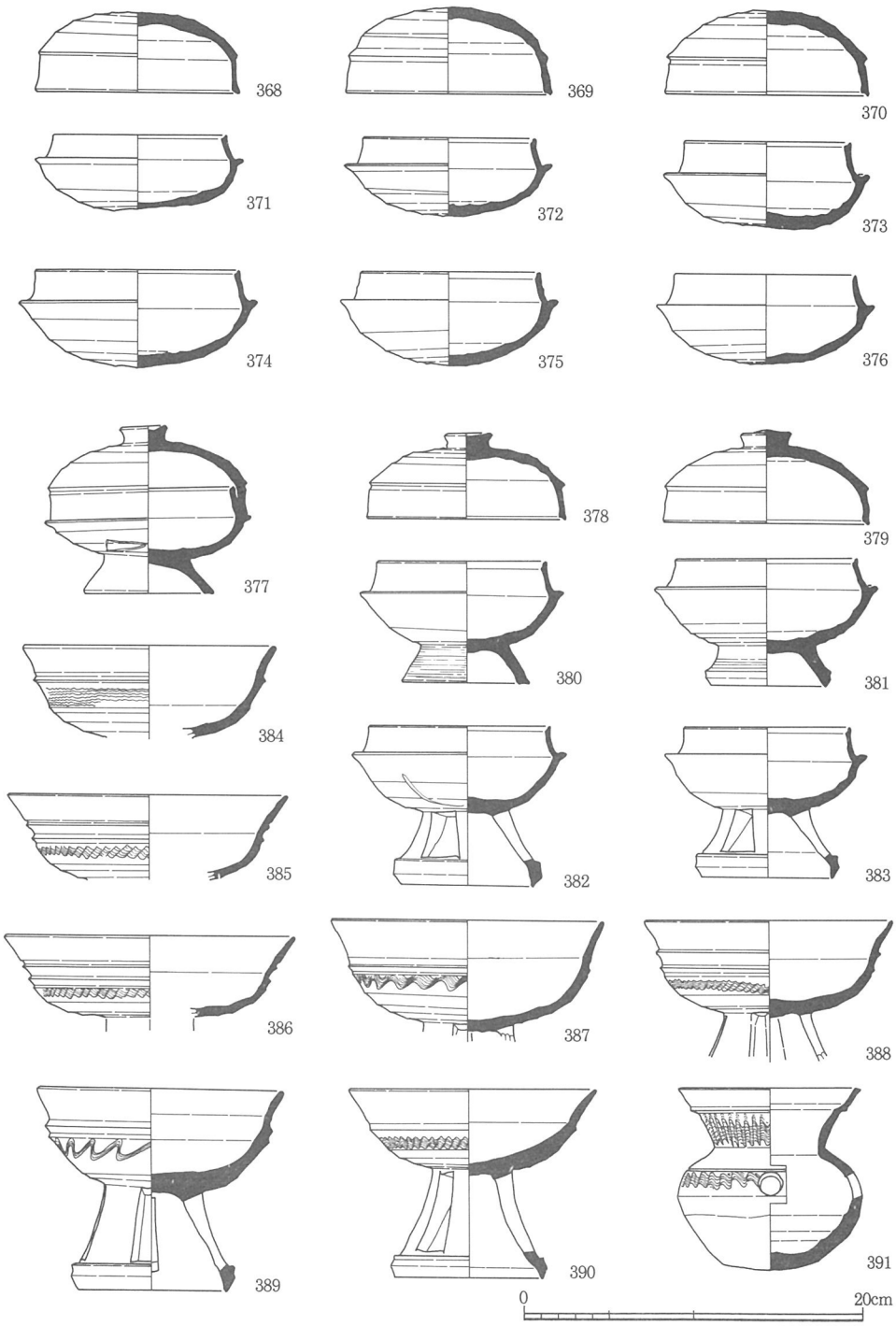
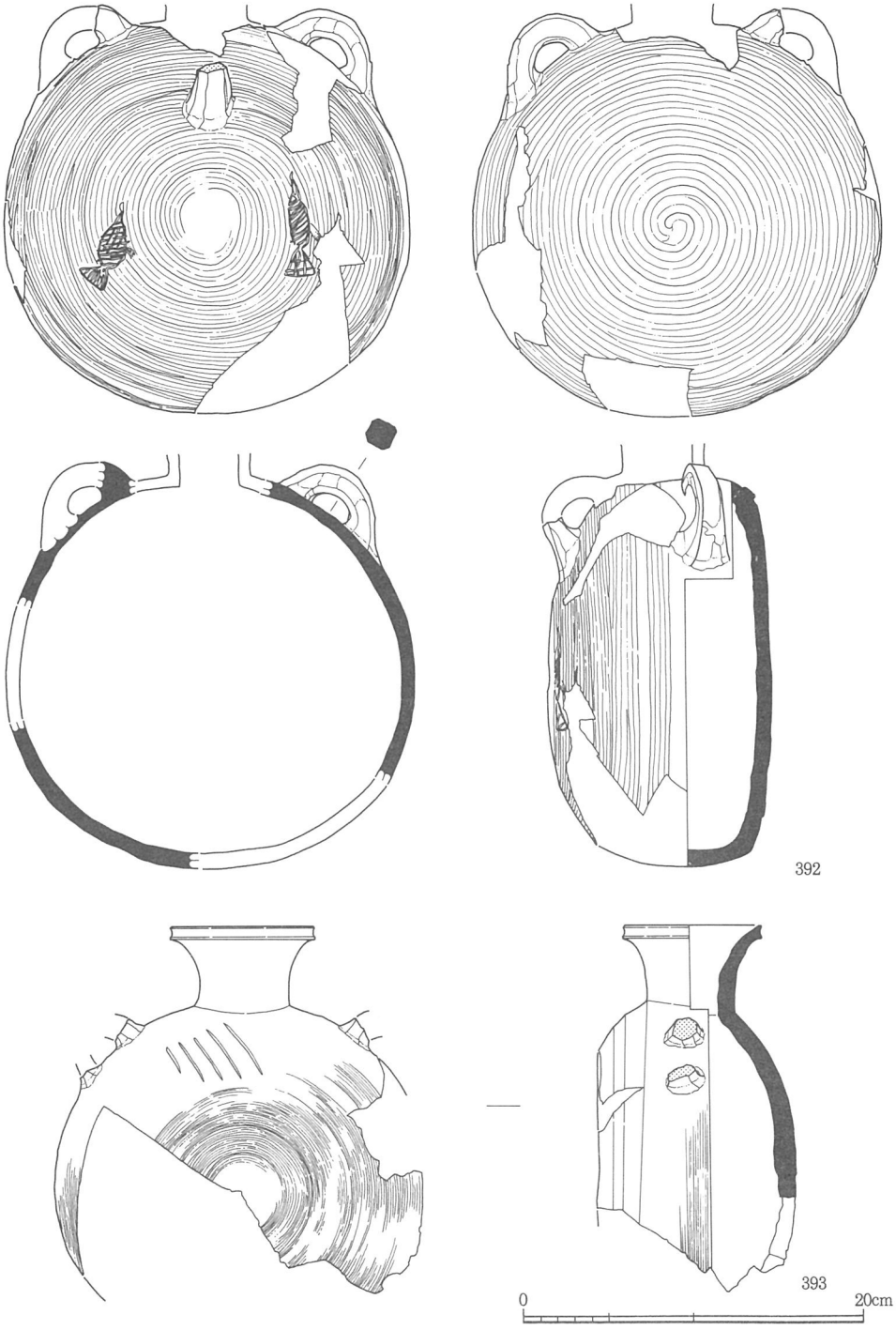
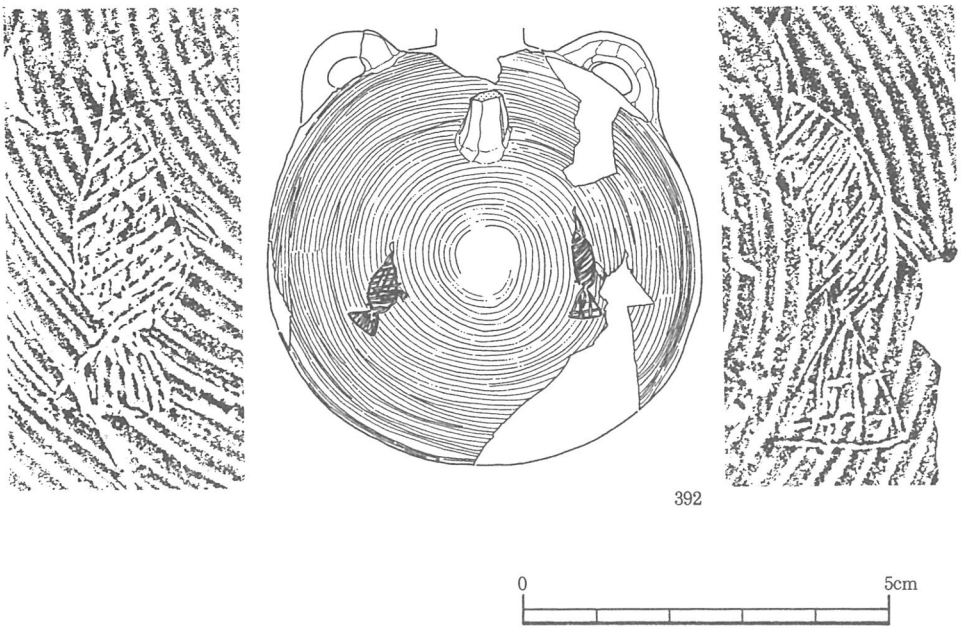


第52図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物14



第53図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物15



第54図　線刻絵画拓影

堝（399・400）

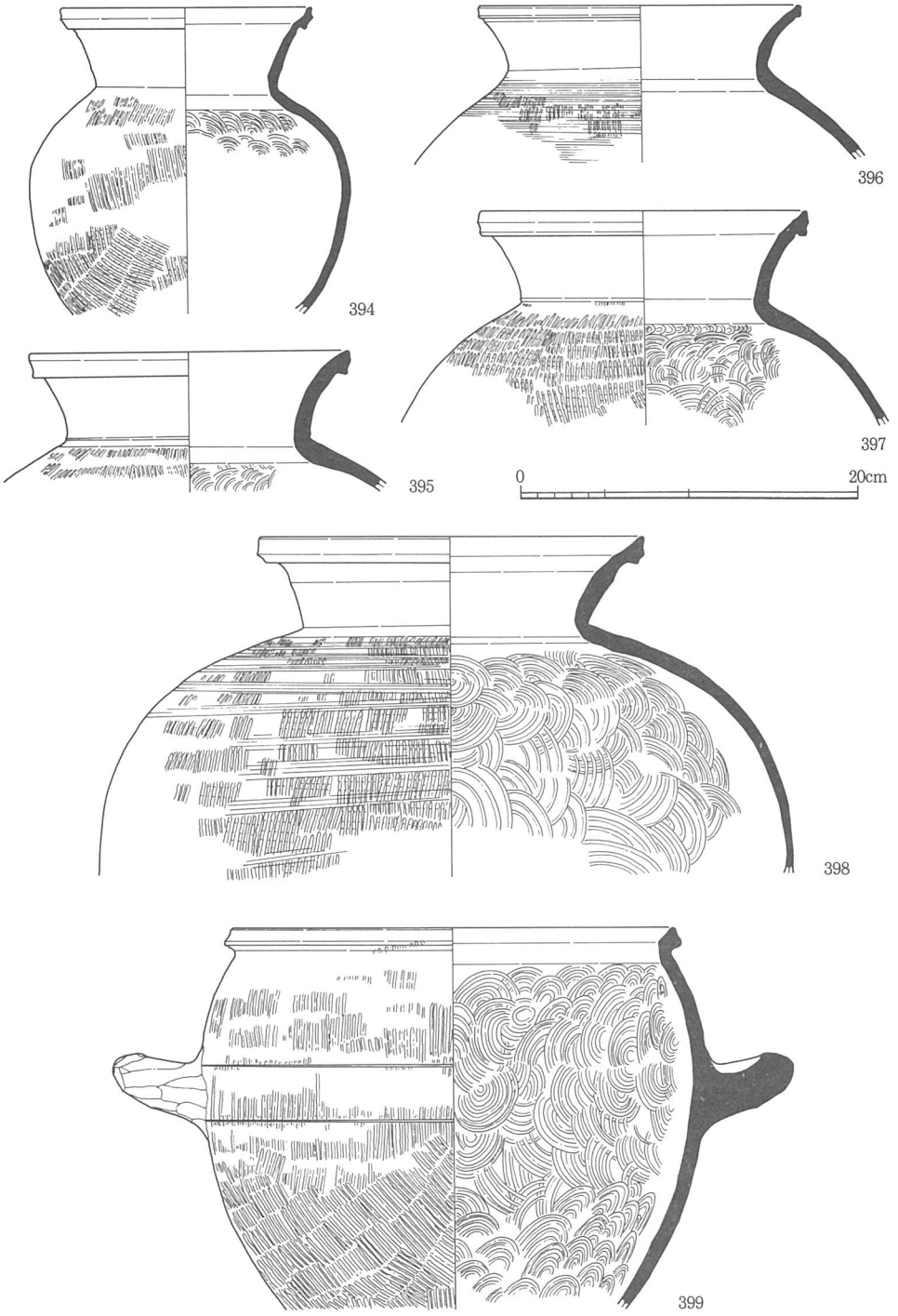
399は短く屈曲する口縁部をもち，底体部が鉢状に深いものである。把手は貼付によって接合し，把手付近には2条の浅い沈線を巡らせる。体部の調整はタタキによるが，内外面とも調整痕をそのまま残存させている。

400は短い頸部をもち，口縁部の一部を垂下させ注ぎ口としている。把手の接合は399同様貼付による。

甑（401～404）

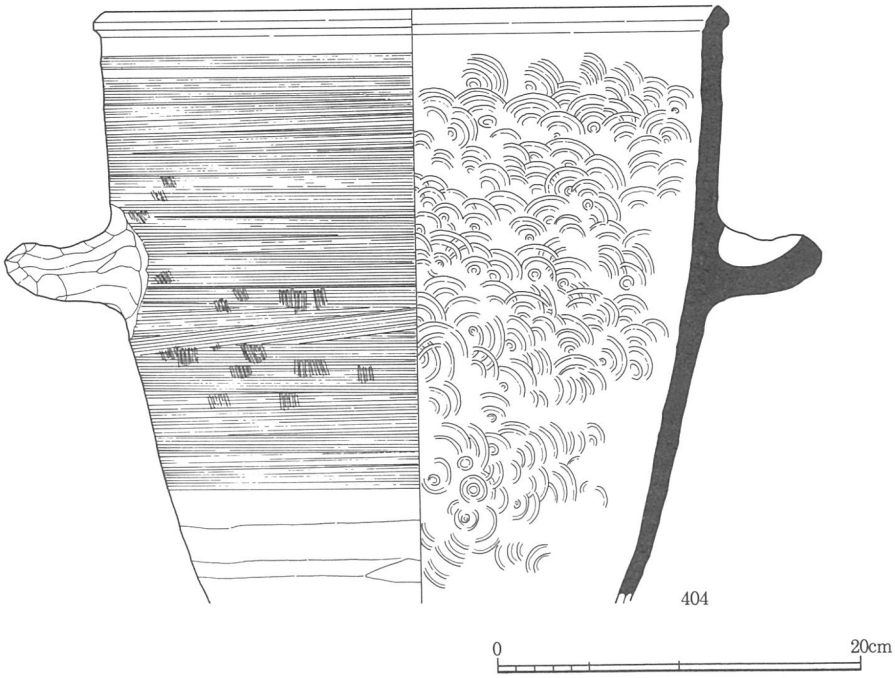
401は完形に復元された。口縁部は体部からの延長でのび，端部は若干内傾させ平坦な面をもっておさめる。蒸気孔は中央部に大型円孔，その周りに半月形に近い大型孔をヘラによって穿たれる。把手の接合は貼付によって行われ，把手付近には沈線を巡らせる。調整は外面をタタキの後にカキ目を施すが，内面はアテ具痕をそのまま残存させる。底部付近の仕上げは比較的広い範囲をヘラケズリで行なう。

402・403は底部片である。402にみられる底部付近のタタキによる仕上げ調整はあまり多用されない仕上げ技法である。404は口径33㎝，器高32㎝を測る大型品である。わずかに外反させる口縁部以外の諸特徴は401と類似する。



第55図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物16

第56図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物17



第57図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物18

土師器（第58～59図，図版58）

第Ⅵ層からは土師器も数多く出土したが，そのほとんどは破片資料である。

高杯（405～414）

ほとんどのものは脚柱から裾が大きく屈曲して開く形態（405～409・411～413）である。これらは，脚柱部が短いもの（405～408）と細長いもの（411・412）に細分され，さらに，裾片のため明確ではないが脚柱が大きく開くもの（409）の存在も指摘できる。他にも数は少ないが，脚裾が徐々に開く形態（414）がある

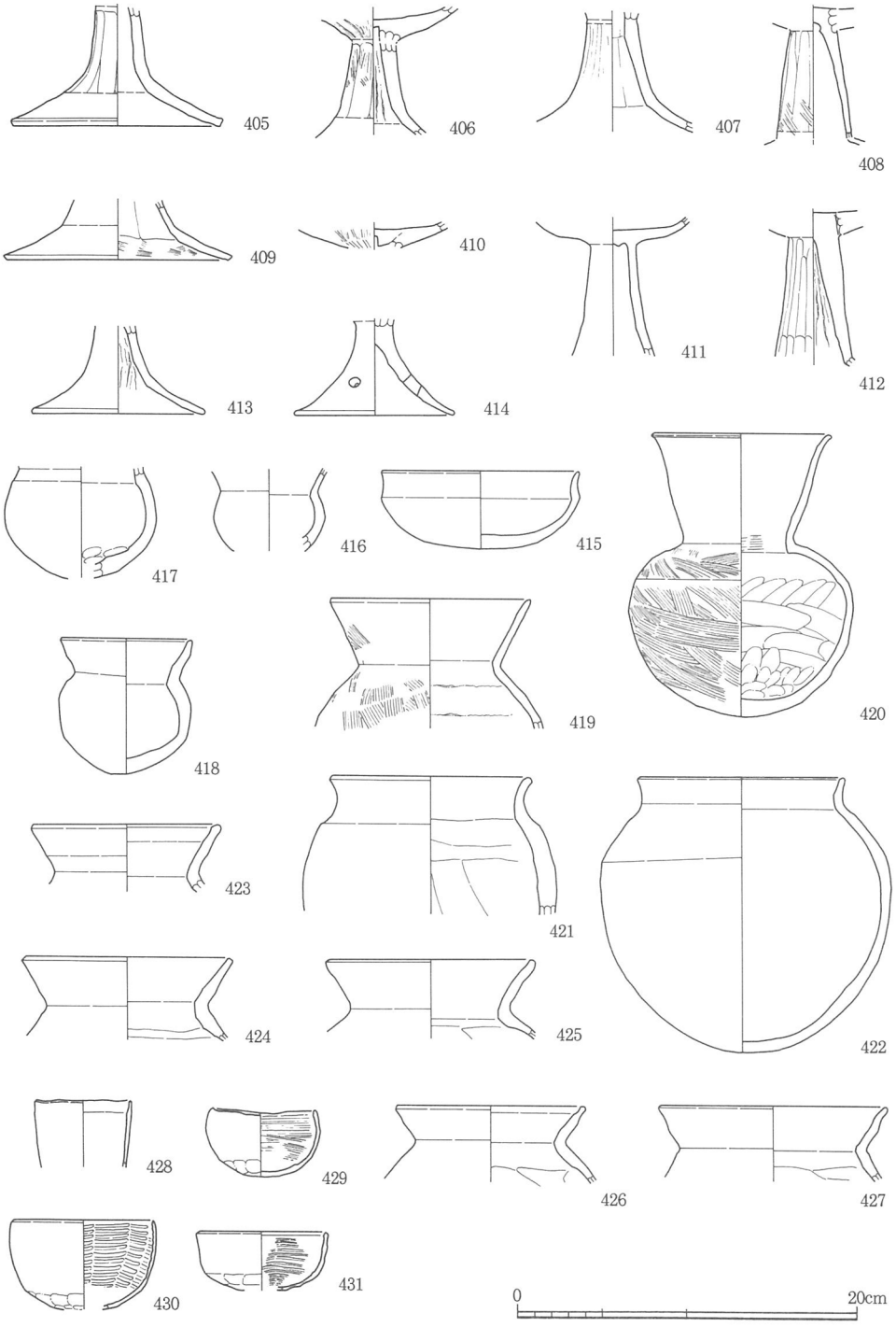
杯（415）

１点出土している。底部はやや偏平で，口縁部は外湾気味に直立する。

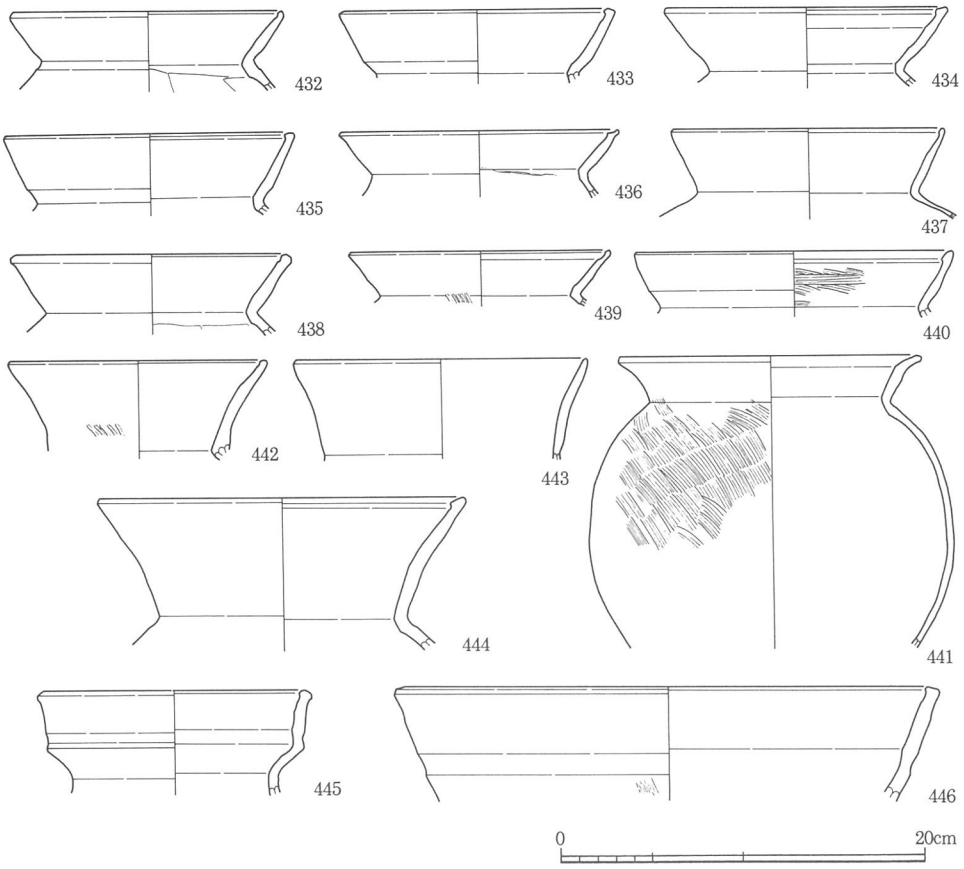
小型壺（416～422）

416・417は口径は10㎝以下の小型品で小型丸底壺の系譜で捉えられるものである。418は口頸部を「く」の字状に短く屈曲させ，底部はやや尖り気味である。419はやや長い口頸部のものである。

420は直口壺である。体部の外面はハケ，内面はケズリやナデによって仕上げる。421・422は短頸壺である。421は422に比べると小型で，口縁部は若干外湾しながらのびる。



第58図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物19



第59図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ層出土遺物20

甕（423～427・432～441）

小型品（423～427）と口径14㎝を越える一般的な大きさのもの（432～441）がある。

後者は，いずれも「く」の字状に短く屈曲させた口縁部をもつが，わずかながら内湾するもの（432～437・440），直線的にのびるもの（438・439），外反させるもの（441）に細分される。出土の多いものは前二者で，頸部と体部の間に強いナデを施し，端部は肥厚させている。

小型品は，口縁部がやや立ち気味にのびる傾向が看取され，端部はわずかに肥厚させるものとそのままおさめるものがある。また，小型品では口径に対して口縁部がやや高く，壺と区別しがたいもの（423・425）もある。

壺（442～445）

頸部が外方向に開きながらのびる形態がほとんどである。端部は肥厚させるもの（442・

444）とそのままおさめるもの（443）がある。445はいわゆる二重口縁の壺で，口縁部は頸部から屈曲して直立するものである。

鉢（446）

口縁部のみの残存であるが，大型の鉢と推定される。

製塩土器（428～431）

428は口径に対し器高が高く，全体をナデによって仕上げる。429～431は口径に対し器高が低く，内面の粗いハケ調整を特徴とする。

8，第Ⅶ層出土遺物（第60～77図，図版59～69・75）

第Ⅶ層出土遺物は後期の遺物も若干みられるが，ほとんどは古墳時代中期に属するものである。ここでは，中期の初期須恵器，軟質系土器，土師器を中心に図示した。

初期須恵器（第60～70図，図版59～66）

蓋（447～452）

448～450は高杯に伴うと考えられる。

448・449は天井部に紋様を巡らすなど先行形態の特徴を備えたものである。448は第Ⅵ層出土の②形態と比べると天井部はやや偏平で，ＴＧ232号の蓋Ａ－２類に該当する。449は448と類似した断面形を呈するが，天井部と口縁部の境界に巡る凸帯の端部やつまみの上端部は面をもっておさめる特徴がある。このような端部処理を行うものは当谷の第Ⅶ層下層で出土しているが，ＴＧ232号にはみられないものである。なお，自然釉の付着はいずれも内面に認められた。

450は天井部を紋様で飾らないなど，後出形態の特徴を備えている。断面形も前者と異なり，口径に対し口縁部が長く凸帯位置が高い。ただ，凸帯の張り出しは鋭く，後出時期でも先行する段階に位置づけられよう。

451は口径17㎝を測る大型品で，脚台付鉢などに伴うと推定される。器形や紋様等の特徴から先行形態と考えられる。447は口径11㎝を測る小型品で，天井部には沈線を巡らせる。452は口径に対し器高の高いもので，短頸壺などに伴うと推定される。自然釉の付着は外面に認められる。447・452いずれも高杯の蓋とは器形が異なり比較できないが，ＴＧ232号より後出すると考えられる。

高杯（453～477）

有蓋高杯（453～455）と無蓋高杯（456～469）があるが，無蓋高杯の出土比率が高い。

有蓋高杯は3点図示された。454は多窓透かしの脚部を伴うもので，ＴＧ232号有蓋高杯Ｂ類に該当する。455は深い椀状の杯部に，幅の広い長方形透かしを4方に配する脚部が伴う。他の高杯に比べ，たちあがりが極端に低く，受部も凸帯状にわずかにつくりだす程度で，蓋受としての機能には疑問が残る。類似例はＴＧ232号・土器溜りのいずれにもない。453は杯・脚部とも後出形態の特徴を備えたものである。

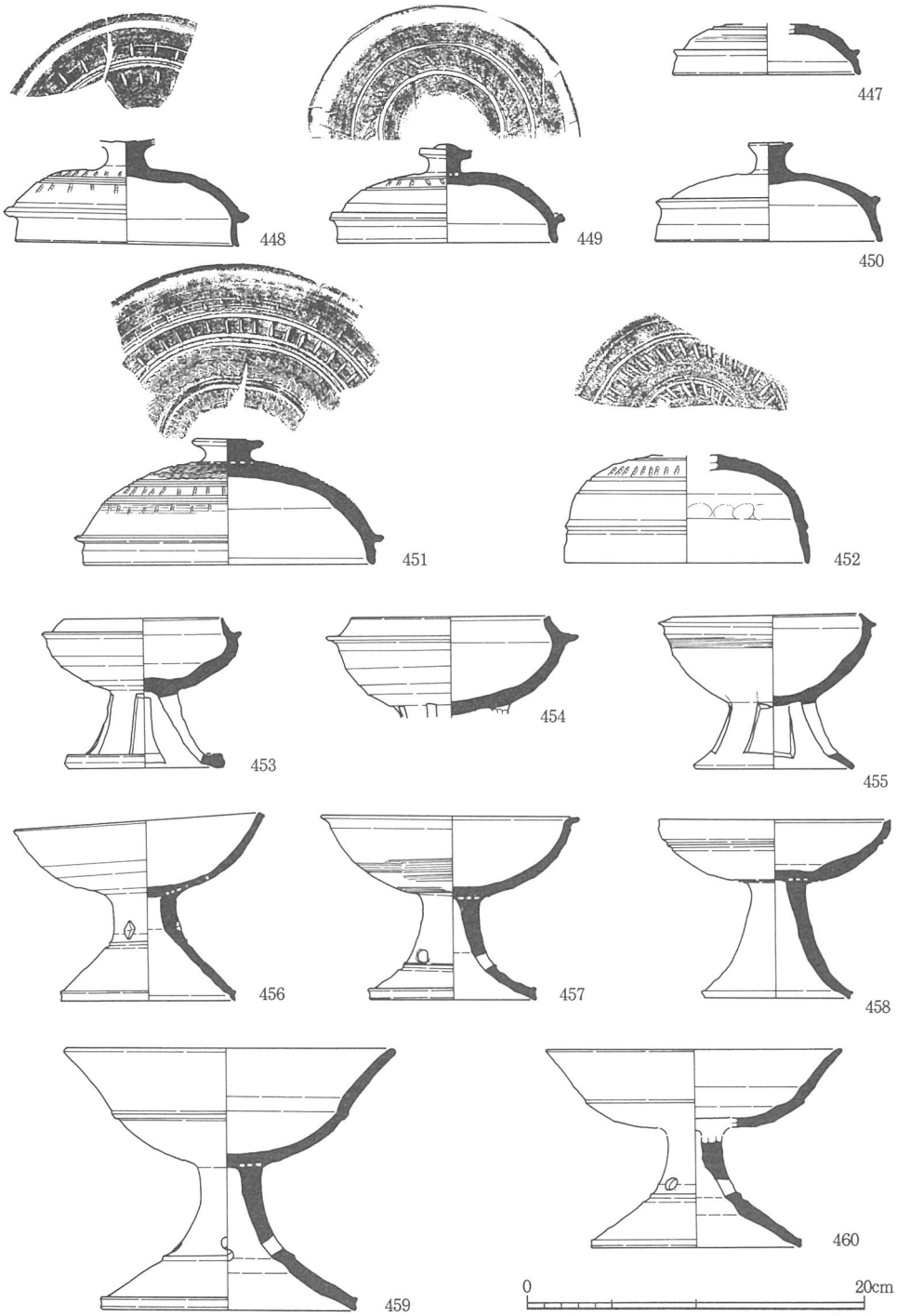
無蓋高杯は出土数が多く，脚部までの残存例も6点図示された。

456は先行形態にみられる浅い椀状の杯部のものであるが，脚部には他でみられない特徴を備えている。柱部が短く直立する，裾上端の凸帯位置が高い，5方に透かし状の菱形紋を施すなどの特徴である。菱形紋の類例はＴＧ232号（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』－土器番号535）にあるが，窯例は5個一列を単位として4方に配しており，456とは異なる。さらに，窯例は押し形によって施紋されたものであるが，456はヘラによって切り込んでおり，施紋方法も異なっている。

457は浅い椀状の杯部に，裾上端に凸帯を巡らす脚部が伴うもので，ＴＧ232号無蓋高杯Ａ類に類似する。ただ，456は杯口縁端部を短く外反させており，Ａ類とは若干異なっている。458は，短く直立気味にのびる口縁部と体部との境界に凸帯を巡らす杯部形態で，先行時期に含まれる可能性が高い。

459は口縁部を外反させた鉢状の杯部に，裾上端に凸帯を巡らす脚部が伴う。第Ⅵ層出土の276・277も同様の脚が伴うと推定される。土器溜り・ＴＧ232号に同形態の存在が認められるが，凸帯の位置，口縁の外反の度合，端部形態はいずれとも若干異なっている。ただ，脚部は先行形態に近い特徴を備えており，断言できないが先行時期に含まれるものと推定される。460は偏平な底部から口縁部が外方にまっすぐのびる杯形態である。ＴＧ232号に類例はないが，459同様先行形態には含まれるものであろう。また459・460は胎土に砂礫粒を多く含み，焼成は酸化焔により赤焼けの軟質に仕上がっている。杯の器形は土師器と似た部分があり，意識的に軟質に仕上げている可能性が高い。

468は杯部に耳をつける鉢形高杯で，ＴＧ232号・土器溜りいずれにもみられない形態である。時期の下るＴＫ216・208型式に同系譜の存在が知られているが，これらと比べると口径に対し杯部が浅い，口縁部が短い，透かしが5方に配されるなどの特徴が看取される。後続型式への継起性から考えて，後出時期に含まれると推定される。496は468と同形態の



第60図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物１

大型品である。

461～467は杯部の残存品である。

461～463は無蓋高杯の中では出土数の最も多い形態で，ＴＧ232号無蓋高杯Ｂ類に該当する。464は完形に復元された460と同形態と推定され，焼成は完全な還元焔による須恵質ではなく瓦質に仕上がる。465は口径12.4㎝の小型品である。

467は土師器的な器形の特徴を有するものである。法量に差はあるが器形・焼成の特徴はＴＧ232号のＰ類と類似する。466は須恵器に含めたが，土師器の可能性が高いものである。

470～477は脚部のみの残存品である。

470～474は脚柱と大きく開く裾との境界付近に凸帯を巡らせるもので，ＴＧ232号の脚Ｅ類に該当する。ＴＧ232号では最も出土数の多い形態であるが，当谷でも同様の傾向がうかがわれた。475は細長い脚柱の上部と裾の２段に円形透かしを配するもので，出土例は少ない。476は３方に配された４個一単位の切込み状紋様を特徴とする。ＴＧ232号にみられる菱形の押し形を配したもの（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』－土器番号535）から形態変化したものと推定される。

477は器形・調整に土師器の特徴を備えたものであるが，瓦質に仕上がっているためここでは須恵器として扱った。土師器の影響を受けて製作された須恵器ではなく，土師器そのものを窖窯で焼成したと推定される。

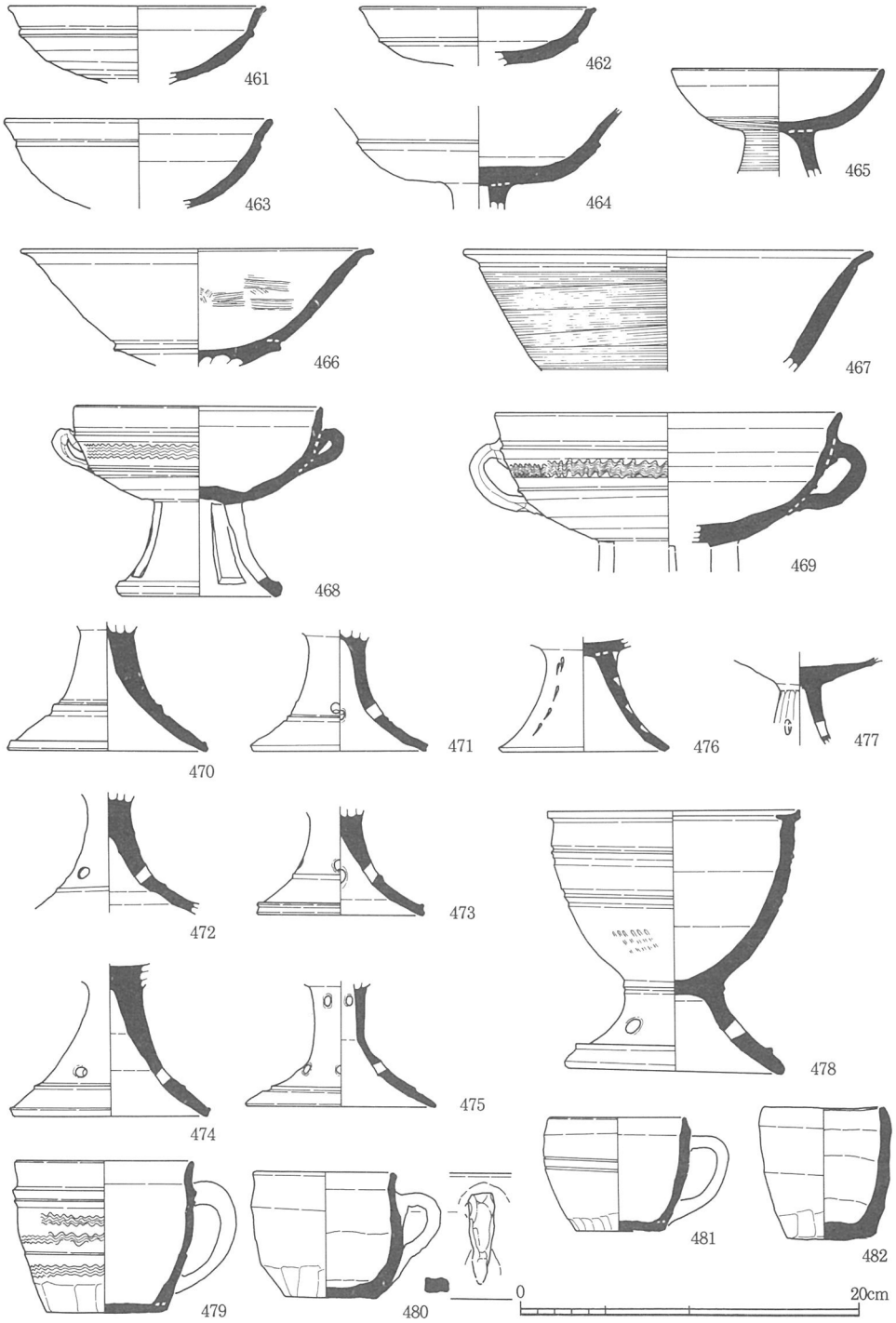
把手付椀（479～481）

479は口径と底径に大きな差がなく，体部の内湾度合の小さいものである。第Ⅵ層にも同様の特徴を備えたものがみられ，当谷における把手付椀の代表的な一群とされる。

480・481は小型の製品である。480は体部下半に最大径があり，口縁部を緩やかに外反させる。把手は板状のものが採用されるが，紋様や凸帯による装飾はなく，調整もやや粗雑である。均整のとれた製品とはいい難い。481は体部上半に最大径があり，口縁部は体部からそのままのびておさめている。紋様や凸帯はないが，底部のヘラケズリは細かく施され全体の調整も丁寧である。把手は欠損するが体部に残された接合痕跡より，上側は貼付けでなく体部の器壁まで押し込んでいることが観察される。

椀（482）

口径に対し器高が高く，コップ状を呈する。紋様はなく，内面には粘土の巻き上げ痕跡が観察される。



第61図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物２

脚台付鉢（478）

口径14.8㎝，器高15.2㎝を測る。鉢部は深い椀状を呈し，外面には２条の凸帯を巡らす。口縁部は受部状に面をもつ特異な形態で，外側は短く屈曲し端部を上方につまみ上げるように拡張させ，内側はほぼ水平に張りだし端部を鋭角に仕上げている。脚部は鉢部に対して低い重厚なつくりである。裾端付近と脚上端には凸帯を巡らせ，その間に円形透かしを配する。類例のないものであるが，凸帯など端部の稜の鋭さ，脚上端に巡る段状の凸帯などから判断して先行時期に伴うと推定される。また，478の胎土を観察すると，鉢部は精製した粘土であるが，脚部には砂礫粒が多く含まれていた。鉢部と脚部で別々の粘土を使用したことがうかがえる一例である。

瓶（484～486）

484は，口縁部が頸部から段をつくってのびる特徴から瓶の口頸部片と判断した。485・486は底体部片である。いずれも最大径は体部中央付近に位置し丸みを持つが，486は最大径がやや上方にあり若干肩が張った感を受ける。底部の内面調整は先行形態に顕著にみられるナデ仕上げである。

小型壺（483・487～489・491）

483は体部最大径が6.6㎝のミニチュア的な小型壺で，体部外面にカキ目が施される。口頸部は欠損するが直線的に開く形態と推定される。

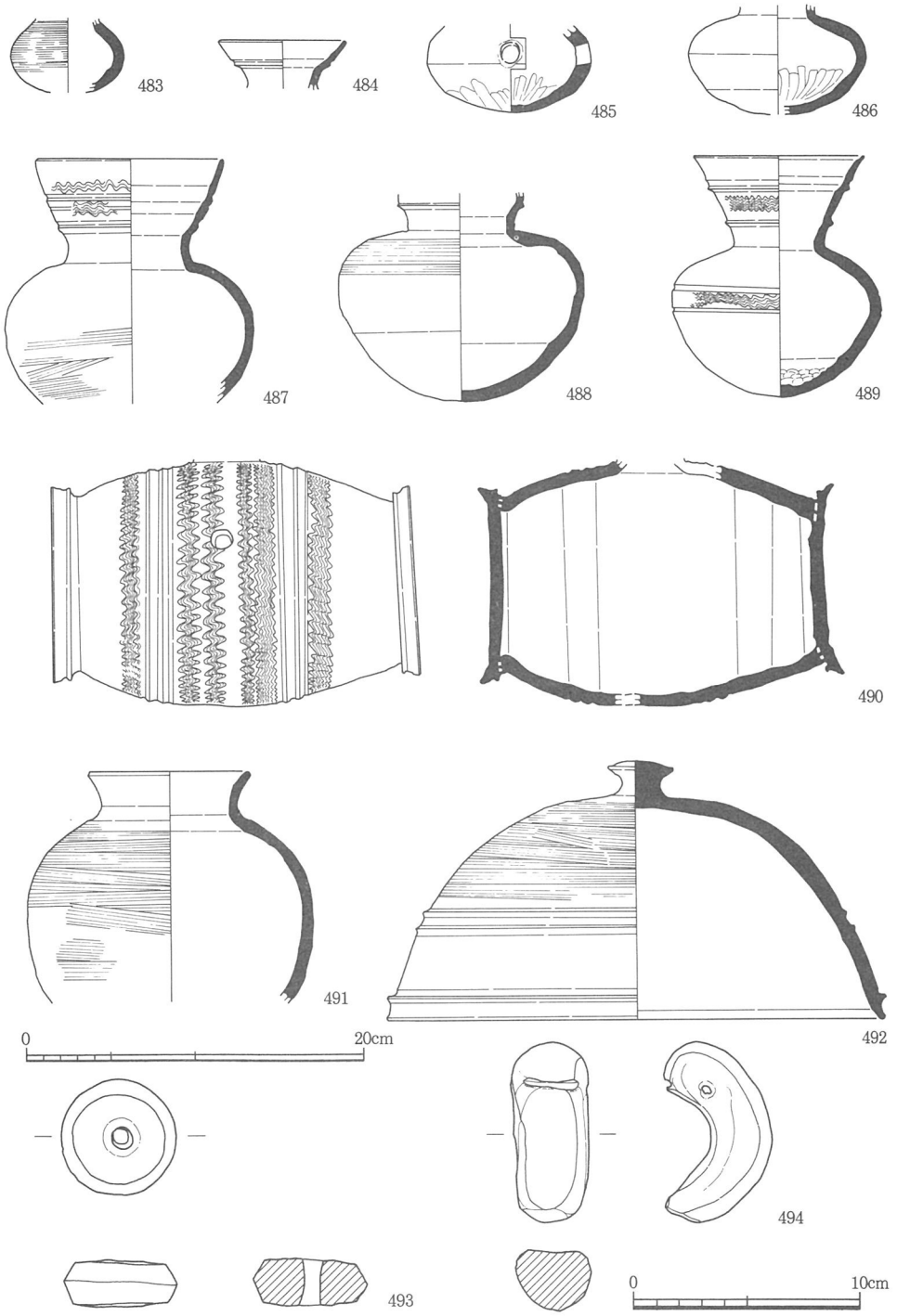
487は短い頸部から段をもって長くのびる口縁部が特徴で，類似の口頸部はＴＧ232号に存在する。体部の特徴も先行時期に多い形態で，全体に膨らみをもつ。焼成は不良である。488も487と似た口縁部をもつと推定されるが，体部肩の張りは大きい。

489は後出時期の形態である。口頸部が直線的に開き，体部全体の膨らみも小さい。体部中央付近には沈線で囲まれ波状紋が施される。

491は短く外反させる口頸部が特徴である。小型壺とするより，体部の法量からは壺とすべきものかもしれない。また，焼成は軟質で土師器の影響を受けた製品の可能性も指摘される。

樽形瓶（490）

樽形瓶は当谷できわめて出土数の少ない器種である。490は口頸部を欠損するが，体部は図上でほぼ完形に復元された。樽形瓶の出土は土器溜りで確認されているが，490はこれらに比べ胴部の膨らみの小さいものである。後出時期の中でも先行する段階の特徴がうかがえよう。



第62図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物３

大型蓋（492）

口径29㎝，器高15㎝を測り，天井部は丸みをもつ。装飾は，天井部にカキ目を施し，天井部と口縁部の境界，口縁端部に凸帯を巡らすシンプルなものである。つまみは大型蓋の割に小さく，頂部を盛り上げる。口径20㎝を越える大型蓋は土器溜りにもあるが，492と類似した特徴を備えたものはない。

器台（495～507）

図示したものはいずれも高杯形器台であるが，完形品に復元されたものはない。

杯部の残存品は４点（495・496・504・505）図示した。いずれも口縁部を「く」の字状に外反させる共通した特徴を有するが，体部の断面形はそれぞれで異なる。

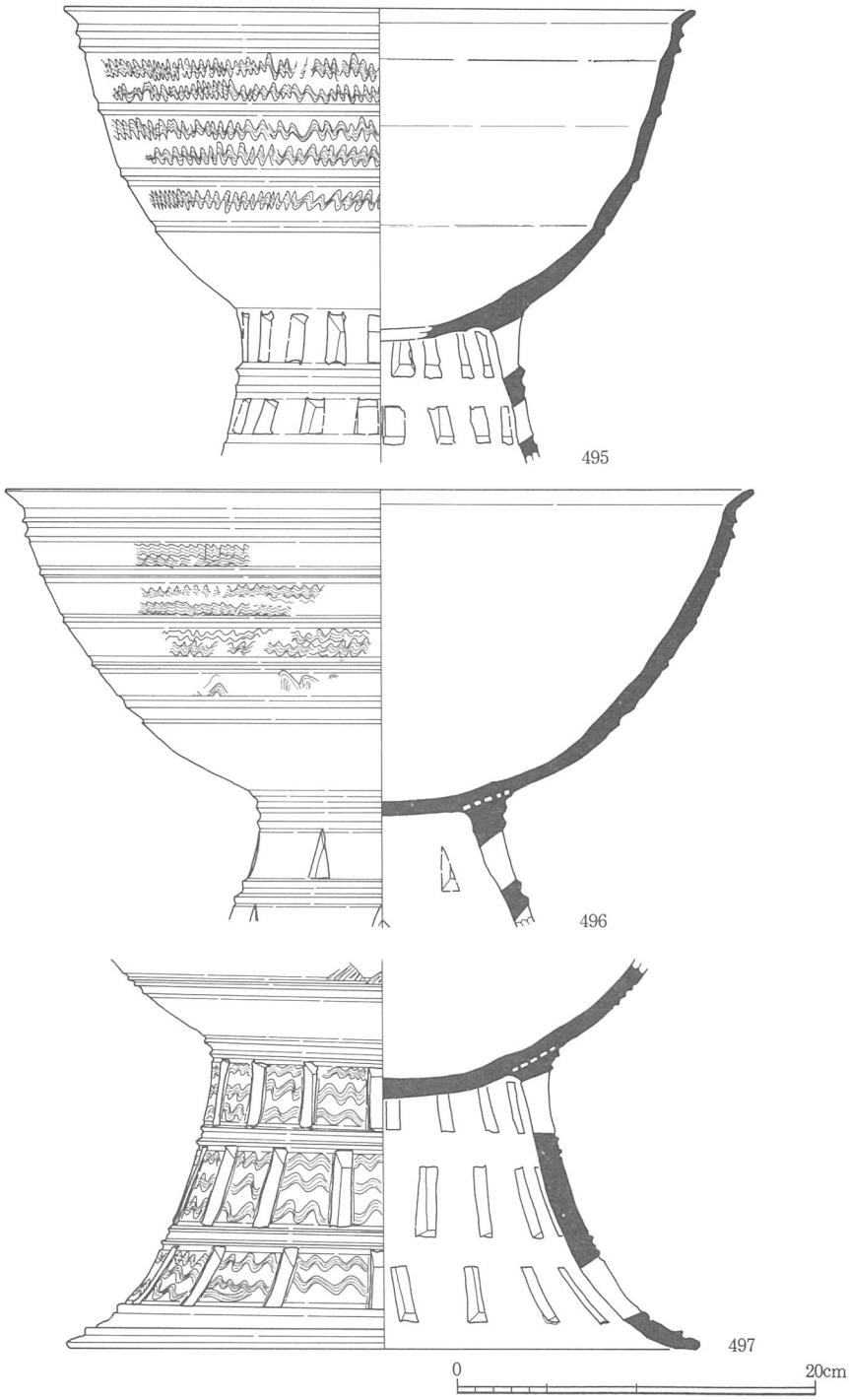
495は口径に対し杯部の深いものである。外面は波状紋で飾られるが，施紋状況は粗雑で，紋様帯を区画する凸帯も稜が鈍く低い。脚部は２段目まで残存し，凸帯で区切られる区画が狭い，区画には波状紋などの紋様は施されない，透かし孔の穿孔は粗いなどの特徴が看取される。全体に均整のとれた優品とはいい難い製品である。

496は口径に対して杯部の比較的浅いもので，脚部には三角形透かしを千鳥状に配する。三角形透かしは，土器溜りの器台にみられるが，杯の紋様帯の段数，脚部の形態など細部は異なっている。

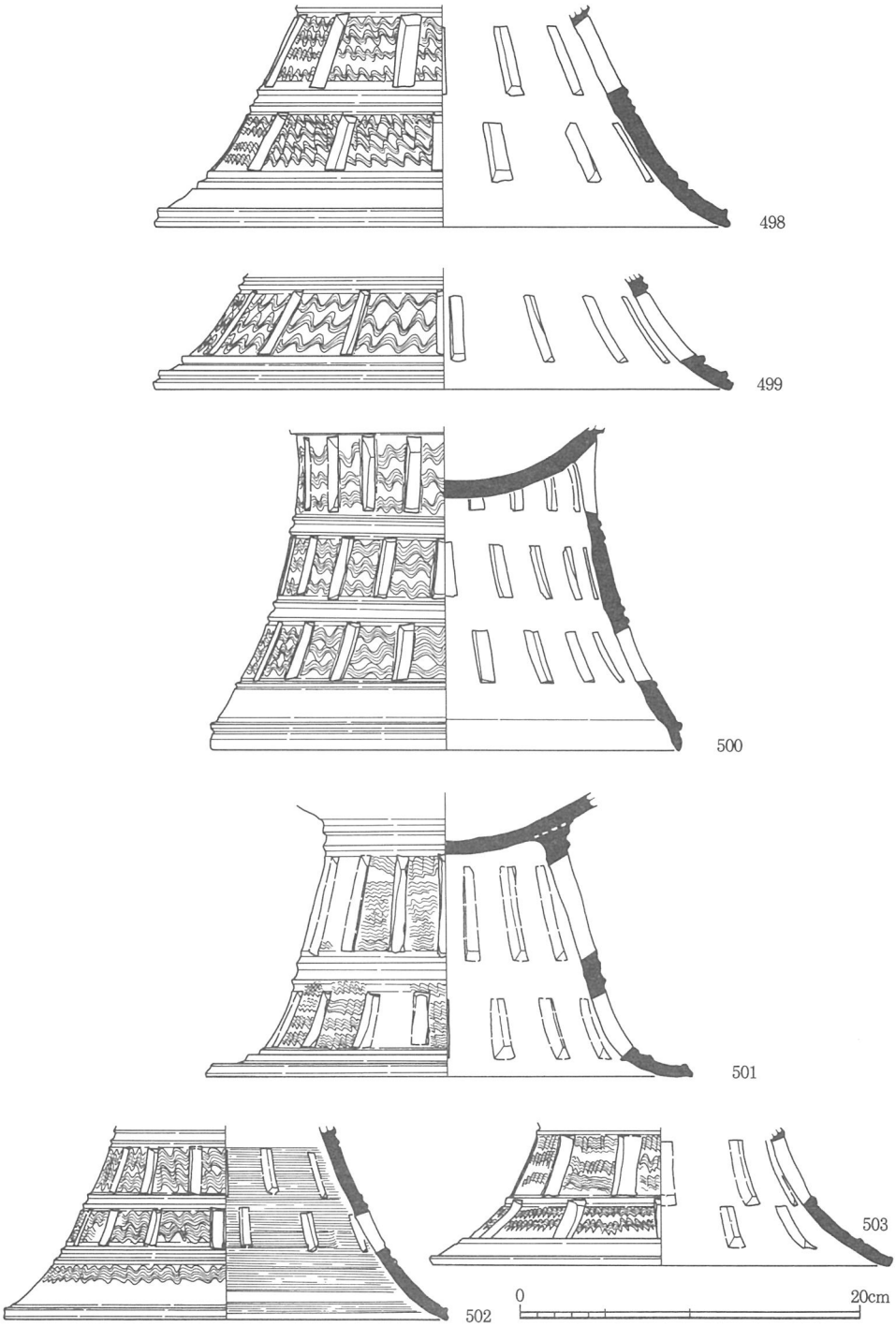
504は底部から屈曲して直線的に開く形態で，断面形は逆台形を呈する。器形の類似例は土器溜りにあるが，波状紋は単位が大きく様相を異にしている。この紋様はＴＧ232号器台Ｇ類にみられる山形紋から変化した可能性が高い。

505は体部の下半の膨らみが大きいものである。凸帯の稜は鋭く，紋様も丁寧に施紋されており，大きく焼き歪んでいるが均整のとれた優品であることがうかがえる。杯部の断面形態はＴＧ232号高杯形器台Ａ－１類に該当するが，他にも口縁部の外反は鋭く内面には稜がつく，組紐紋を採用するなど先行形態の特徴を多く備えている。

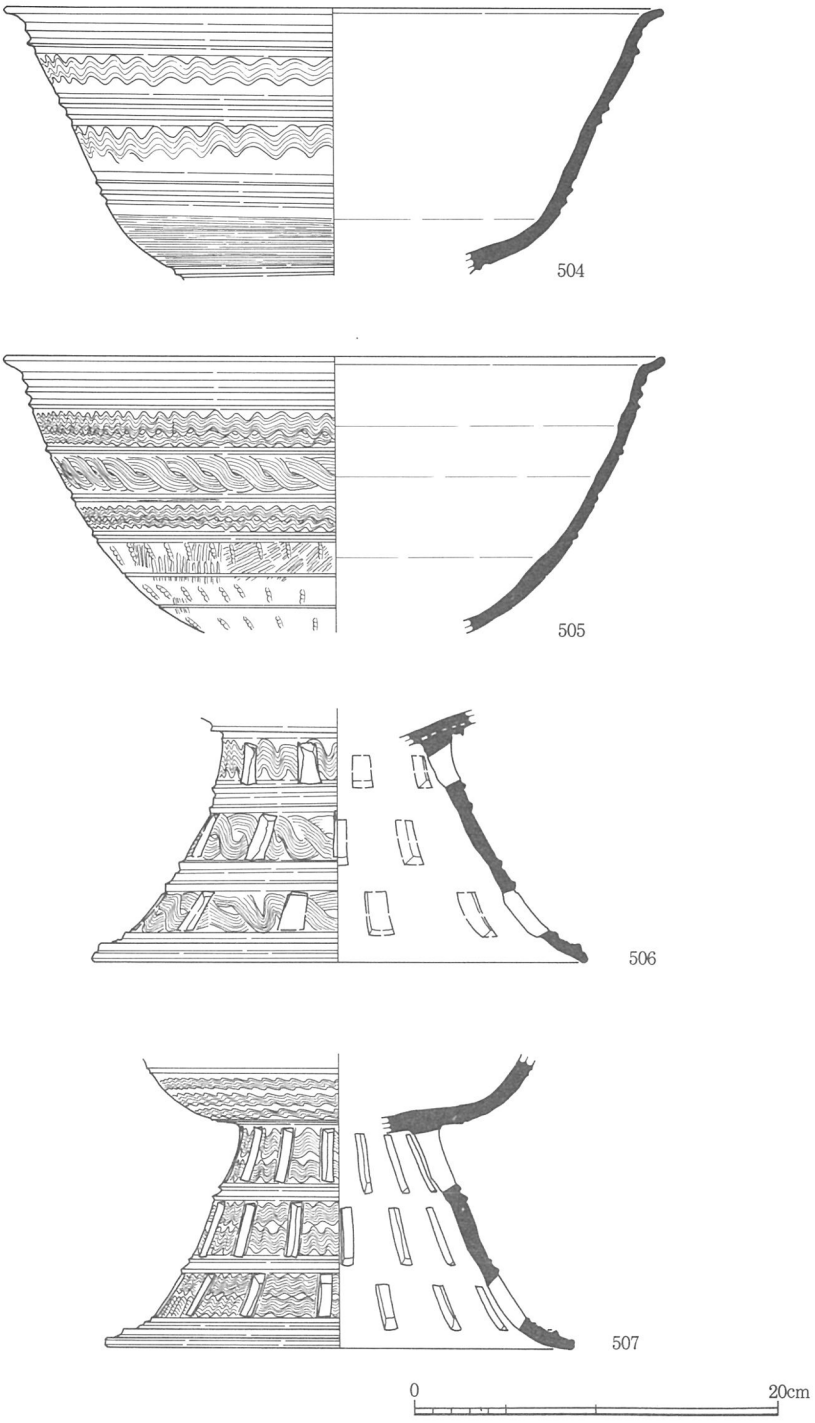
脚部は９点図示した。このうち他遺構でも出土数の多い大きさの497～500を概観すると，杯部との接合部である脚上端径には大きいもの（497・500）と小さいもの（498・499）に大別される。さらに脚裾の形状からは，大きく開くもの（497～499）と裾端が屈曲して直立するもの（500）に細分される。しかし，いずれも短冊形透かしを千鳥状に配するなど先行形態の特徴を備えており，これらの形態差は大きな時間差を反映したものでないことがうかがえる。ただ，497・500にみられる太く・短い脚部はＴＧ232号ではほとんどみられないものである。他器種同様ＴＧ232号との様相差にも注目されよう。



第63図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物４



第64図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物５



第65図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物６

小型の501～503・506・507はいずれも先行形態の特徴がみられる。

また脚部では，前述の495・496でみられた三角透かしや脚部に紋様を施さないものは，少ない。これらが主となる製品ではないこともうかがえよう。

壺（508～518）

先行形態が多くみられる。

508・509は口頸部を紋様で飾り，紋様帯を凸帯で区切るものである。

510・511は頸部に１条の凸帯を巡らせるもので，ＴＧ232号の中では出土数の多い形態のひとつである。このうち511は完形に復元された。底体部は，最大径が中央付近に位置し球形に近い丸みをもつ。外面には縄席タタキを残存させ，内面のアテ具痕は丁寧なナデにより消される。

512はいわゆる二重口縁の壺で，ＴＧ232号壺Ｇ類に該当する。513・514は口頸部を弧状に短く外反させる形態で壺Ｋ類に該当する。513には平行タタキ，514には格子目タタキが施されている。

515～518は，いわゆる中型甕と呼称されているものである。口縁端部の直下に凸帯を巡らす単純な形態で，大型甕の口頸部形態と共通する。

大型甕（519～526）

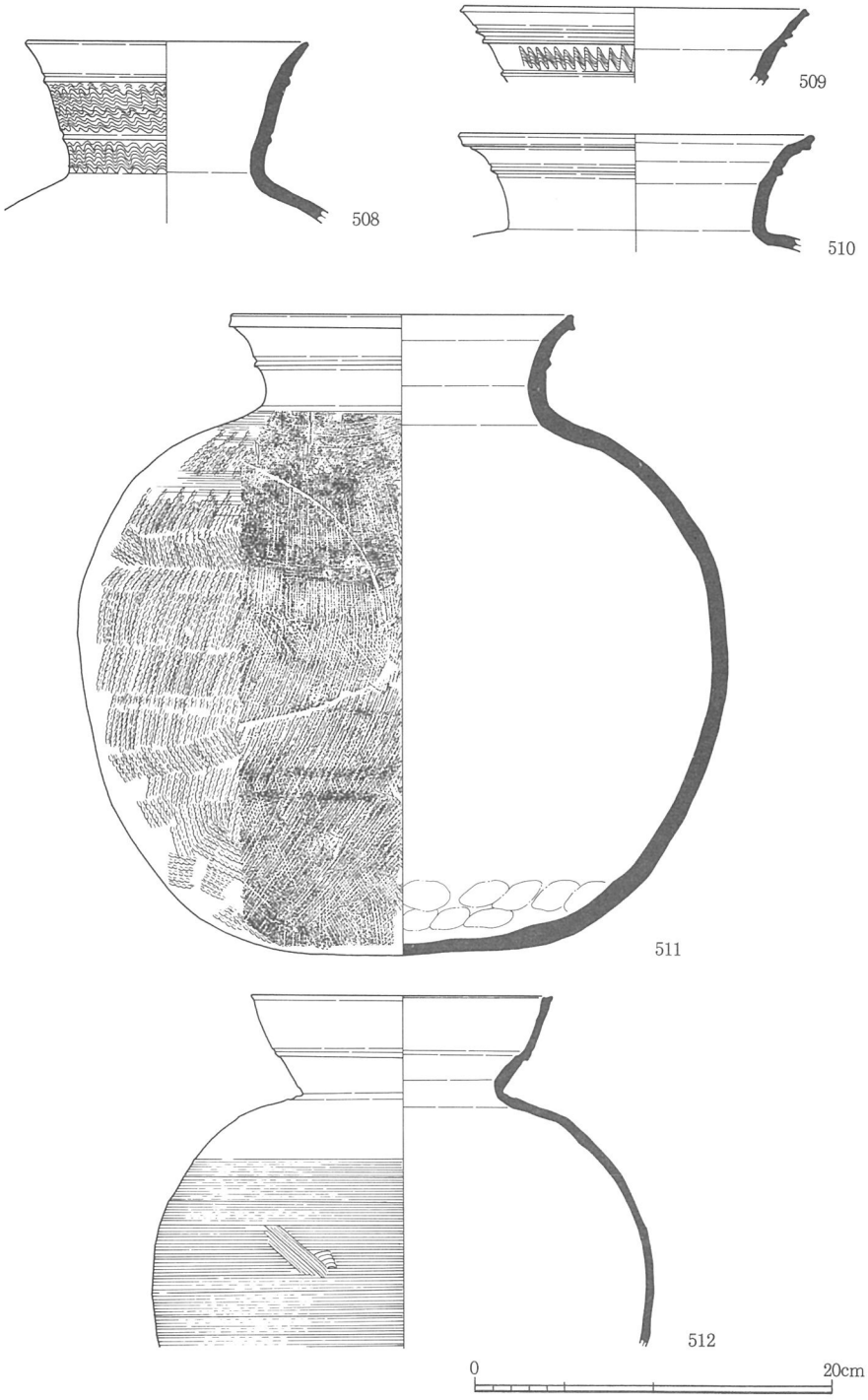
口縁端部は口唇状に丸くおさめるもの（519・520・523～525）と面をもっておさめるもの（521・522）に大別される。ＴＧ232号では前者がＡ類，後者がＢ類とされ，凸帯の形状によりさらに細分されている（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』を参照）。この分類基準によると，519・524はＡ－１類，520はＡ－３類，521・525はＡ－２類，521はＢ－３類，522はＢ－１類に該当する。

ＴＧ232号ではＡ－１類の出土数が最も多いが，当層では出土数が限られ出土の傾向は把握できなかった。また，520・525の頸部にカキ目，523・526はハケ目，523の体部には縄席タタキが観察されるが，いずれもＴＧ232号で顕著にみられる特徴である。

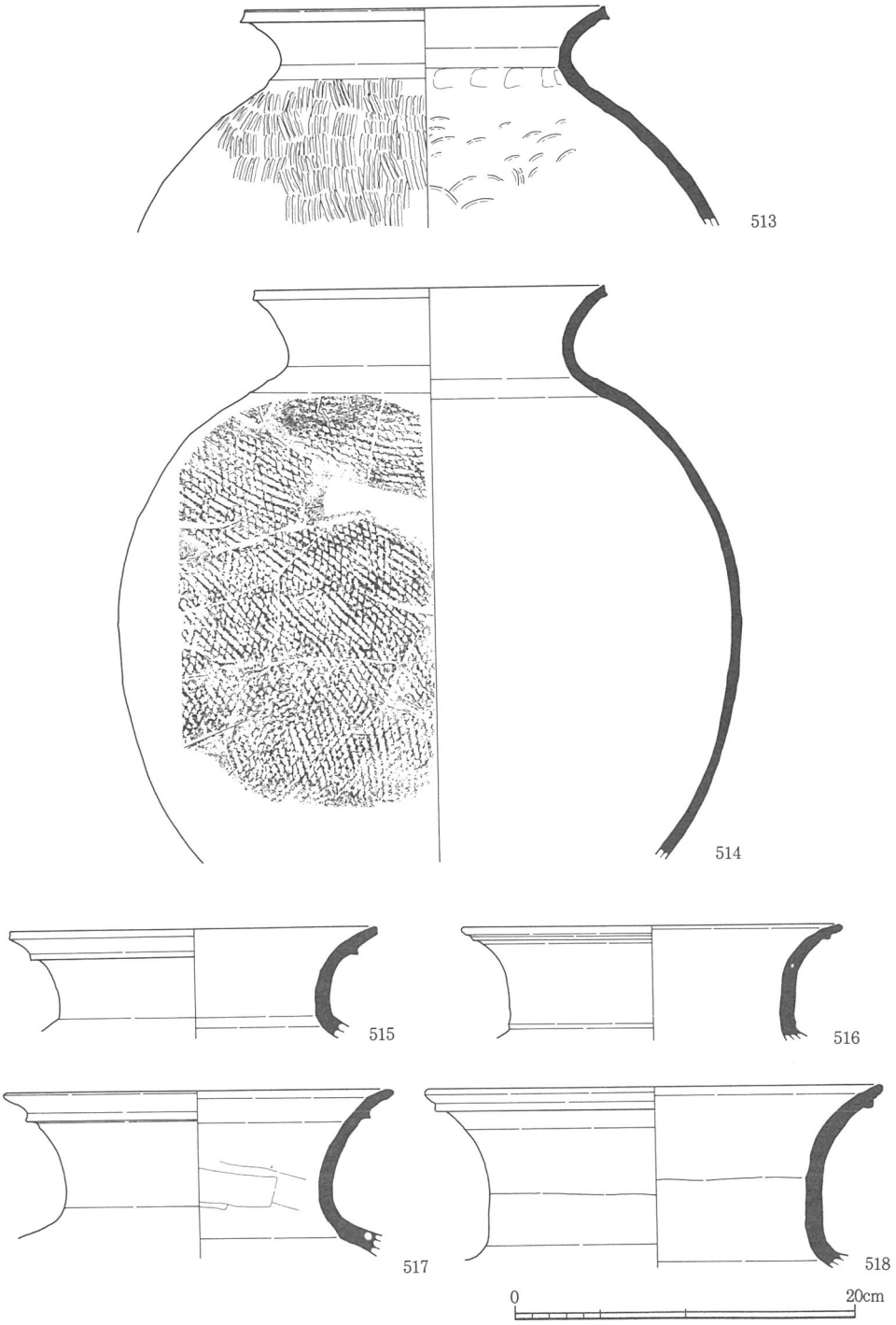
土製品（第60図493・494，図版75）

493は須恵質の紡錘車で，直径5.1㎝，厚さ2.1㎝を測る。算盤玉状を呈し，側面には明確な稜がある。調整は上・下面がナデ，側面がケズリである。

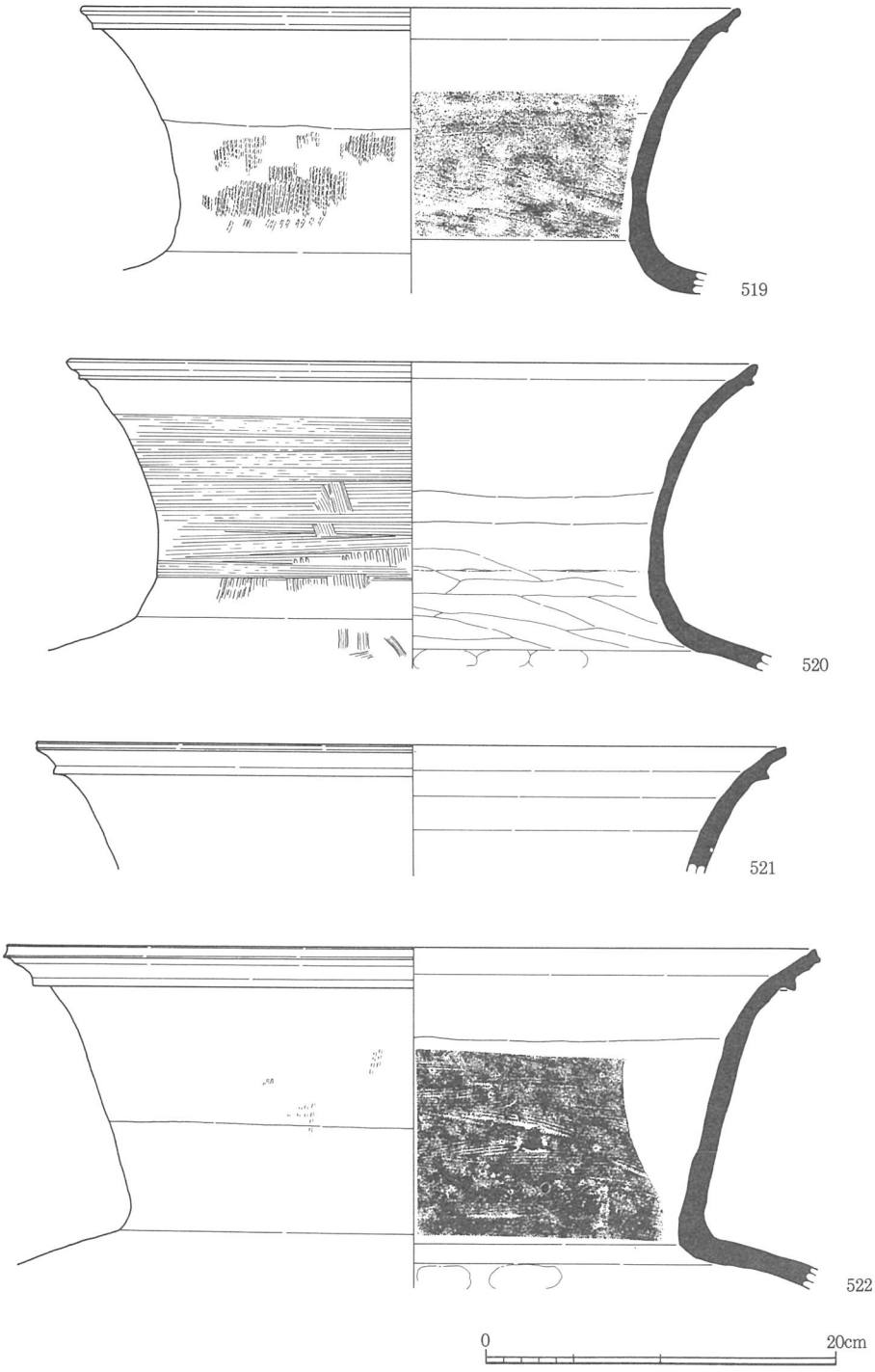
494は土師質の勾玉形土製品である。全長８㎝を測る大型品で，仕上げの調整は粗いナデによる。



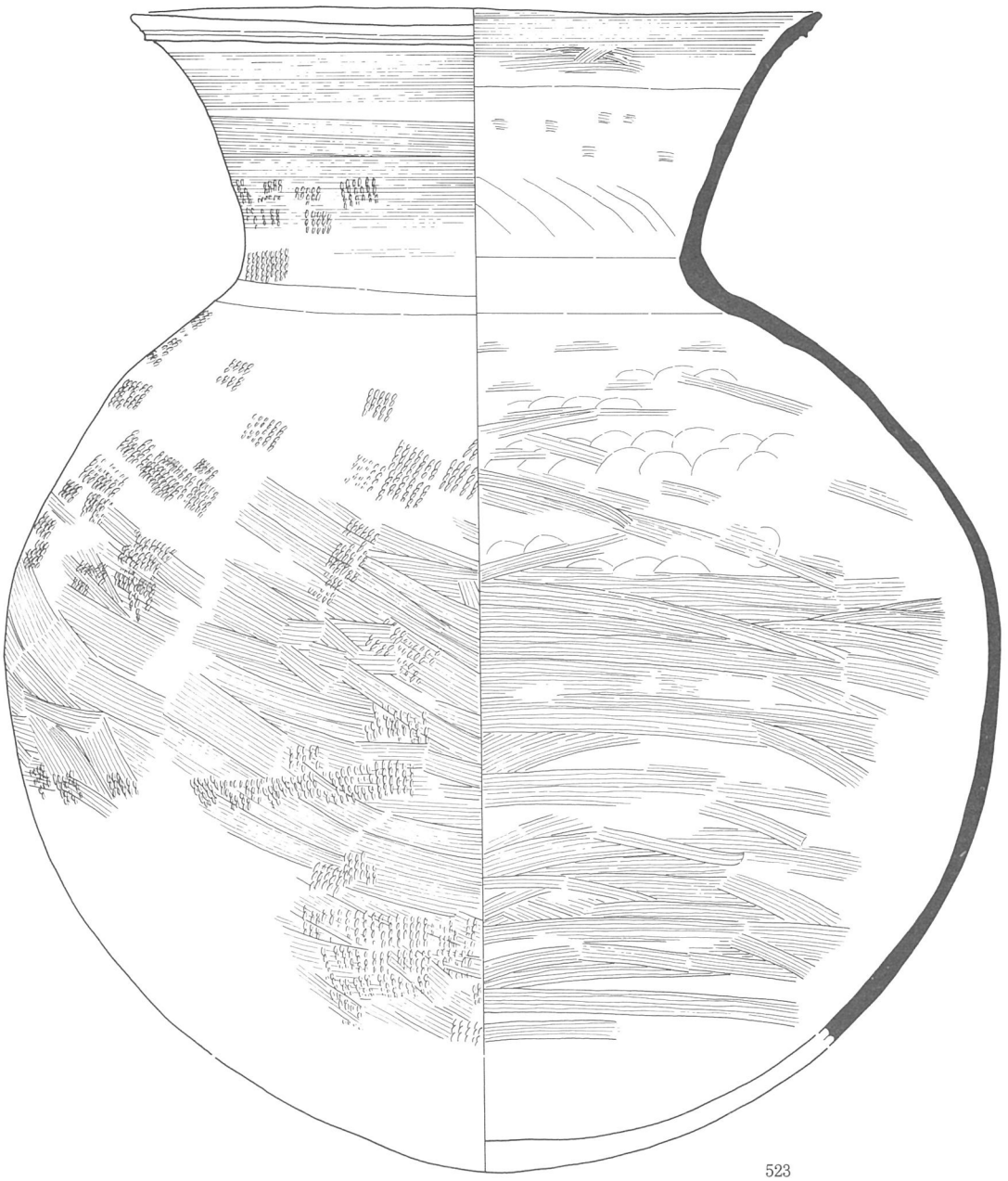
第66図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物７



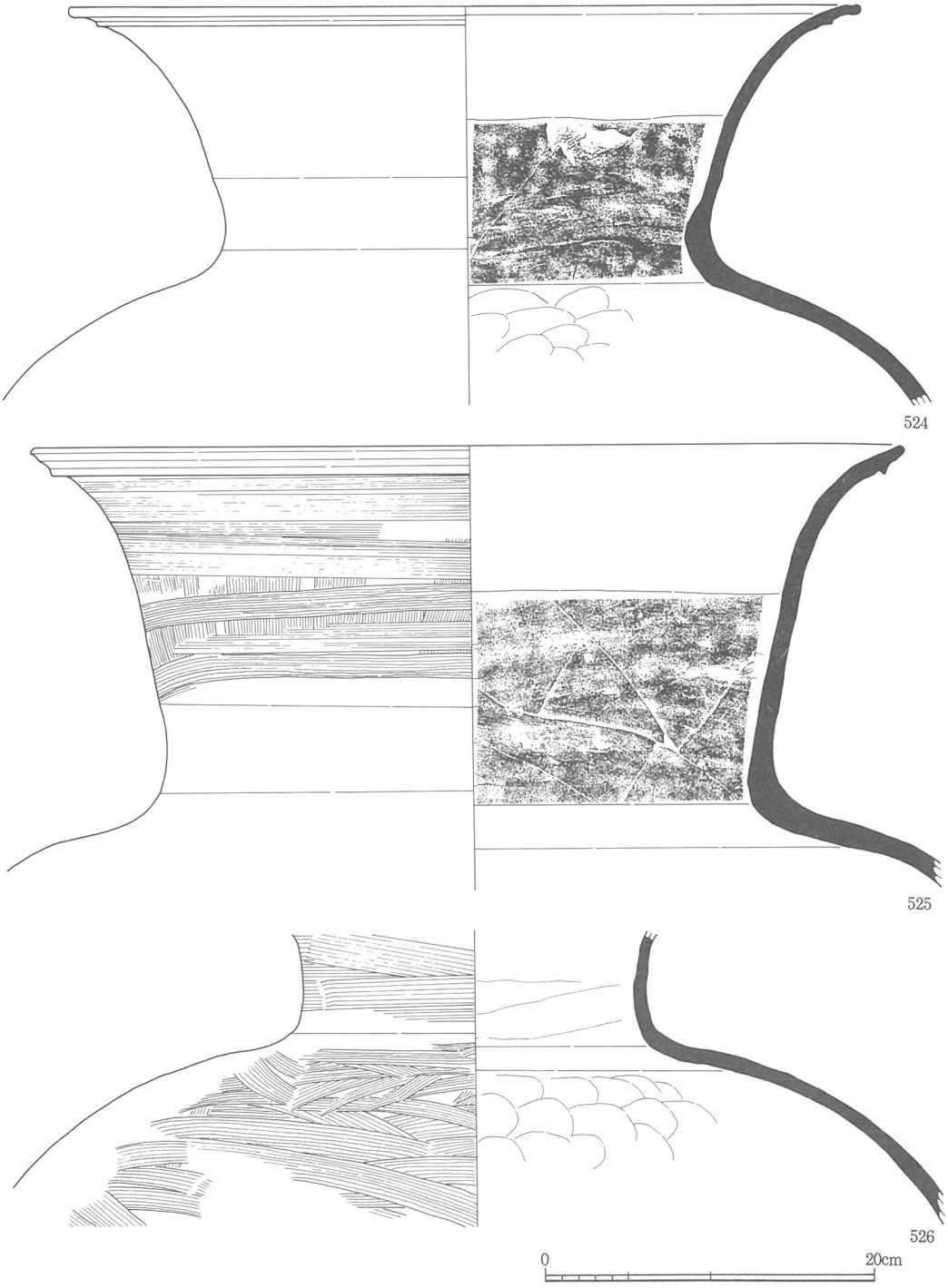
第67図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物８



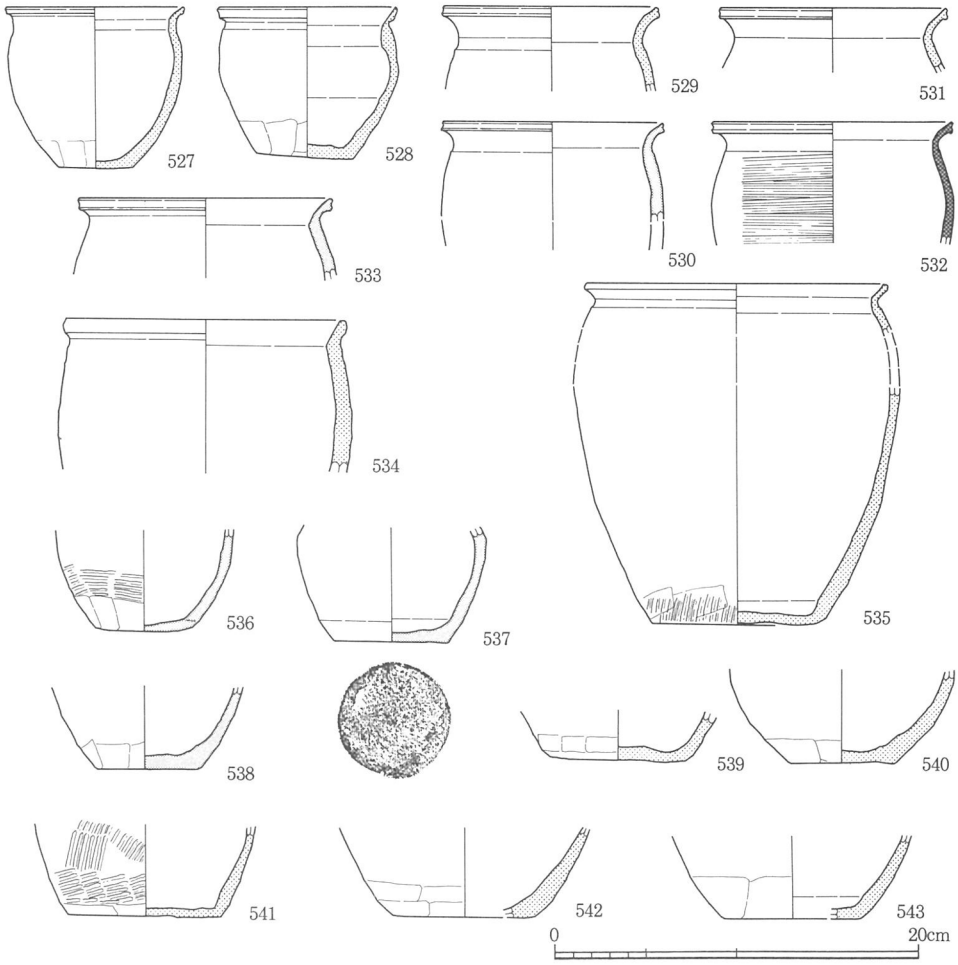
第68図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物９



第69図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物10



第70図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物11



第71図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物12

軟質系土器（第71～74図，図版67・68）

平底鉢（527～543）

口径からは10㎝前後（527・528），12～13㎝（529～532），14～15㎝（533・534），16㎝を越える（535）４種に大別されるが，このうち出土数の最も多い大きさは12～13㎝のものである。この出土傾向は第Ⅵ層でも同様であり，口径12～13㎝のものが一般的に多く使用されていたことがうかがえる。

口縁部形態は，「く」の字状に短く屈曲させ，端部には凹線状にくぼむ面をもつものが一般的で，丸くおさめるもの（534・535）や外反の緩やかなもの（534）は少ない。体部は，膨らみの大きいものと小さいものがあるが，最大径は土器溜りのものより上部に位置

するものが多いようである。この傾向は底部片でも看取される。また，体部の外面調整はナデによって仕上げるものが多いが，体部外面にカキ目を施すものもある。カキ目で仕上げるものは当谷における前調査でも出土しているが，当谷以外では出土のほとんどない調整方法で，先行形態の特徴として認識される。

焼成は土師質で軟質に仕上げるものが多い。ただ，還元焼成まで及んでいないが，硬質のものもあり窖窯による焼成をうかがわせるものもある。

長胴甕（544～548）

いずれも口縁端部は面をもっておさめている。胴体部の形状は，最大径が中央より上部にあり上半部に張りがあるものと中央付近に位置し楕円を呈するものがあるが，総じて胴部の膨らみの小さい先行形態の特徴を備えたものが多い。外面調整は平行タタキ，縄蓆タタキを残存させるものの他，カキ目や螺旋状沈線で飾るものもみられる。縄蓆タタキや螺旋状沈線は当谷でその出土が顕著なものであり，半島の類例から考えても先行形態の特徴として認識される。

焼成は土師質で軟質に仕上げられたものの他，硬質や瓦質に仕上がり窖窯による焼成がうかがえるものもある。

堝（549～551・553・554）

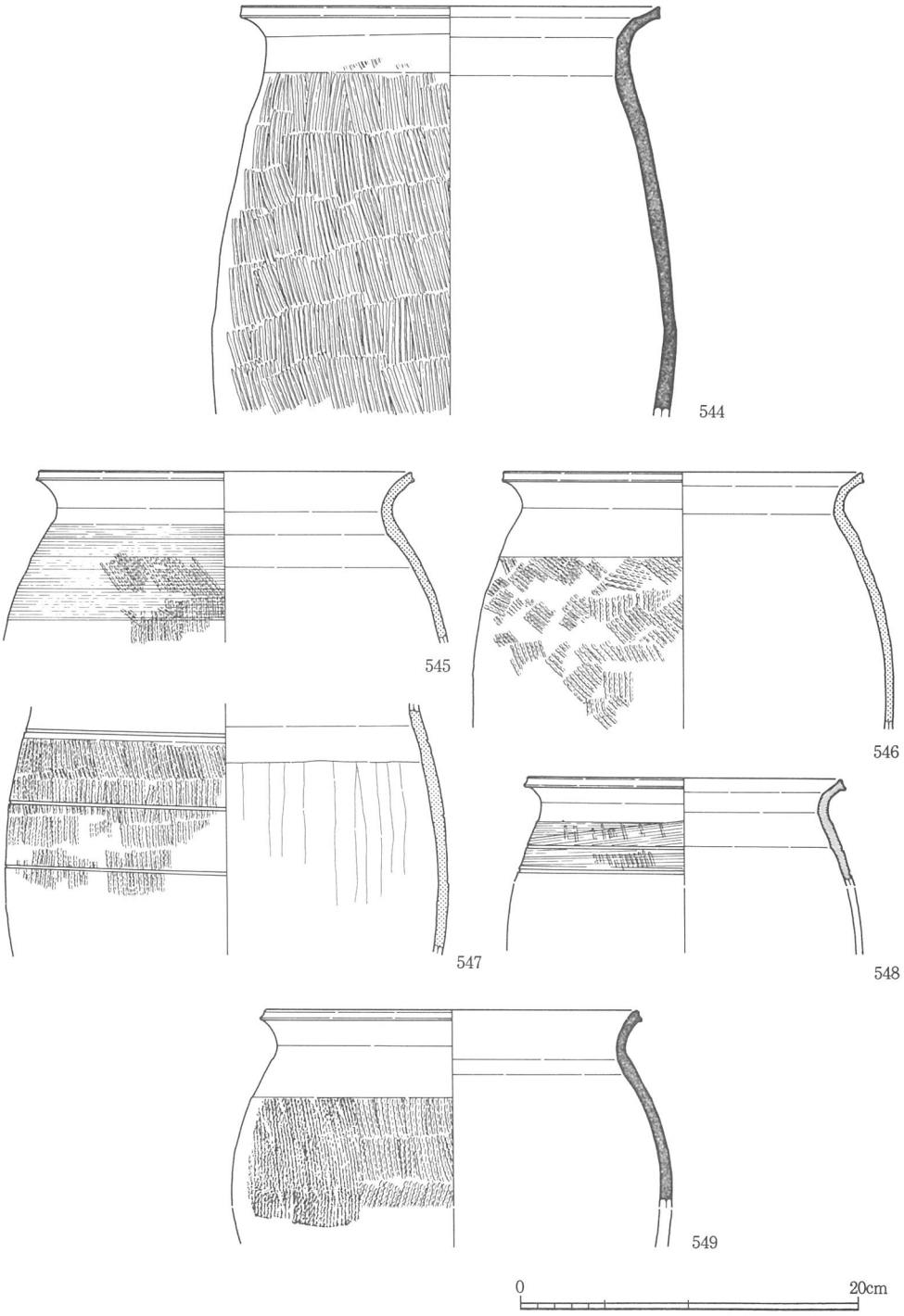
堝も先行形態の特徴を備えたものがほとんどである。体部の形状は，膨らみがある深い底体部（549～551）と体部上半が開く浅い底体部（553・554）に大別される。注ぎ口は後者のみに認められる。なお，549は長胴甕，551は甑の可能性もある。

深鉢（552）

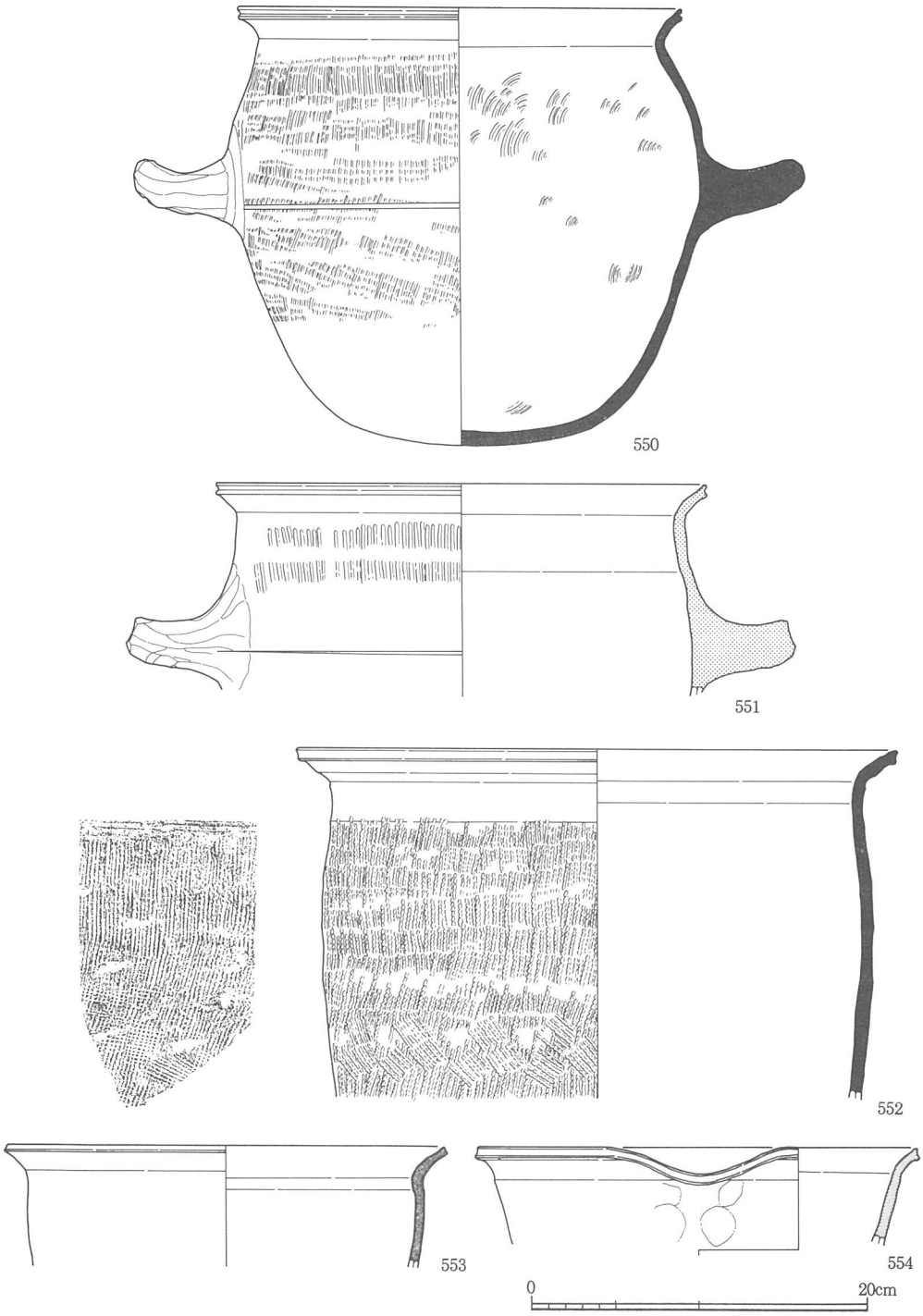
口径35.4㎝を測り，軟質系土器の中で容量の最も大きい器種である。体部はほとんど膨らみをもたずにのびあがり，口縁部は短く屈曲させている。体部には縄蓆タタキを施し，内面のアテ具痕は丁寧にナデ消す。類例はＴＧ231号（1445）や土器溜りにあるが，体部の形状はＴＧ231号のものに近い。先行形態に位置づけられる。

甑（555～557）

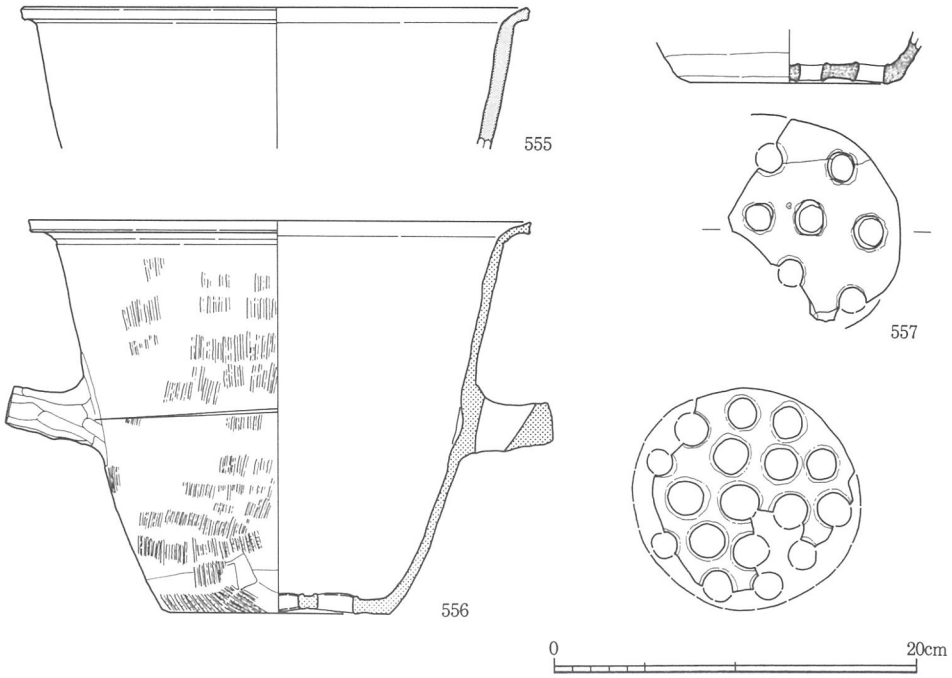
いずれも先行形態の特徴を備えている。556は完形に復元された。甑の中では器高は低く，全体の形状は体部に膨らみがなく逆台形を呈する。蒸気孔は当谷で多くみられる小円孔を十数個巡らす形態である。555も556と似た体部の形状を呈すると推定される。557は556同様小円孔を巡らすものである。なお，第Ⅶ層でも細長の台形状孔を放射状に穿つもの（第Ⅵ層367参照）も出土しているが，その数は少ない。



第72図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物13



第73図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物14



第74図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物15

土師器（第75～77図，図版68・69）

高杯（558～573）

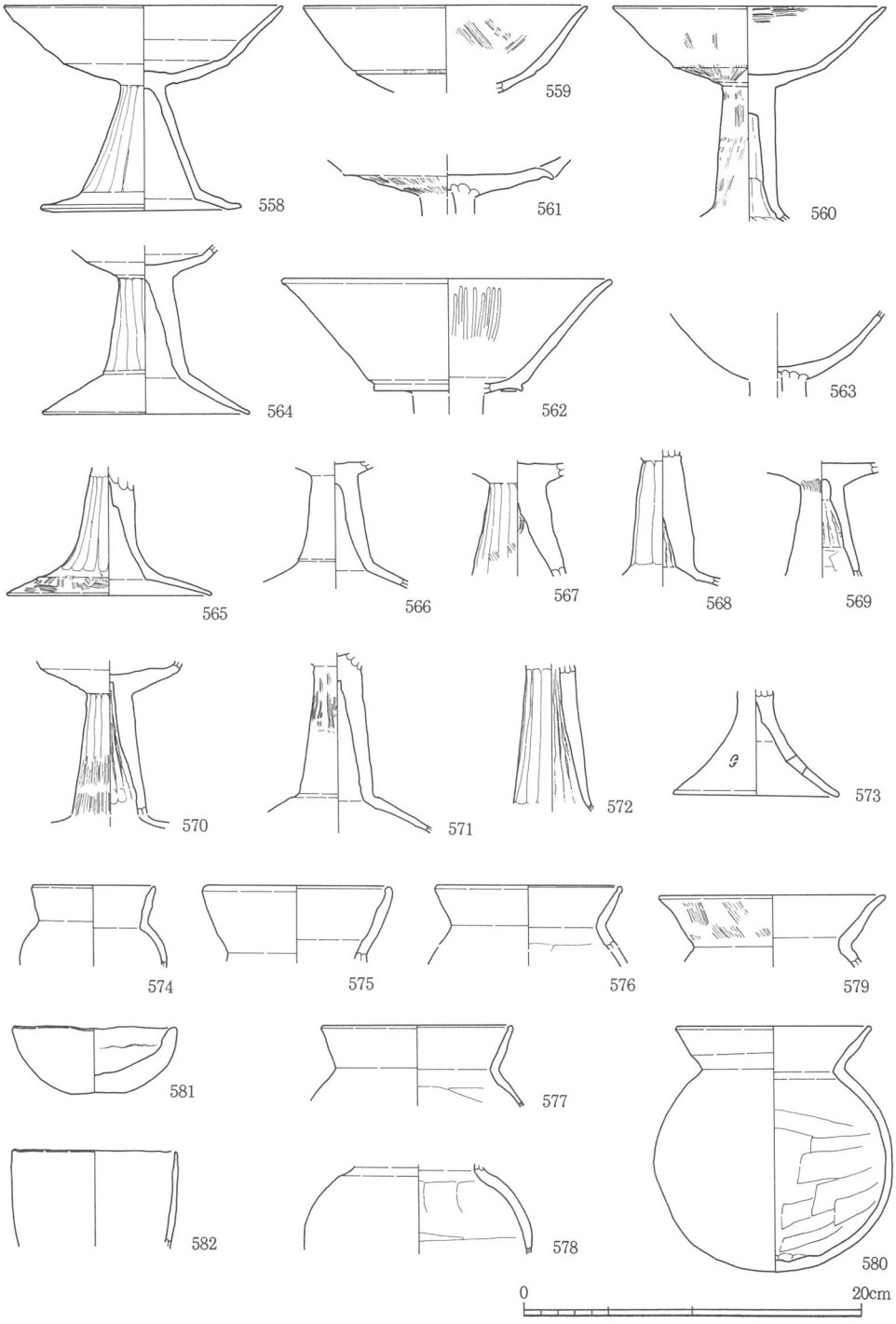
完形に復元されたものは少ない。

杯部の形態は，浅い底部から口縁部が直線的にのびるもの（559～560）と平らな底部から鋭く屈曲して口縁部が長くのびるもの（561・562）に大別される。さらに前者形態は屈曲部の稜の曖昧なもの（558），鋭いもの（560），小さな段を有するもの（560）に細別される。

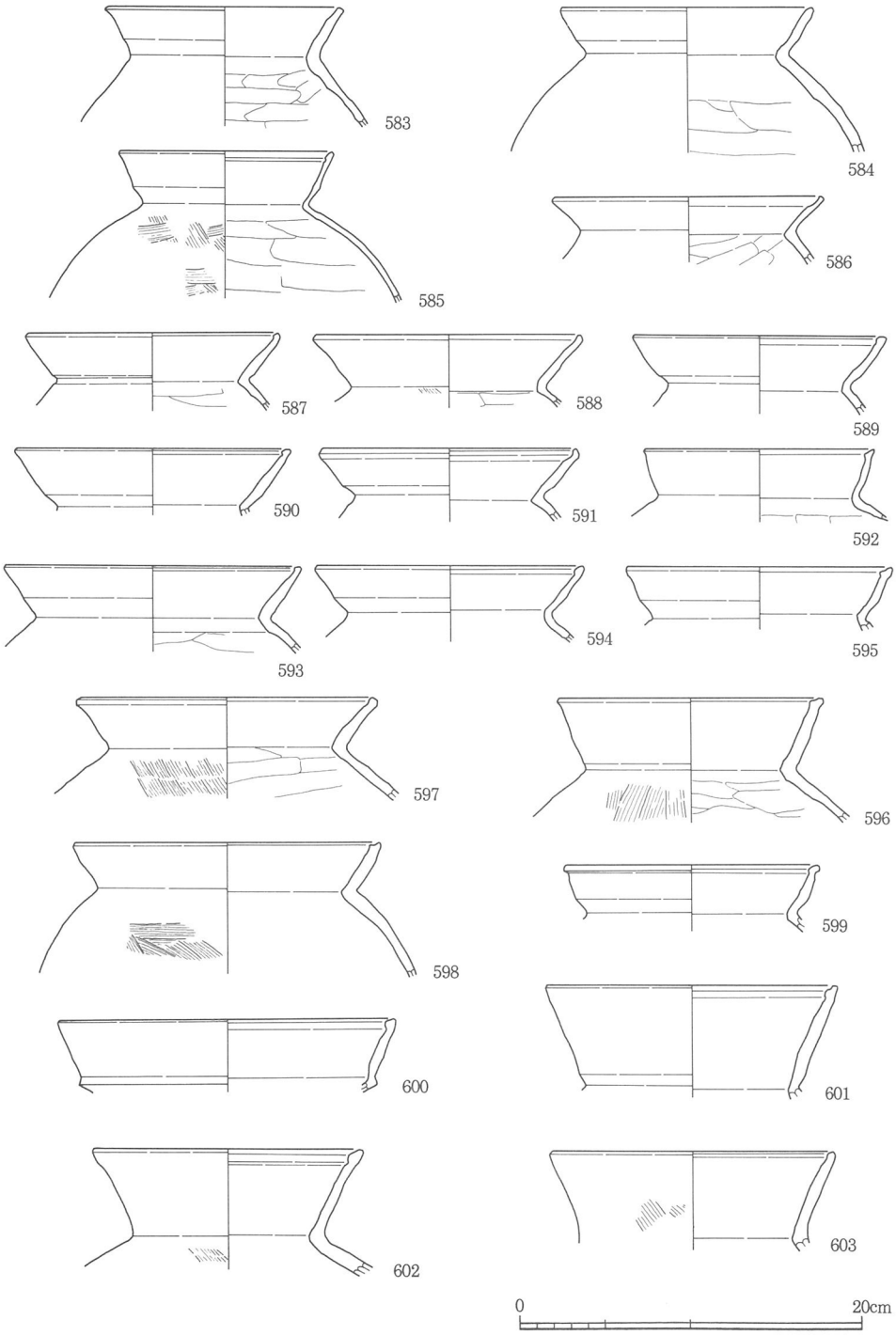
脚部はほとんどが裾が屈曲して大きく開く形態（564～572）であるが，柱部の形態により，短いもの（558・564～569）と細長いもの（560・570～572）に分けられる。調整は残存状況の良好なものが少なく不明な点が多いが，前者には柱部の内面をケズリで仕上げるものがみられた。なお，558は柱部の短いものに含めたが，他に比べると柱部の広がりが大きく異質な感を受けるものである。小破片で明確ではないが，第Ⅵ層にも似たものが存在する。他に数は少ないが，脚裾が徐々に開く形態（573）もある。

小型鉢（581）

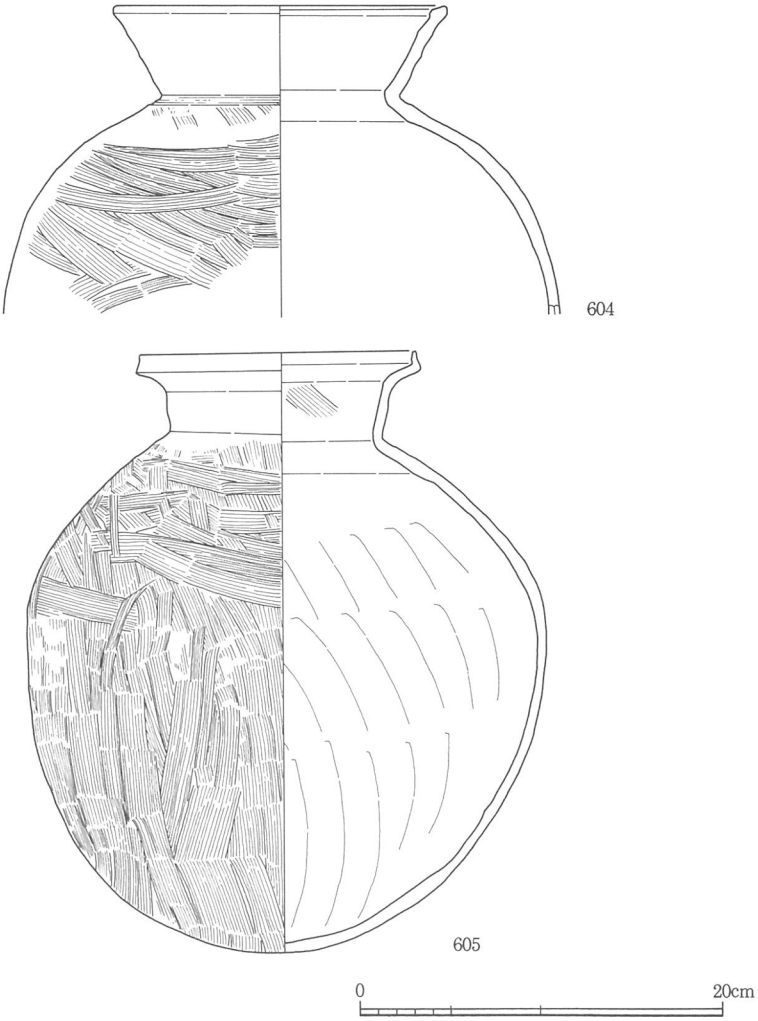
器壁が厚く重厚な感を受ける製品である。調整も粗雑である。



第75図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物16



第76図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物17



第77図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層出土遺物18

小型壺（574・575・579）

574は口頸部の短いものである。575は口頸部がやや長く発達したもので，小型丸底土器の系譜で捉えられる。579は口頸部を大きく外反させるものである。

甕（576～578・580・583～595・597～599）

口径11～12㎝の小型品（576～758・580）と口径12㎝を越える一般的なもの（583～595・597～599）に分けられるが，圧倒的に後者の出土数が多い。

一般的なものは，「く」の字状に短く屈曲させた口縁部の端部をわずかながら肥厚させるものが多い。底体部内面はヘラケズリにより薄く仕上げるが，ケズリの範囲は口縁との

境界まで達するものと境界よりやや下方までで終わるものが混在する。

小型品の出土数は少ない。一般的なものに比べると，口縁部がやや立った感を受ける。

壺（596・600～605）

口頸部が直線的に開き，端部をわずかながら肥厚させるもの（596・601～604）がほとんどである。

他には頸部から段をもって口縁部がのびるもの（600）や頸部から屈曲した口縁部が極端に短いもの（605）がある。なお，明言はできないが，605は残存状況が悪く，器形からは二重口縁壺の口縁部が欠損した製品の可能性もある。

製塩土器（582）

口径に対し器高が高く，全体をナデで仕上げるものである。Ⅶ層では口径に対し器高の低いものは出土していない。

9．第Ⅶ層下層出土遺物（第78～88図，図版12・70～74）

遺物の出土状況（第78・79図）

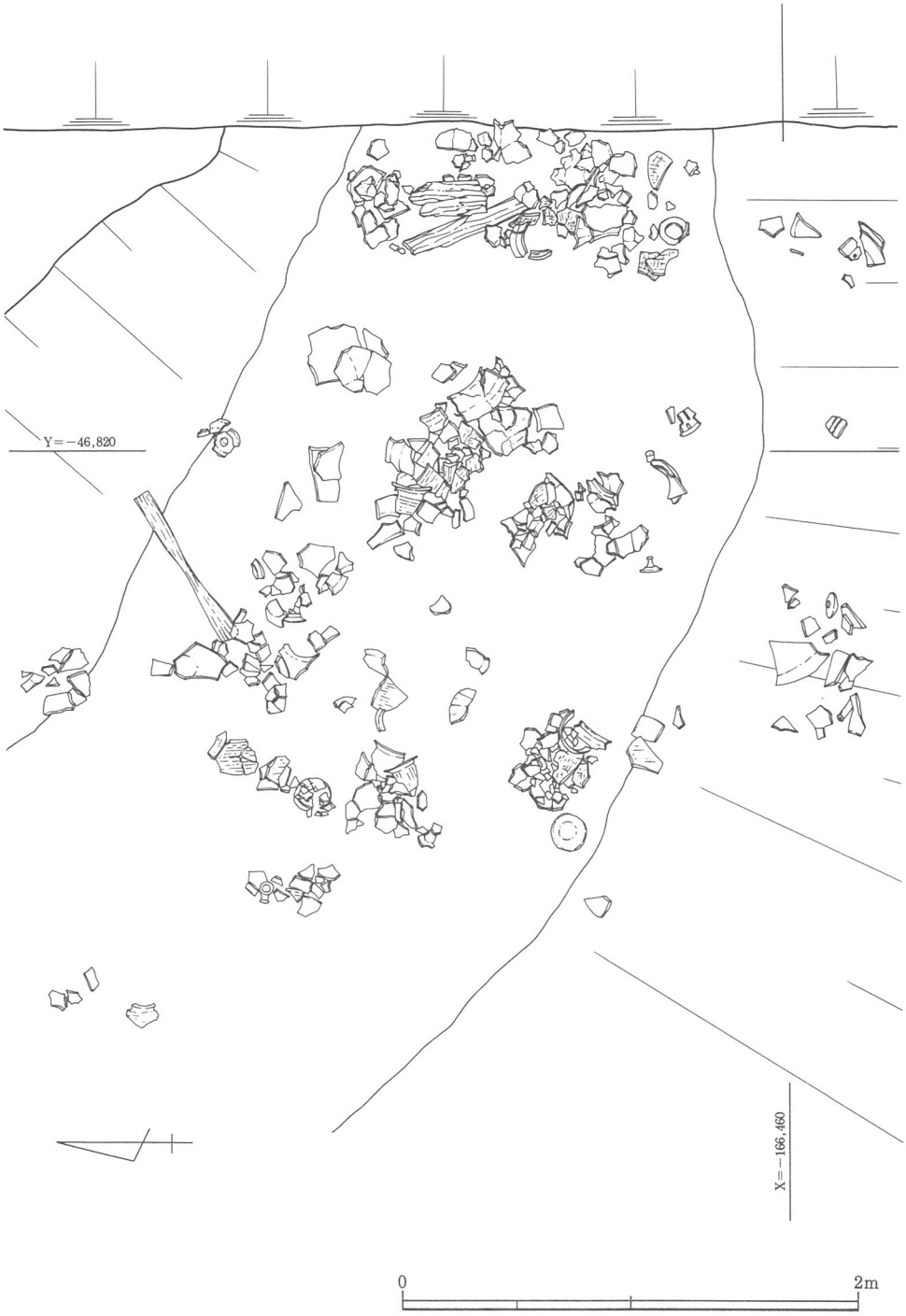
第Ⅶ層下層では，谷部が開口部に向かって屈曲する付近で完形品に復元される遺物が集中して出土した。

遺物の出土状況は第78図に示したが，いくつかのブロックで集中していることが看取される。また，第79図にはブロックごとの接合関係を示した。1ブロックあるいは近接したブロックでの接合関係が認められた。これらの状況から判断してこの遺物群は若干の混入はあるものの，比較的一括性の高いものと認識された。

この遺物群では器種構成にも特徴がみられた。他の遺構に比べ日常の土器である軟質系土器や土師器の出土比率が高く，さらにこれら日常土器には完形品に近いものが多くみられることである。完形に近いものに限れば，ほとんどが日常土器で占められていた。接合関係や他に杵などの木製品もみられることも考え合わせると，この遺物群は日常の生活道具がまとめて廃棄されたものと理解される。

前調査では一部の焼き歪みのある須恵器が数多く出土し，製品の2次的な選別が谷周辺で行われたことが推定された。しかし，今回の調査で第Ⅶ層下層における遺物群の検出により，選別の廃棄の他，日常道具の廃棄も谷部で行われていることも明らかになった。

また，日常土器の多量出土により，削平のためか遺構は多く検出されていないが，当谷



第78図　393－ＯＬ第Ⅶ層（下層）遺物出土状況図

周辺の丘陵地には集落の展開も確実視される。さらに，前調査では当谷の最下層からは完形に近い大型甕も出土している。調査では確実な証拠は得ていないが，生活に関連した水溜などの水利施設として利用された可能性も指摘されている。集落形成当初，当谷部と集落の間には有機的な関係がうかがえ，集落の一部として大きな役割を担っていたと推定されよう。

なお，前調査では激しい湧水のため遺物の出土状況は詳しく観察されなかったが，完形品に近い軟質系土器も出土しており，この遺物群と同様の状況であったと推定される。

出土遺物（第80～88図，図版70～74）

初期須恵器（第80・81図，図版70・71）

高杯蓋（606）

天井部片で，つまみの特徴は第Ⅶ層出土の449と類似する。

高杯（607～611）

607は杯部が口縁部を大きく外反させる鉢状を呈するもので，他の類例同様赤焼けに仕上がる。608は脚部の透かしや裾端の形態に特徴があり，類似する脚部はＴＧ232号に存在する。脚部の609・610は柱部と裾部境界付近に凸帯を巡らす形態で，ＴＧ232号の中で最も出土数の多い一群である。

611はやや大型で，鉢状の杯部をもつ高杯に伴うものと推定される。

把手付椀（612）

口径8.2㎝の小型品で，後出時期に含まれる可能性の高いものである。凸帯の成形，施紋，底部仕上げのヘラケズリも粗雑である。把手は欠損するが装飾が伴う。

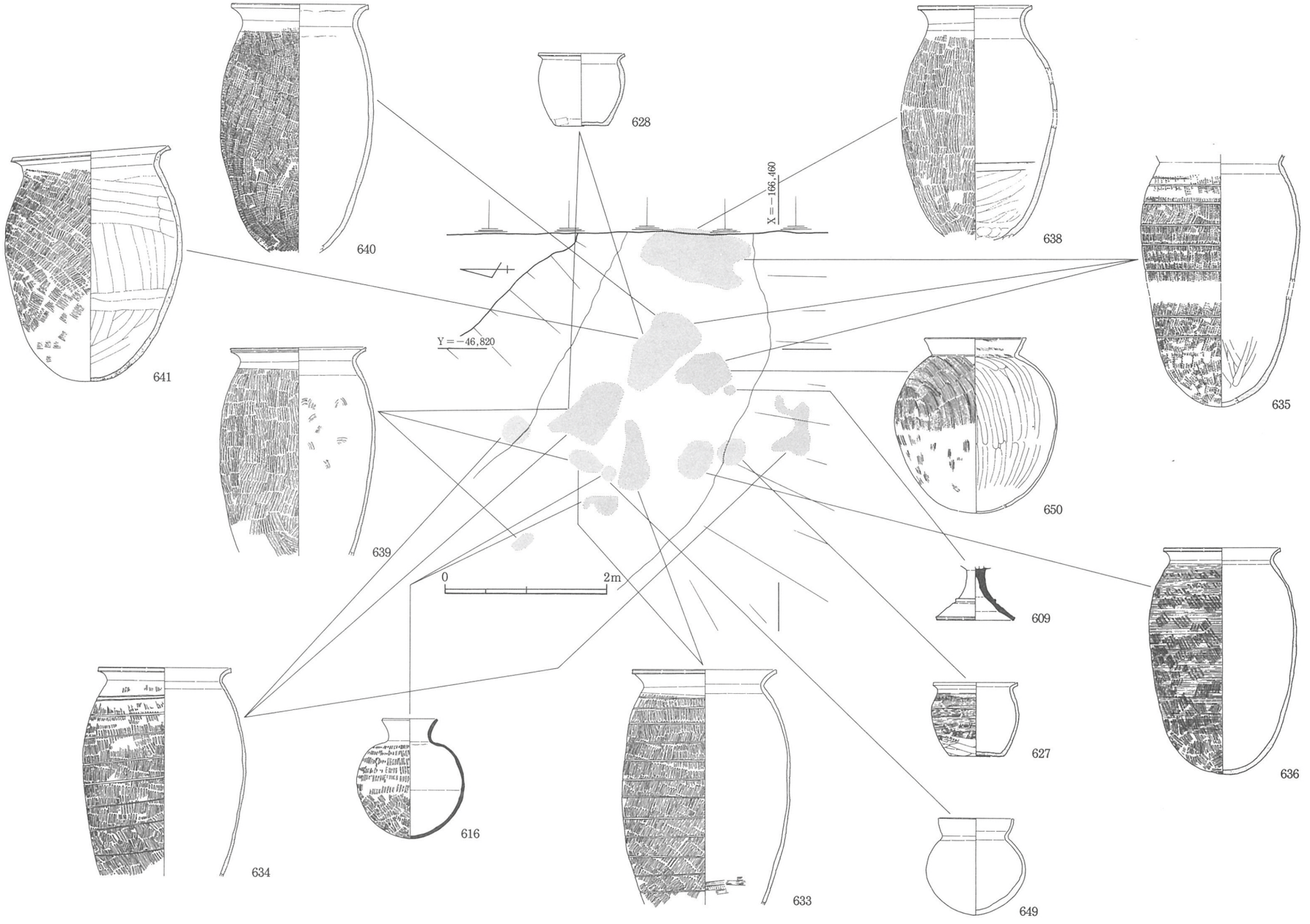
瓶（613・614）

613は口頸部や底体部の形態，底部内面の調整などの特徴から先行形態とされる。一方，614は体部がやや偏平であり，後出形態の特徴が看取される。

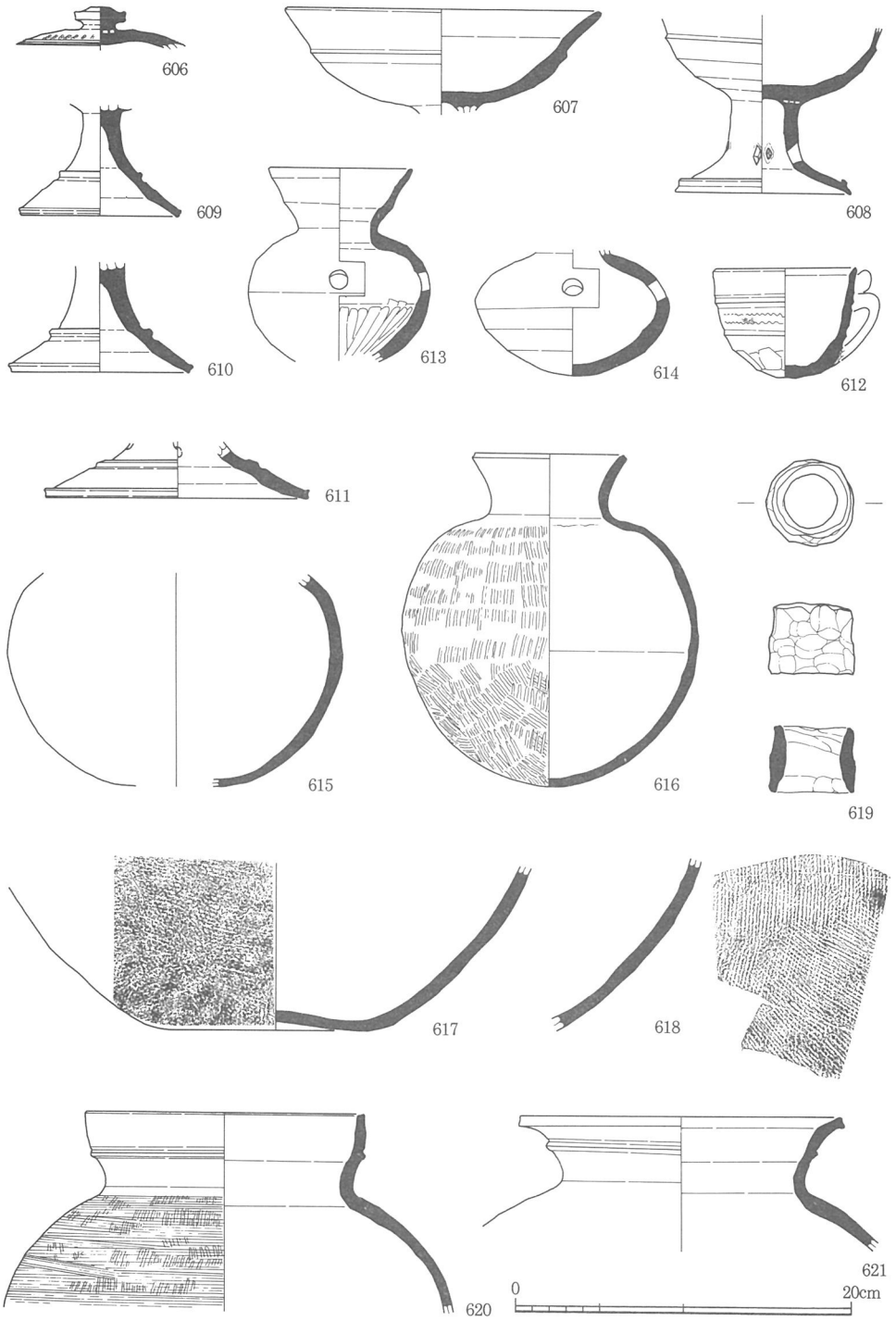
壺（615～618・620～624）

615・616は壺の中でも小振りの製品である。615は波状紋などを施紋する口頸部が伴うと推定される。616は口径が小さく，わずかに外反する単純な口頸部をもつ。胎土中には砂礫粒が多く含まれ，通有の須恵器に比べると焼成は軟らかい感を受ける。

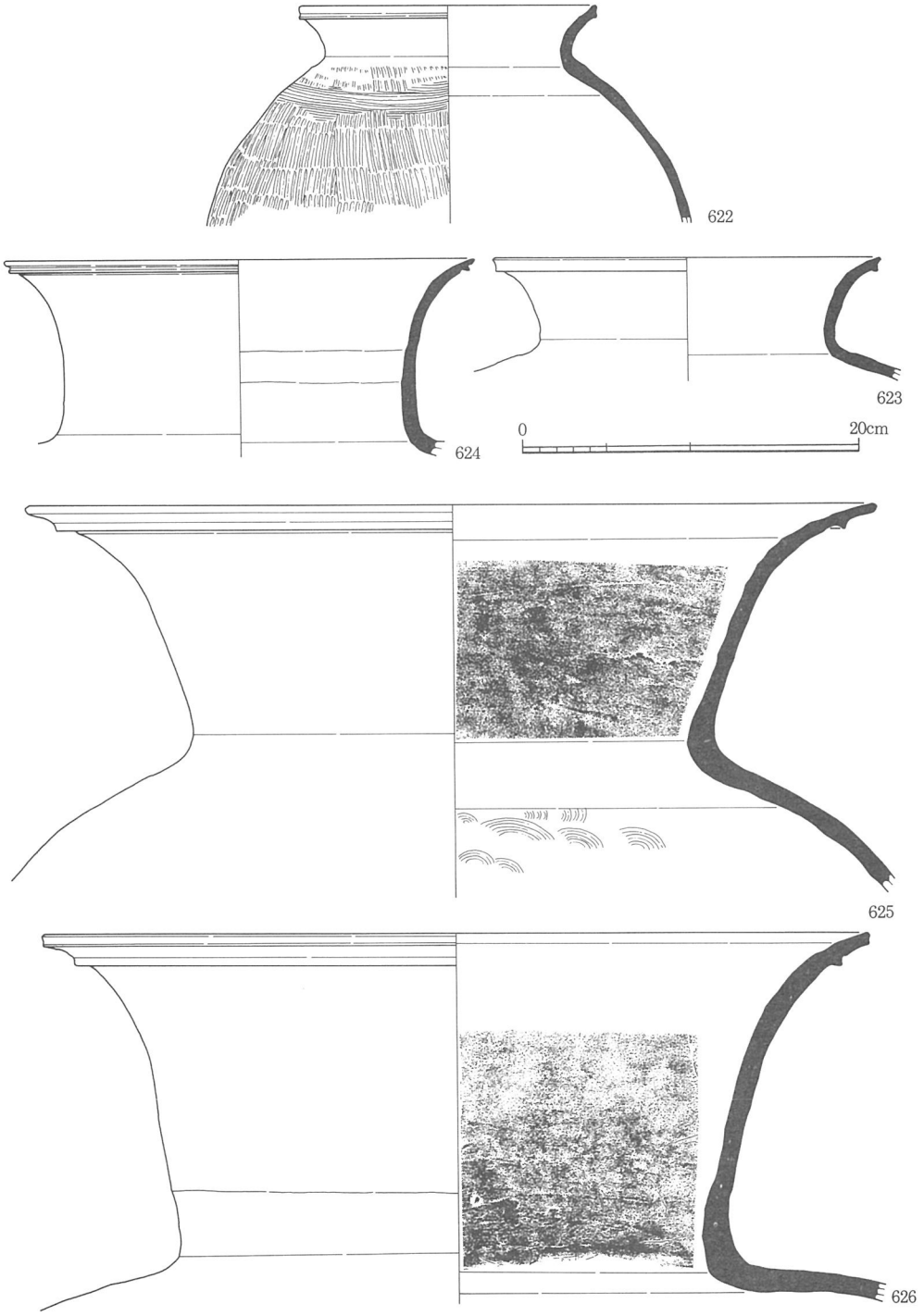
620～624はＴＧ232号に同形態のものが存在する。620はいわゆる二重口縁の口頸部形態で壺Ｇ類に該当する。同様に621はＥ類，622はＫ類に該当する。623・624は中型甕と呼称



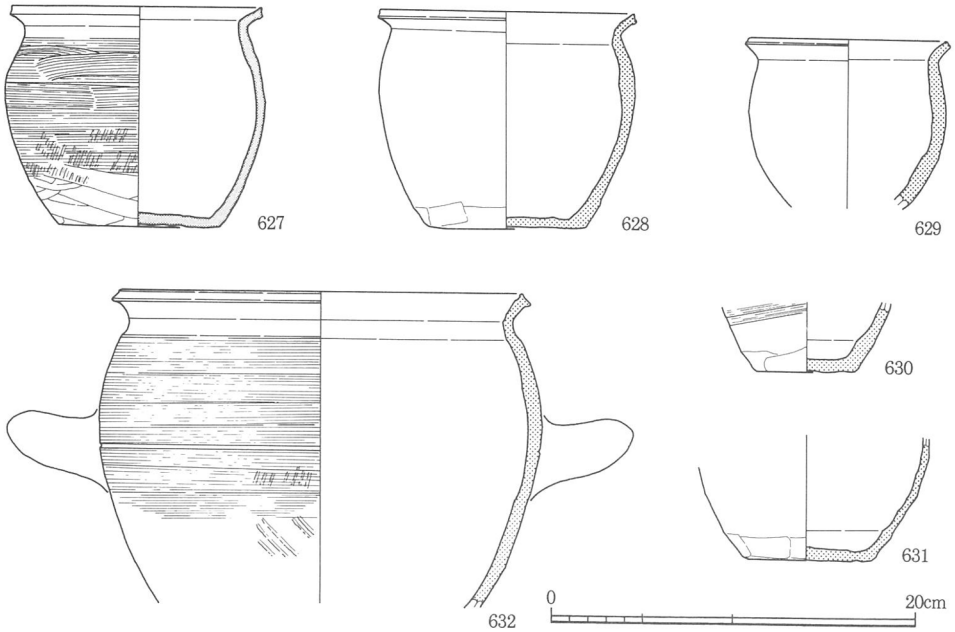
第79図　393－ＯＬ第Ⅶ層（下層）出土遺物の接合関係



第80図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物１



第81図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物２



第82図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物３

されるものでＩ類に該当する。

617・618は底部片である。いずれにも縄席タタキが観察される。617はタタキの後粗いナデで仕上げるが，618はそのままタタキ目を残存させている。

大型甕（625・626）

いずれも先行形態と考えられる。ＴＧ232号の分類では，625は口縁端を丸くおさめるＡ－１類，626は端部に面をもつＢ－１類に該当する。

環状須恵器（619）

上端部径4.6㎝，器高４㎝を測る。調整は内外面とも粗くナデで仕上げる。環状の製品は，ＴＧ232号でも出土しているが，直径や器厚，調整などは異なっている。また，ＴＧ232号の製品は焼き台と推定したが，当製品もその可能性が高い。

軟質系土器（第82～86図，図版72～74）

平底鉢（627～631）

627・628はいずれも口径14㎝前後で，出土数が最も多い一般的なものよりひと回り大きい群に含まれる。体部は最大径が中央より上に位置するが，口径に対し器高が低いため全

体に安定感のある印象を受ける。外面の仕上げ調整は，628がナデ，627がカキ目である。

629・630は小型品である。629の体部は下半に丸みがあり上半は直立気味にのびる。631は一般的な大きさの製品である。

焼成はいずれも，酸化焔により軟質に仕上げている。

堝（632）

底体部は深く，膨らみをもつ形態である。体部外面には細かいカキ目が観察されるが，この調整は板状工具による回転ナデの痕跡と判別し難いものである。焼成は酸化焔により軟質に仕上がる。

長胴甕（633～641）

完形に近い先行形態の資料が数多く出土している。

全体の器形を概観すると，胴体部の最大径が中央より上にあるもの（633～636・639）と，中央付近にあるもの（638・640）に大別される。しかし，後出時期の土器溜りのものに比べると，いずれも胴部全体の膨らみは小さいことがうかがえる。口縁端部は面をもち凹線状にくぼむものがほとんどであるが，端面の下部を凸帯状に肥厚させた壺の口縁端部に似た形状のもの（639）もある。これらは，先行形態特有の特徴である。

胴体部の調整のタタキには，平行タタキの他，先行形態特有の縄蓆や格子目タタキがみられる。ただ，格子目タタキは少なく，平行と縄蓆タタキが多用されたようである。

また，タタキ調整だけでなく，調整後に螺旋状沈線を巡らすもの（633～635），カキ目を施すもの（636）の存在も注目される。いずれも先行形態特有の特徴であるが，特に螺旋状沈線は当谷部以外ではほとんど出土例のないものであり，より限られた期間に採用された装飾と考えられる。

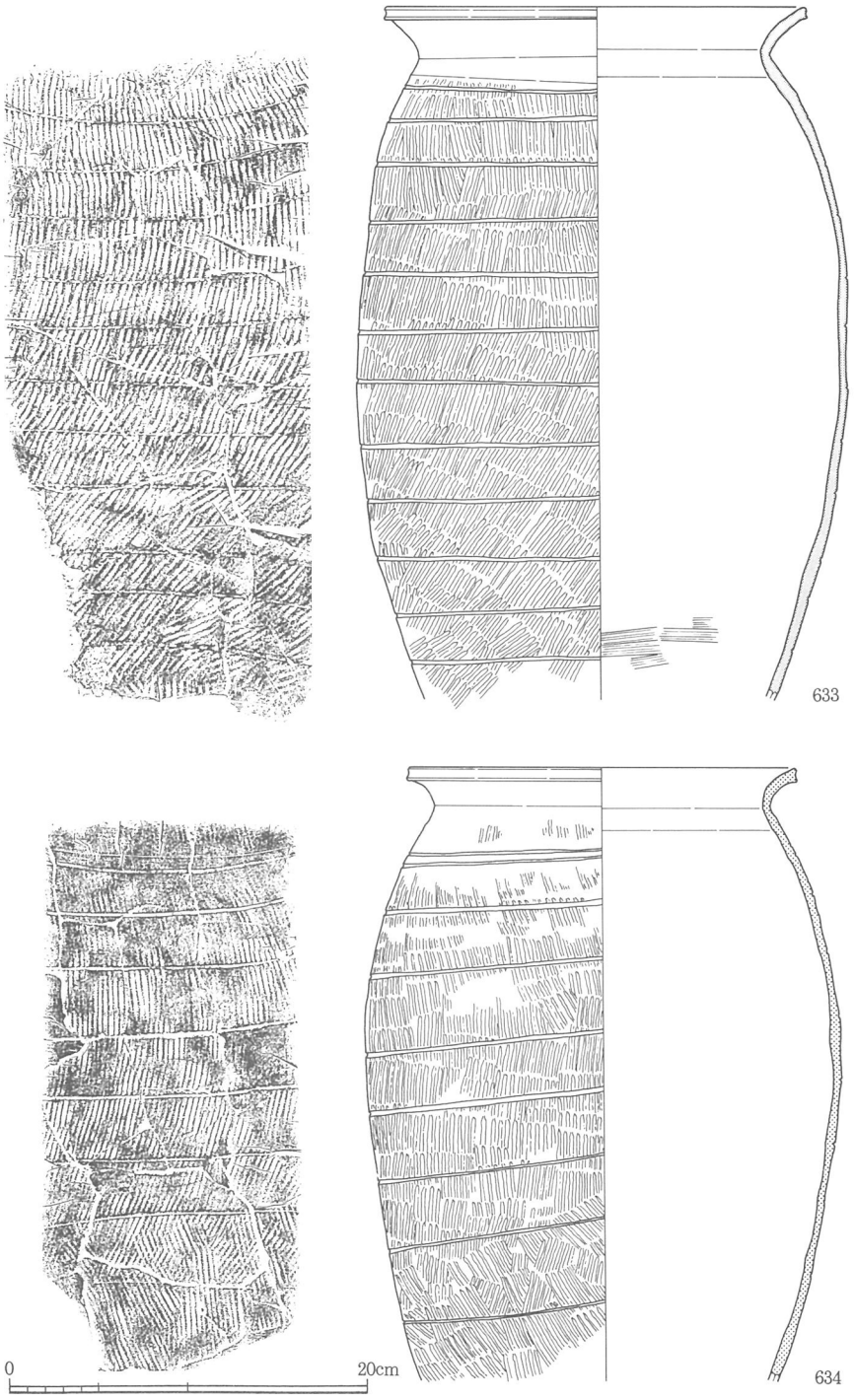
なお，641は口径が26㎝と一般的なものに比べると大きい，口径に対し胴体部が短いなど他の長胴甕と同等に比較できないものである。

土師器（第87図，図版74）

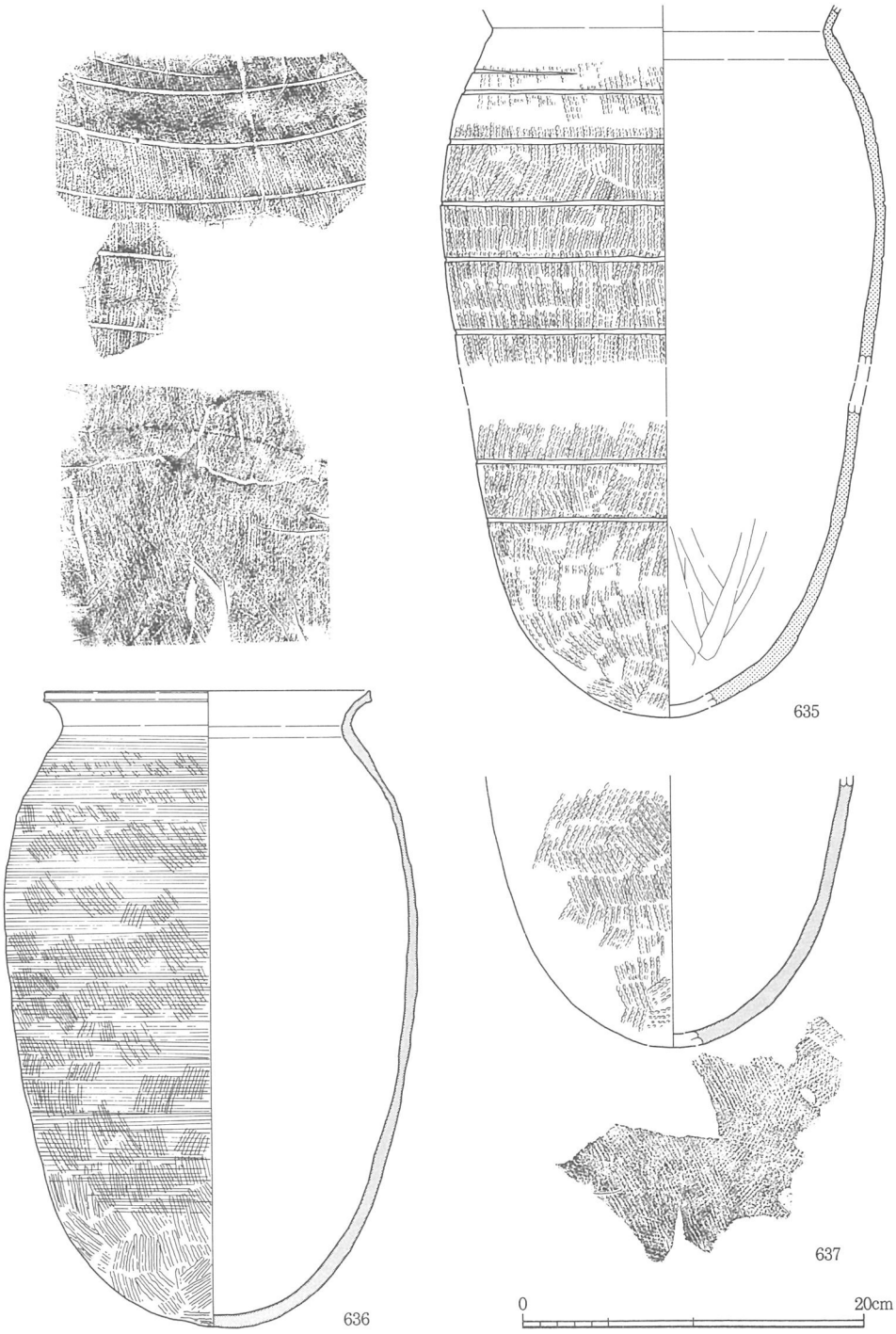
高杯（642～648）

杯部（642～644）は，いずれも浅く平たい底部から稜をもって直線的にのびる形態であるが，稜や口縁部の細部には差異が認められる。

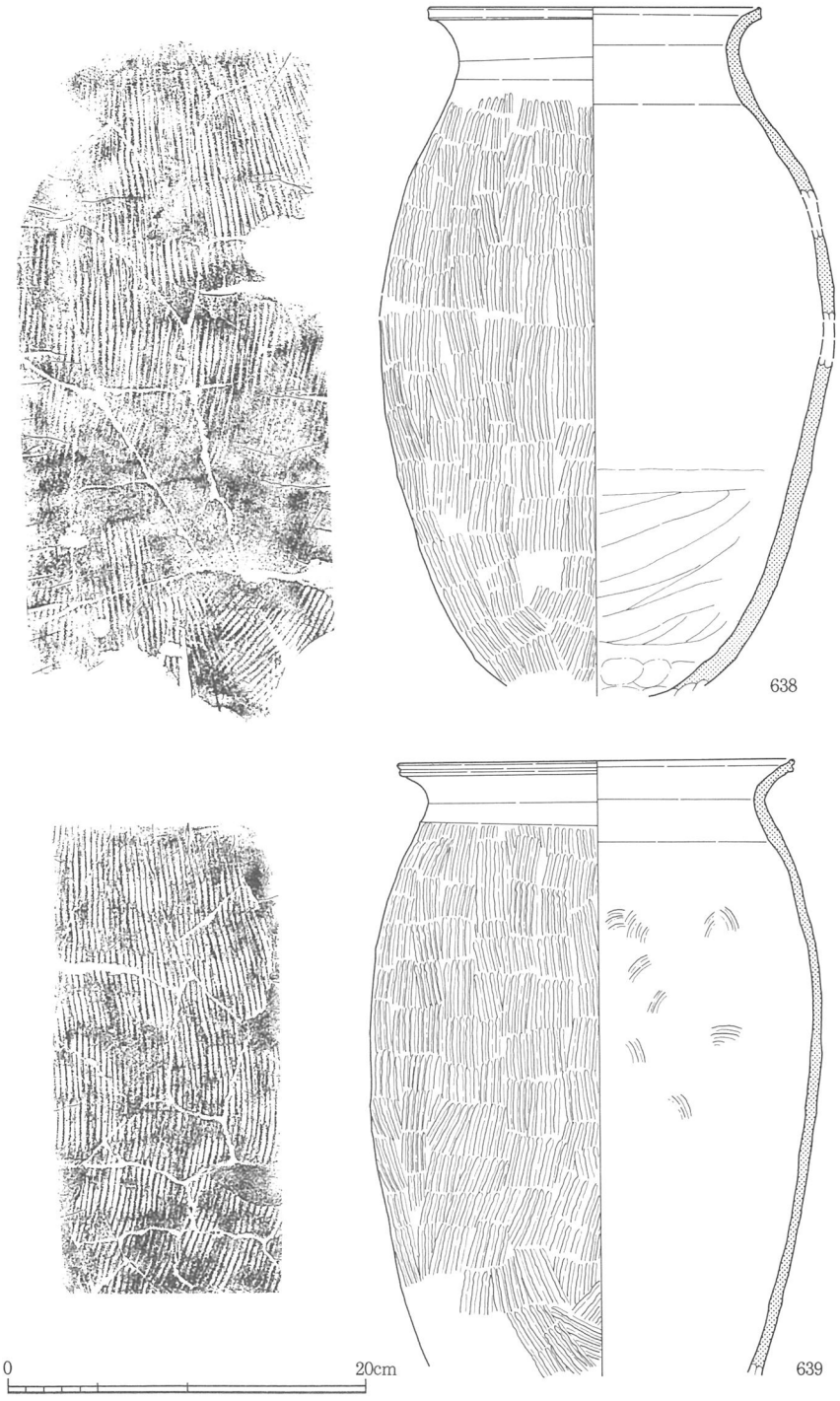
642はやや外反する口縁部で，稜は凸帯状の段によって表現される。また，段には工具により細かい刻み目が施される。同様の刻み目はＴＧ232号の須恵器にある。この須恵器



第83図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物４

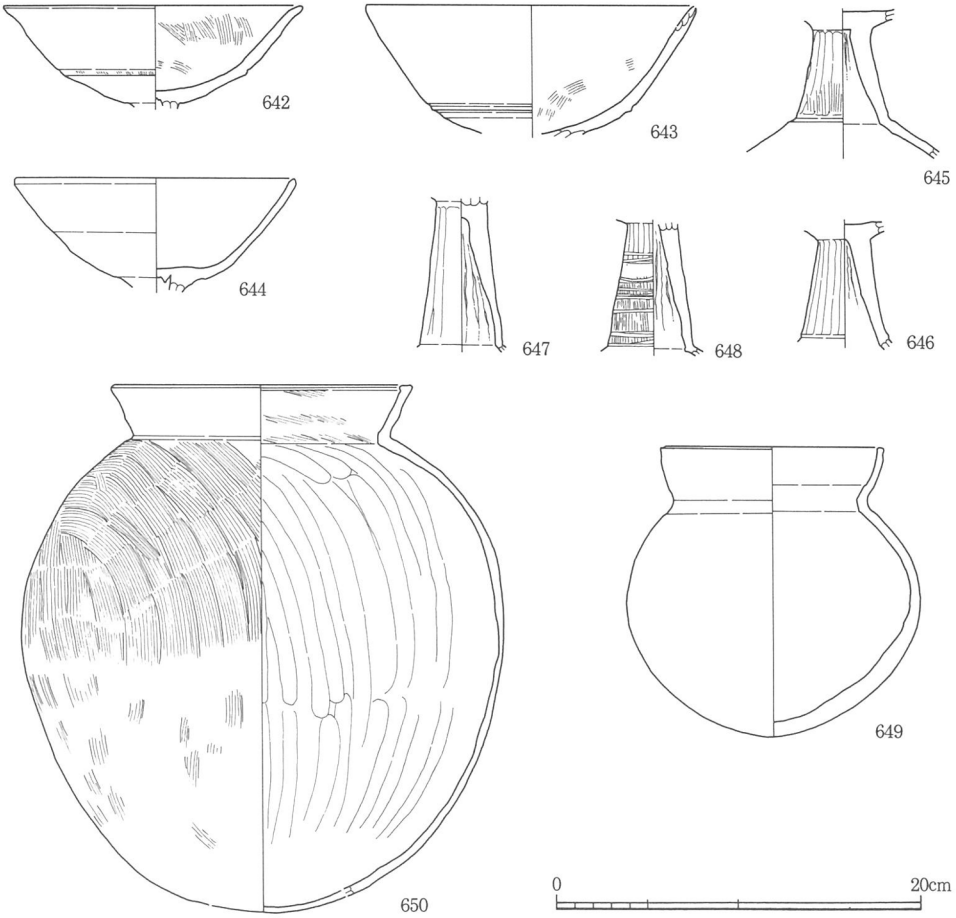


第84図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物５



第85図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物６

第86図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物７



第87図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物８

は器形も土師器と似ており，製作集団や併行関係などを考える上で重要な資料となっている。643は杯部の深いものである。稜は642よりも鋭い凸帯によって表現され，口縁部はわずかに内湾してのびる特徴がある。644は634同様口縁部は内湾気味にのびるが，稜の曖昧なものである。また，644は他の土師器に比べ硬質であり，窖窯で焼成された可能性も指摘される。

脚部はいずれも裾が屈曲して開く形態であるが，柱部の短いもの（645・646・648）と長いもの（647）がみられる。

甕（649・650）

いずれも完形品に近い残存状況のものである。649は口径11.6㎝の小型品である。口縁部はやや直立気味にのび，壺とすべきかもしれない。650はいわゆる布留系甕の範疇で捉

えられるもので，「く」の字状に短く屈曲させた口縁部の端部を肥厚させている。底体部は球形よりはやや縦長である。外面のハケは頸部付近まで縦方向であり，内面はナデによって仕上げている。これらの特徴から，650はＴＧ232号下層の旧表土から出土した甕（『陶邑・大庭寺Ⅳ』－土器番号1059）よりは後出する時期に比定される。

木製品（第88図651・652）

651は竪杵である。全長87㎝，搗き部径8.7㎝，握部径3.3㎝を測る。握部に節帯のない無節式で，搗き部と握り部の境が不明瞭な形態である。搗き部端部の使用痕は片面（図下面）のみに認められた。

652は浅いえぐりをもつ盤状製品に短い握り柄を付けたもので，盤状部の中央部は焼失する。握り柄を含めた全長は52.5㎝を測る。盤状の部分は前面を平坦に，握り柄側を丸く成形し，中央部は漕状にえぐる。全体の形状から軽量物をすくう用途が推定されよう。

なお，全体の形状はアカ取りにも似ているが，横断面形は緩やかな「Ｕ」字形を呈すること，立ち上がりが低く傾斜が緩いこと，漕状を呈することなどから，アカ取りとは別製品とされよう。

10．その他の遺物（第89～91図，図版75・76）

アテ具（第89図653・654，図版75）

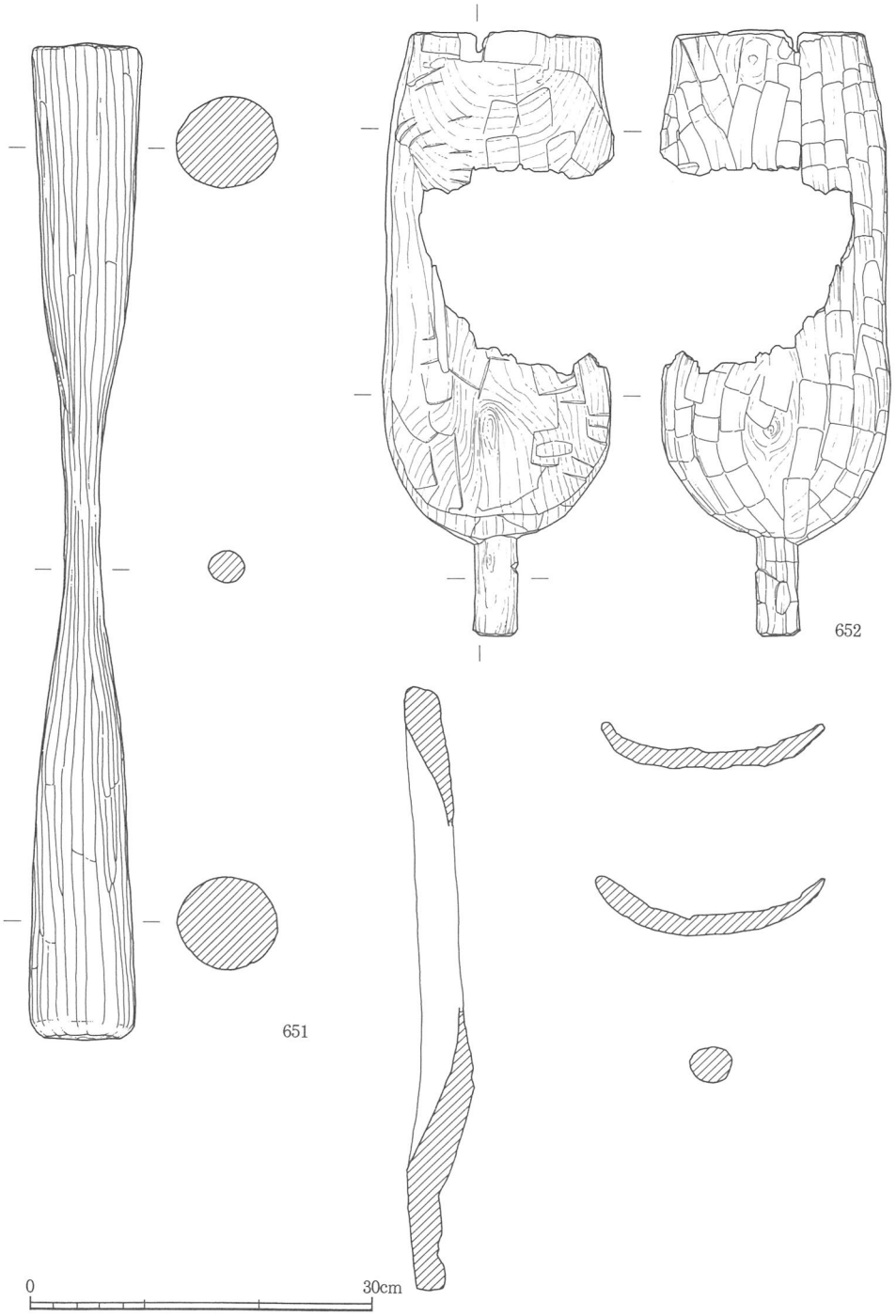
653は須恵質製品で，身の形状はきのこ状を呈する。身の直径は10.3㎝を測り，大庭寺遺跡におけるこれまでの出土品の中では最も径の大きいものである。柄の部分は欠損するが，身まで達する孔が穿たれる。孔の直径は約１㎝で，身の部分は先端の尖った棒で突いたような断面形を呈する。土器に接地する身の表面は，実際に使用していたためか平滑である。所属時期は初期須恵器に伴う時期である。

654も須恵質製品で，アテ具の柄の一部と判断した。上端面と側面には孔を穿つが，このうち側面の孔は貫通する。所属時期は653とほぼ同時期と考えられる。

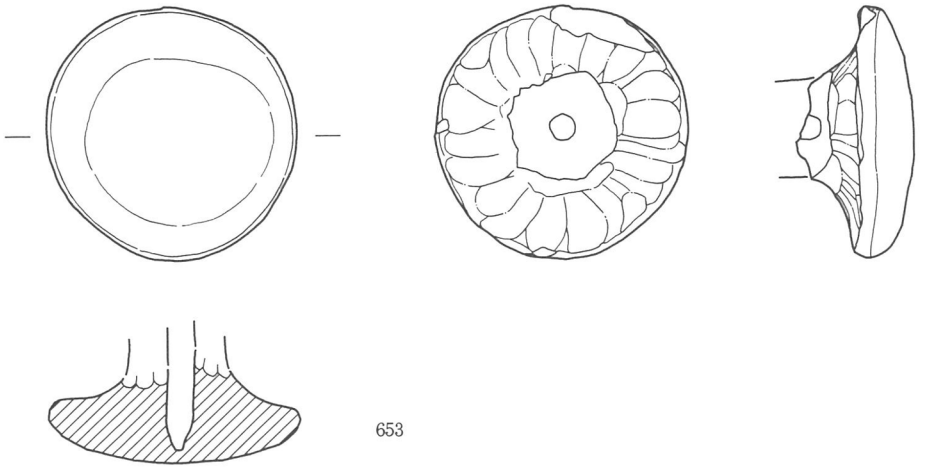
出土層は653が第Ⅲ層，654が第Ⅳ層である。

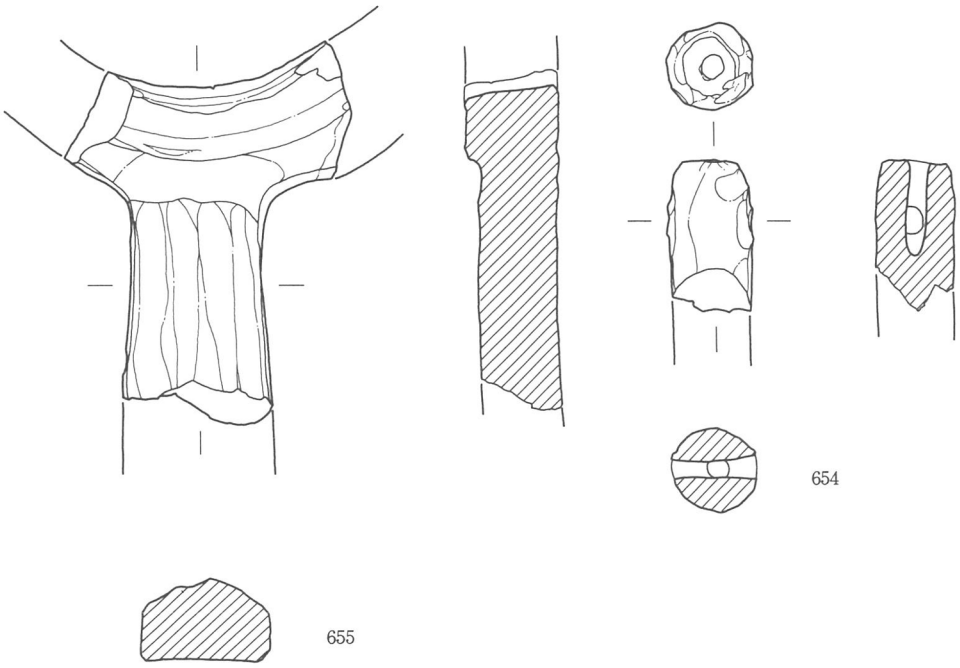
異形須恵器（第89図655，図版75）

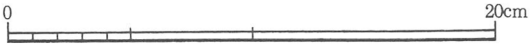
環状の製品に柄が伴うものである。環状部の断面形は台形を呈し，柄は上部には丸みをもつ。環状部上面は粗いヘラケズリ，柄部上面はナデで整え，側面はヘラケズリで仕上げる。下面は軽い指オサエを施すが，未調整に近い。所属時期は初期須恵器に併行する時期



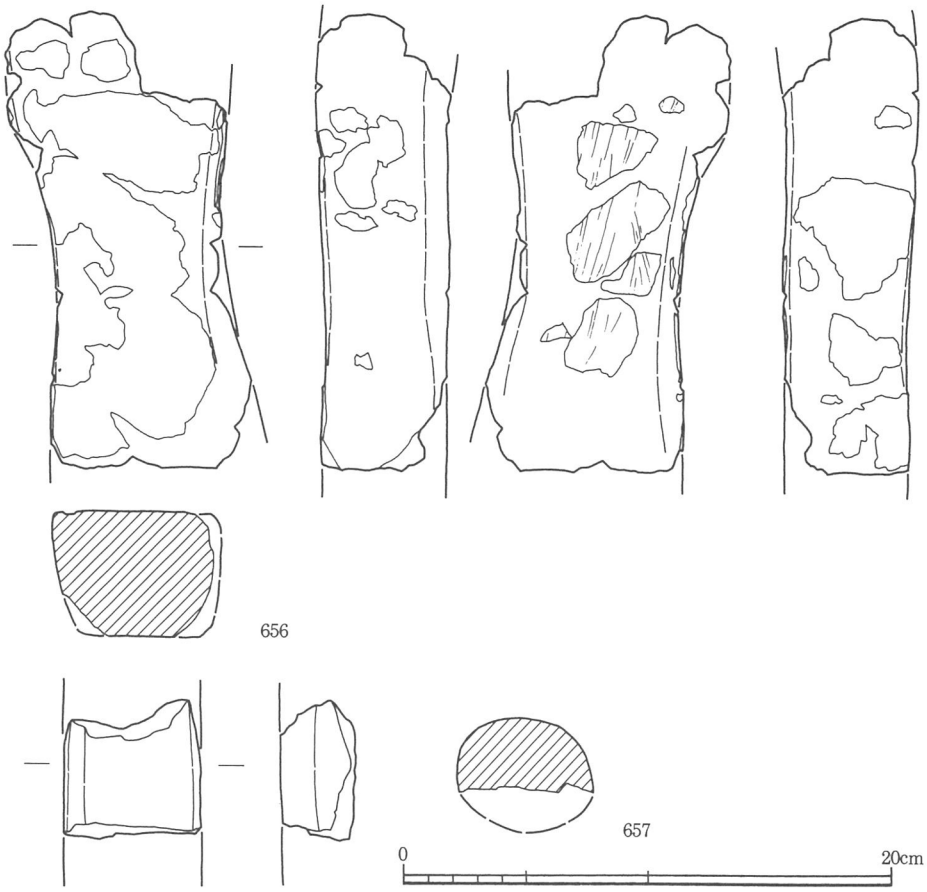
第88図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅶ層下層出土遺物９







第89図　谷部１（393－ＯＬ）出土アテ具・異形須恵器



第90図　谷部１（393－ＯＬ）出土石製品

と推定される。出土層は第Ⅳ層である。

砥石（第90図656）

表面剝離が著しく，上下端部は完全に欠損する。残存した４面にはいずれにも使用痕跡が認められる。出土層は第Ⅴ層である。

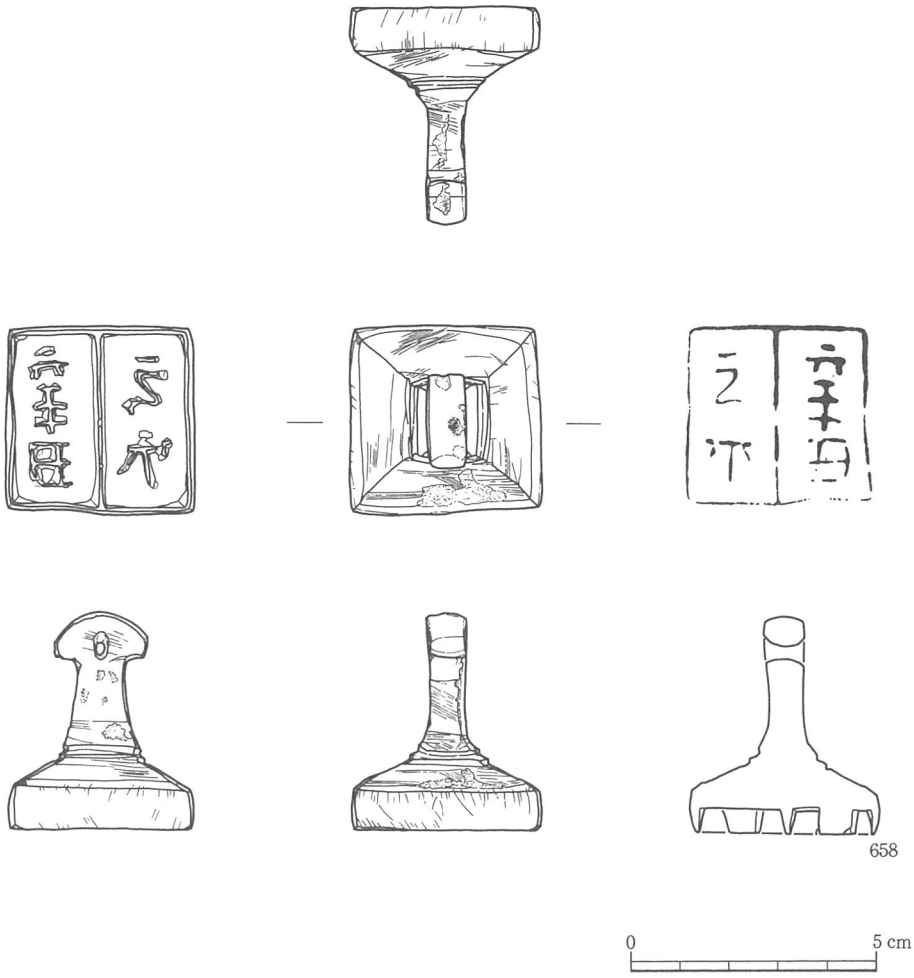
石斧（第90図657）

弥生時代の蛤刃石斧と考えられる。第Ⅶ層から出土した。なお，弥生時代の遺物は少なく，石器も当石斧以外はサヌカイトの剝片がわずかにみられる程度である。

銅印（第91図658，図版76）

第Ⅱ層からの出土品である。

紐は頭部が弧状を呈し中央部に円孔を穿つ有孔弧紐に分類されるものである。紐基部には段状の凸帯を巡り，印台部の上面対角線上には明瞭な稜線を持つ。全体の鋳上がりは良



第91図　谷部１（393－ＯＬ）出土銅印

好で表面には部分的に研磨痕が観察される。印面は界線によって二分され，印文は左右縦に２文字ずつ計４文字が鋳出される。一部欠損するが「辛丑之印」かと判読される。

銅印の詳細な法量は印面は方3.6㎝，全高4.3㎝，紐頭部の最大幅1.8㎝，印台部の厚さ８㎜，印面の外郭，印字の幅は約１㎜，印字の刻みの深さは５㎜を測る。重量は118ｇである。

所属時期は出土遺構の性格上供伴遺物から明確にはできないが，銅印の形態的特徴から平安時代前期頃に比定されよう。なお，印面を界線によって２分するものは類例のほとんどないものである。

第4節　小結

谷部1からは数多くの遺物が出土したが，このうち小開析谷（以下小開析谷は便宜上393－ＯＬとする）から出土した初期須恵器や軟質系土器には質・量ともに眼を見張るものがある。ここではこの遺物群を，最古型式とされる窯（ＴＧ231・232号）やこれよりはやや後出する時期のもので構成される土器溜り出土品との比較検討を行なうことにより，その特徴を明らかにしておきたい。

第1項　出土状況

比較検討する前に，393－ＯＬにおける初期須恵器や軟質系土器の出土状況について簡単に触れておく。

393－ＯＬの地層の堆積は，大きく7層に分けられた。このうち第Ⅵと Ⅶ層が古墳時代の堆積層で，遺物量は他層を圧倒している。また，出土遺物から，第Ⅶ層は中期の堆積層であることが確認されたが，第Ⅵ層には中期から後期までの遺物の混在がみられた。しかし，出土状況や地層の観察からは，第Ⅵ層堆積時には第Ⅶ層の遺物は完全に埋没することなく表面に露出していた可能性が指摘される。第Ⅵ層には中期と後期の遺物が混在するが，多くの中期遺物の堆積時期は，後期ではなく第Ⅶ層とほぼ近接した時期に求められよう。

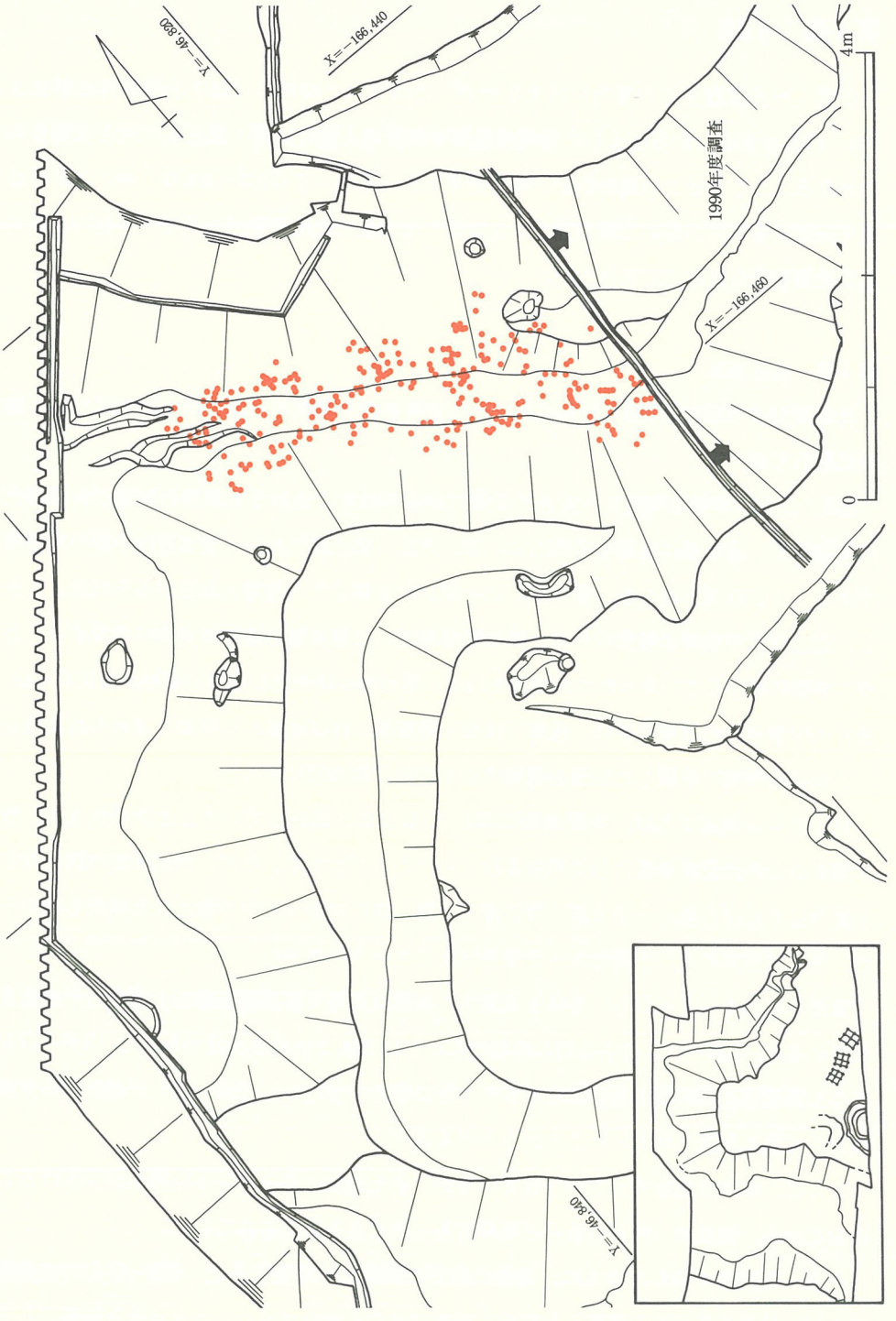
この近接時期に堆積した両層の遺物の出土分布は第92図に示した。

出土分布を概観すれば，中期遺物は393－ＯＬ全体に広がっていることが看取され，当小開析谷全体が投棄場所として利用されていたことがわかる。ただ，1990年度の調査なども参考にすれば谷奥から中央部が特に密で，開口部に向かってやや粗となる傾向も認められ，多くは谷奥に近い丘陵部から投棄されたことがうかがえた。

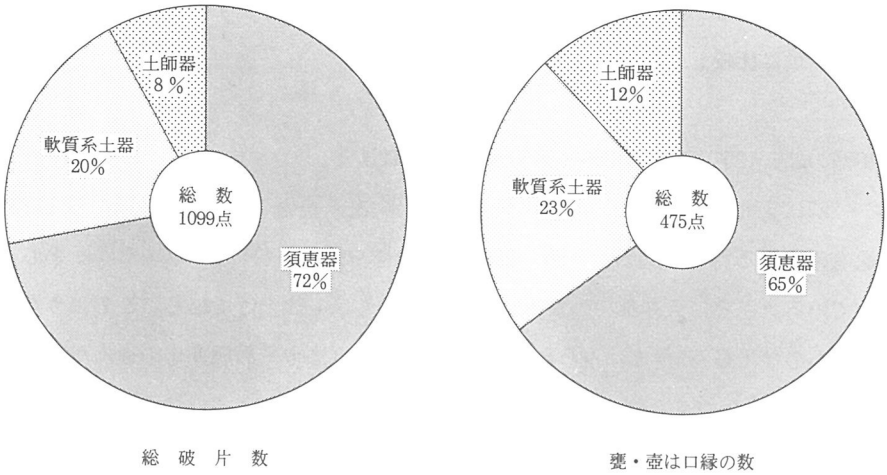
また，谷部1（1－ＯＬ）全体を見渡すと西側斜面部で初期須恵器の土器溜りが検出されているが，393－ＯＬの中心的な時期のものとは明確な時期差が認められた（393－ＯＬでも土器溜りと同時期のものはあるがその数は極めて少ない）。393－ＯＬが当該期の投棄場として強く意識されていたことがうかがえよう。

さらに，前回の調査でも指摘されているが，出土遺物に歪みのある完形品が含まれることなどから，製品の二次選別後の投棄場であったことも推定されている。

一方，第93図に示したように，遺物の種類の構成比を概観すると，393－ＯＬでは須恵器の他，日常土器である軟質系土器や土師器の占める割合が高いことも大きな特徴として



第92図　谷部１（393－ＯＬ）第Ⅵ・Ⅶ層における遺物分布〔古墳時代中期のみ〕



第93図　谷部１（393－ＯＬ）における古墳時代中期の遺物比率

あげられる。この谷が，日常土器の廃棄場としても活用されていたことがうかがえ，遺物の分布状況も考え合わすと，393－ＯＬの東側の丘陵平坦部付近に集落の一部を構成する遺構群の展開が推定されよう。

なお，遺構群の性格については遺物の様相から特定するに至っていないが，393－ＯＬで半島系の日常土器（軟質系土器－平底鉢・長胴甕・甑）の出土率が他遺構に比べ高いこと，最古型式の須恵器（ＴＧ231・232号）に併行する時期のものが多いことなどを重視すれば，初期段階の渡来工人に直接関連した遺構であった可能性が高いとされよう。

第２項　出土遺物

393－ＯＬの出土遺物は上記のような状況で出土したため，この遺物群は時期差は存在するものの河川資料などに比べ比較的まとまった資料となっている。当遺物群の特徴を明らかにすることによって，大庭寺遺跡で行われた須恵器生産の一端を知ることが可能となろう。

遺物群は前述したように，最古型式とこれよりは後出するＴＫ73型式併行期の遺物が混在する。各層出土遺物の節では前者を先行形態，後者を後出形態として表記したが，全体の出土量をみると圧倒的に先行形態のものが多い。

ここでは先行形態を中心として検討を行う。

先行形態の代表例であるＴＧ231・232号の遺物を基準にして概観すると，393－ＯＬに

はこれらの窯の製品と形態の特徴が酷似しこれらの窯で焼成されたと考えられるものと，窯製品とは若干ではあるが形態差の認められるものの2者が存在する。以下その代表例を器種毎に簡単に比較してみる。

蓋

第40図の256・257と第40図258・第60図449を比較する。

256・257は天井部と口縁部の凸帯の張り出しが大きく鋭いことがうかがえ，ＴＧ232号でも通有みられる特徴である。一方，258・449はやや鈍く，特に449の端部は面をもっておさめている。さらに天井部のつまみの端部も面をもって仕上げている。このような特徴を有するものはＴＧ232号ではみられず，ＴＧ232号よりはやや形態変化の進んだものとされよう。

高杯

第40図264と第60図の454を比較する。

両者とも多窓透かしの脚部が特徴であるが，透かし数は264が7方，454は11方とその数に違いがある。ＴＧ232号のものはいずれも10～13方と454がより近い形態と言えよう。さらに454は坏部も底部に膨らみがありＴＧ232号と共通した特徴が看取される。一方，264は透かし数の減少などからＴＧ232号から形態変化の進んだものとされよう。

その他にも，透かし同様ＴＧ232号からその変化をたどれるものは，菱形のスタンプ紋からの変化が推定されるもの（第61図－476）などがある。

また，高坏ではＴＧ232号では出土していない器形のものもみられた。高坏の蓋を逆転させたような坏部をもつ第40図－265などがその代表例であるが，その特徴からはＴＧ232号よりは後出するものと推定される。

把手付椀

第39図－249・250・第61図－479をＴＧ232号と比較する。

提示した3資料はいずれもＴＧ232号の製品に比べ口径に対し器高が低い傾向が看取され，ＴＧ232号よりは若干後出する様相が看取される。さらに，底部付近の調整に注目すると，ＴＧ232号では静止ヘラケズリの後に丁寧にナデで仕上げているが，この3資料はヘラケズリをそのまま残存させている。調整の祖雑化が認められ，技法からも後出する様相がうかがえる。

なお，今回の調査では良好な資料は出土していないが，前回の調査ではＴＧ232号と併行関係にあると考えらる製品（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』土器番号200）も出土している。

小型壺

小型壺は陶質土器に類例が少なく，その器形からは倭的（土師器）な影響の強い器種とされるもので，形態変化の度合も他器種に比べより小さいと推定される。

今回の調査では良好な資料の出土は少ないが，他器種同様，ＴＧ232号に併行するものとやや後出するものが混在するものと推定される。

器台

器台は完形品に復元されるものが無く，部分的な比較しかできない。しかし，部分的な断片資料や前回の調査での出土遺物も参考にすれば，やはりＴＧ232号に併行するものとやや後出するものが存在するようである。

また，前回の調査では複合鋸歯紋で飾るもの（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』土器番号322）が当谷から出土している。ＴＧ231・232号では複合鋸歯紋で飾られる器台は１点も出土しておらず，両窯ではこの紋様は採用されていない可能性が高い。さらにこの器台は杯部の断面形などその形態の特徴からＴＧ232号の中でも古段階に位置づけられ，併行する時期あるいはややＴＧ232号に先行する可能性も含んでいる。断片的な限られた資料であるが，ＴＧ231・232号の他にもこれらに併行した窯の存在がうかがえよう。

壺・大型甕

両器種とも形態変化は少ないと推定される。特に大型甕はその傾向が顕著で，いずれも口頸部の形態や技法の特徴はＴＧ232号と酷似する。他器種の様相から時期差のあるものが混在すると考えられるが，時期別に細分することは難しい。

以上，器種毎にその様相を概観したが，ＴＧ232号と併行すると推定されるものとやや形態変化の進んだものの存在が明となった。実際には検出されていないが，ＴＧ232号から継起的に連続する窯の存在がうかがえよう。

さらに393－ＯＬからはこれらより後出する時期の遺物群も出土している。

後出形態としたもので，第40図－266・269，第41図－293，第42図－302・303，第60図－450，第62図－490などがその代表例である。393－ＯＬでの出土数は少ないが，この遺物群と同形態のものは谷部１の土器溜りで多く出土している。

前報告（『陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ』）では，この土器溜りの遺物群の中にＴＧ232号からの形態変化の認められるものの存在を指摘した。今回393－ＯＬの中に先行形態でもやや後出する形態を確認したことにより，ＴＧ232号からこの土器溜りに至る形態変化に継起

的なものが存在することがより明確となった。また，一方で前報告でも示したように土器溜りの遺物群にはその諸特徴に須恵器の列島化傾向が強く認められるものも多くみられた。大庭寺遺跡の須恵器の形態変化からはわが国における須恵器の成立過程をたどることも可能となった。

大庭寺遺跡における須恵器生産は他窯（西日本各地の初期須恵器窯）に比べ，開始当初から大規模に展開したことは遺構の存在や遺物群の特徴から確実視される。その後についても，前述した継起的な形態変化のたどれる遺物群の存在から，連続的な窯経営が行われたことは明確で，大庭寺ムラは出現以後も大きく展開，発展したことがうかがえる。

ただ，この発展要因は出現期からの伝統的な須恵器生産集団のムラという内的要因によるものもあるが，外的要因も大きいと考えられる。

つまり，全国規模で須恵器を供給した陶邑はわが国における中央窯であり，中央権力による影響は大きかったと推定される。大庭寺遺跡は伝統性や継続性を含めた規模からみてこの陶邑を構成する中心的な一集団であったことは明かであり，中央権力からの直接的な影響も他に比べ大きいものであったと推定されよう。

註　393－ＯＬの調査は1990年度にも行なわれ，その成果については，『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』1992年で報告されている。遺物の様相についてはほぼ今回と同様であるが，完形品に近い良好な資料も多く，併せて参照されたい。

第Ⅳ章　第Ｘ区の調査成果

第１節　調査概要

第１項　概要（第７・94・97・110図，図版13・14）

第Ｘ調査区は，中位段丘と沖積段丘の境界部付近に位置する。現在は耕地化され水田が営まれるが，段丘の境界には約１～1.5mの段差がある。

地形図や航空写真からはこの段差に沿って流れる埋没河川の存在が観察される。実際，周辺域の調査でも，この段差に沿って流れる弥生時代から古墳時代の旧河川（56－ＯＲ）が検出され，弥生時代から古墳時代までの遺物が数多く出土した。

一方，中位段丘面では古墳時代から平安時代の遺構が密集して検出されている。このうち古墳時代中期の遺構には，竪穴住居や大型甕や壺を並べた溝などがあり，須恵器生産集落における居住域の中心として注目されていた（第97図参照）。

今回の調査でも小規模な調査面積であったが，古墳時代から鎌倉時代の遺構・遺物が数多く検出され，これまでの調査成果に加え数多くの新成果も得られた。

特に古墳時代の成果には眼を見張るものがあった。中期では須恵器生産集落の居住域が限定され，後期では須恵器や土師器の良好な一括資料が得られるとともに河川の変遷が把握され，集落との有機的な関係も明確にされてきた。

また，当調査区では古墳時代，奈良時代，鎌倉時代における遺構面の存在が確認され，沖積段丘の開発の一端を把握することもできた。

次項では地層と遺構の関係について概観する。

第２項　基本層序（第95・96図）

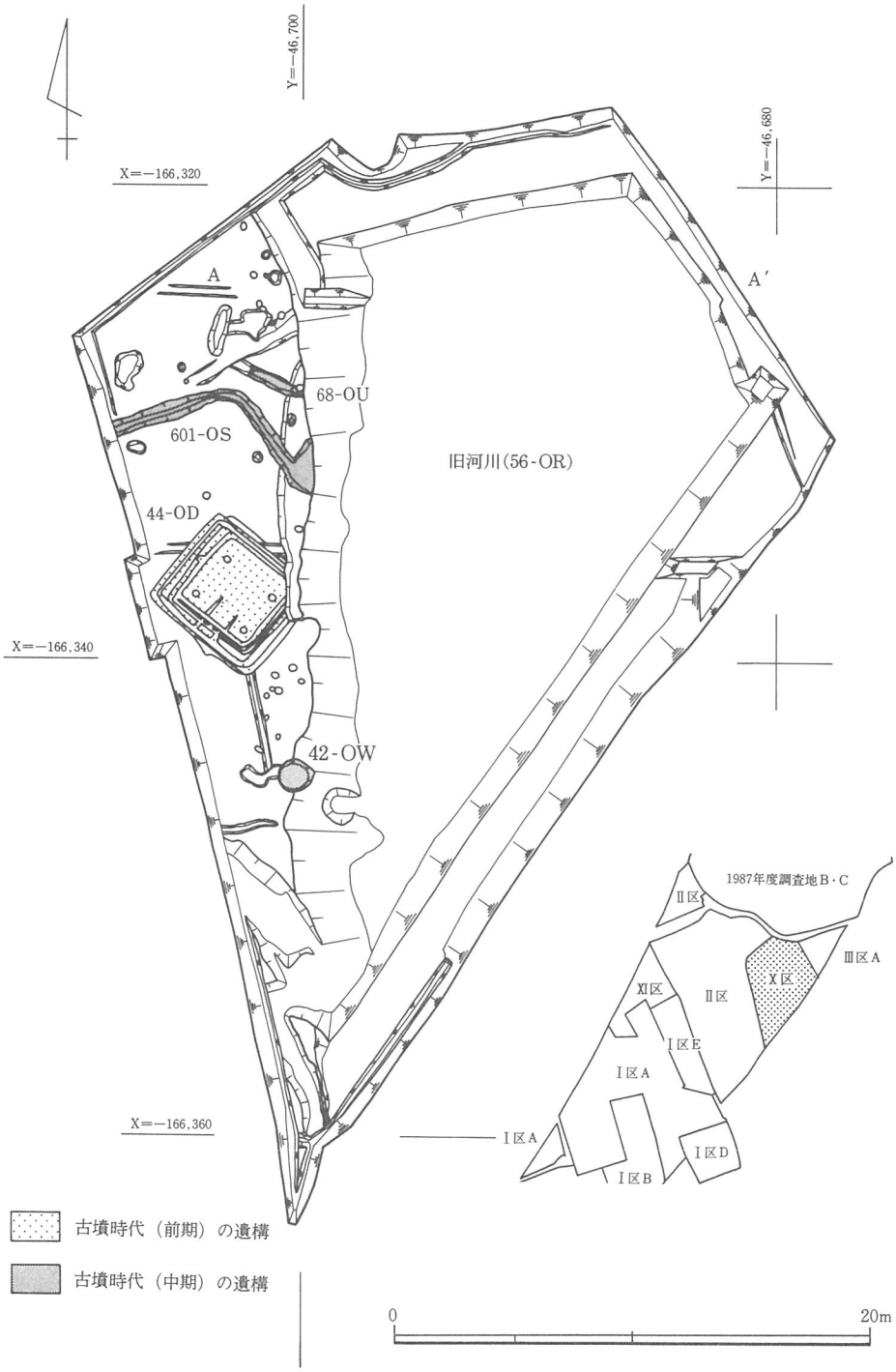
ここでは，遺構が重複する調査区北端部の土層を示した。

第Ⅰ層：機械掘削による現代耕作土の残存土である。

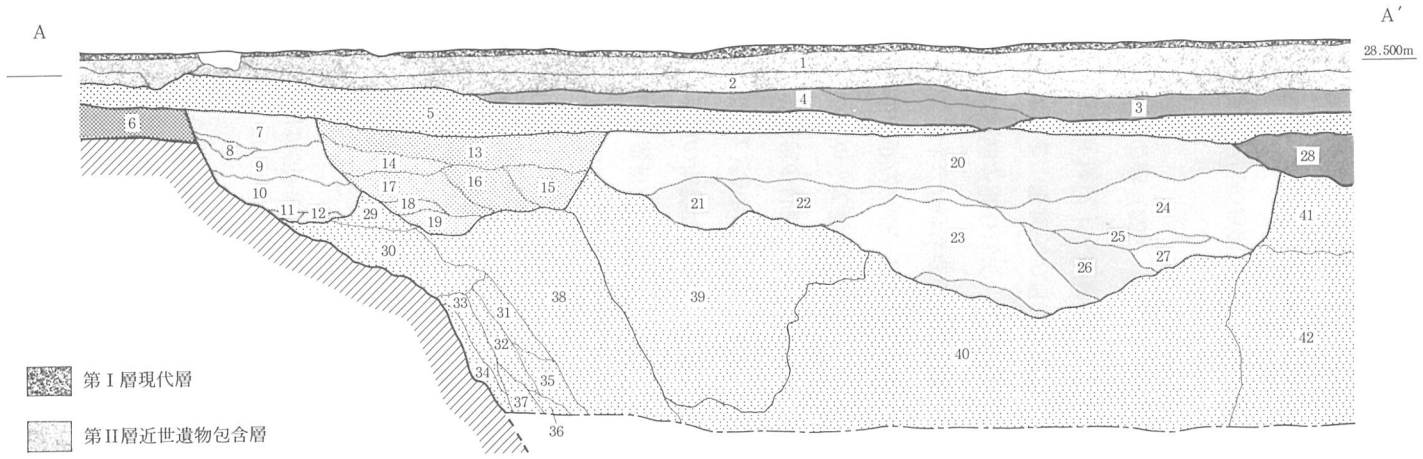
第Ⅱ層：褐色系の粘質土がほぼ水平に堆積し，近世の耕作地層と考えられる。

遺物はほとんどが細片となって出土した。古墳時代から近世に至るものがあるが，堆積時期を反映した近世の遺物は少ない。

第Ⅲ層：黄色の強い褐色系の粘質土である。Ⅱ層同様，耕作地層と考えられる。時期は出



第94図　第Ⅹ調査区遺構図



第Ⅰ層現代層

第Ⅱ層近世遺物包含層

第Ⅲ層中世遺物包含層

第Ⅳ層中世遺物包含層

第Ⅴ層奈良時代遺物包含層

第Ⅵ層古墳時代末～奈良時代堆積層

第Ⅶ層段丘層

第Ⅷ層中世溝（3235-OS）

第Ⅸ層奈良時代自然流路（1010・1011-OS）

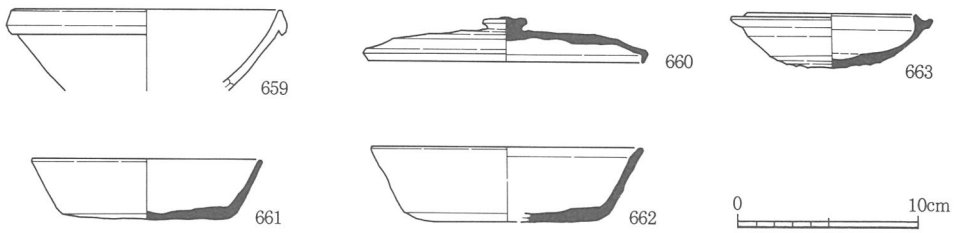
第Ⅹ層旧河川（56-OR）

1. 5YR 5/1 褐灰色粘質土
2. 5YR 6/1 褐灰色粘質土
3. 10YR 6/2 灰黄褐色粘質土
4. 7.5YR 6/3 にぶい褐色砂礫混じり粘質土
5. 10YR 4/2 灰黄褐色砂礫混じり土
6. 10YR 3/1 黒褐色粘質土
7. 7.5YR 4/1 褐灰色砂礫土
8. 7.5YR 4/1 褐灰色粗砂
9. 7.5YR 5/1 褐灰色粗砂
10. 5Y 5/1 灰色砂
11. 5Y 5/1 灰色粗砂
12. 5G 5/1 緑灰色粘土
13. 10YR 4/2 灰黄褐色粘質土
14. 7.5Y 5/1 灰色砂混じり粘土
15. 2.5Y 6/1 黄灰色粗砂
16. 10Y 4/1 灰色シルト
17. 7.5Y 5/1 灰色粗砂混じりシルト
18. 7.5Y 5/2 灰オリーブ色砂
19. 10Y 6/2 オリーブ灰色粘質シルト
20. 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質土
21. 10YR 6/2 灰黄褐色粗砂
22. 2.5Y 7/4 浅黄色粘土
23. 2.5Y 5/1 黄灰色粗砂
24. 2.5Y 6/2 灰黄色粗砂
25. 2.5Y 7/4 浅黄色細砂
26. 10Y 7/1 灰白色砂礫
27. 10Y 7/1 灰白色砂
28. 10YR 5/2 灰黄褐色シルト
29. 5Y 8/1 灰白色粘質土
30. 5Y 7/1 灰白色礫混じり土
31. 5GY 5/1 緑灰色粘質シルト
32. 10Y 3/1 オリーブ黒色粘土
33. 10Y 4/2 オリーブ灰色礫混じり土
34. 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色粘土
35. 5GY 4/1 暗オリーブ灰色粘質シルト
36. 7.5GY 5/1 緑灰色粘質シルト
37. 7.5GY 4/1 暗緑灰色粘質シルト
38. 10GY 6/1 緑灰色シルト
39. 10GY 7/1 明緑灰色シルト
40. 10YR 6/3 にぶい黄橙色粗砂
41. 10YR 7/2 にぶい黄橙色シルト
42. 5G 6/1 緑灰色シルト

天地 0 2m

左右 0 4m

第95図　第Ⅹ調査区の基本層序



第96図　第Ⅲ・Ⅴ層出土遺物

土遺物からは15世紀が下限とされる。当層の時期を直接反映した遺物ではないが，白磁椀（659）を図示した。

第Ⅳ層：灰褐色の砂礫混じり土である。当層の下層は河川堆積であり，上層の耕作地開発に伴う整地地層の可能性が高い。

出土遺物には古墳時代～中世までのものがあるが，上層に比べ奈良時代の遺物が増加する傾向が認められる。

第Ⅴ層：河川上に広がる灰褐色のシルト層で，層厚は一定していない。奈良時代における流路や河川の最終堆積土と考えられる。

遺物は当層の堆積時期を反映した奈良時代の須恵器（660～662）の他古墳時代末頃の須恵器（663）などが出土している。

第Ⅵ層：黒褐色の砂礫混じり粘質土である。河岸から段丘面にかけての限られた範囲に分布し，西に向かって薄くなる。

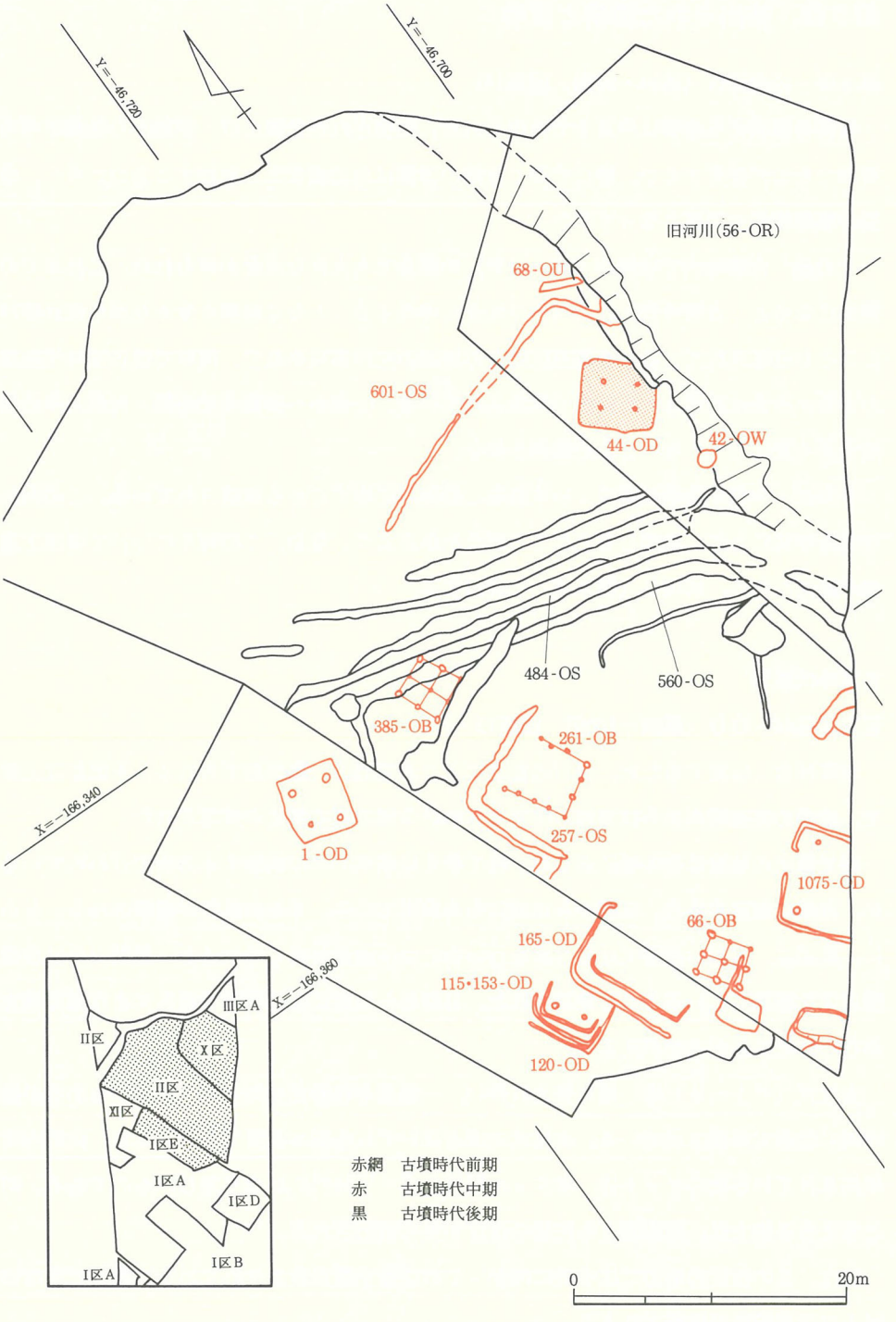
出土遺物は少ないが，奈良時代の溝は当層から切り込まれることより，古墳時代末から奈良時代にかけての自然堆積地層や奈良時代の開発に伴う整地土層の可能性が指摘された。当層の検出範囲が限られていたため本調査では明確にできなかったが，奈良時代の集落展開を考慮すると，整地土の可能性が高いとされる。

第Ⅶ層：段丘を構成する地層である。古墳時代の遺構はこの段丘層で検出された。

第Ⅷ層：中世の溝（235－ＯＳ）の堆積土で，奈良時代の流路と重複する。検出面は第Ⅴ層上面である。

第Ⅸ層：奈良時代の自然流路（1010・1011－ＯＳ）の堆積土で，洪水により埋没したことがうかがえる。第Ⅵ層上面から切り込まれることが確認されている。

第Ⅹ層：弥生時代から古墳時代の河川（56－ＯＲ）の堆積土である。古墳時代を中心とした遺物が多量に出土している。なお，今回は調査の都合上，完掘まで及んでいない。



第97図　第X調査区周辺の古墳時代遺構

第２節　検出された遺構と遺物

第１項　古墳時代（第94・97図，図版14）

集落を構成する遺構は段丘上で検出された。検出された遺構には，前期から後期に至る時期のものが存在するが，特に中期と後期の遺構は周辺調査区と連続するものが多く，各期の集落様相も明確となってきた。

その他，古墳時代では河川（56－ＯＲ）の調査でも大きな成果が得られた。これまでの調査によると，古墳時代，この河川は完全に埋没することなく規模を変えながら流れ続けたことが確認されている。当調査区はこの河川の左岸部にあたり，河岸では古墳時代後期の土器が多量に投棄された状況で検出されている。中期から後期までの間，河川左岸の肩は大きく変化していないことが推測された。

さらに，中期や後期の溝は，いずれもこの河川に注ぐことも確認されている。この河川が集落形成に大きく影響していたことがうかがえよう。なお，この河川については出土遺物が膨大なため，別項目（第３項）で詳説する。

古墳時代前期

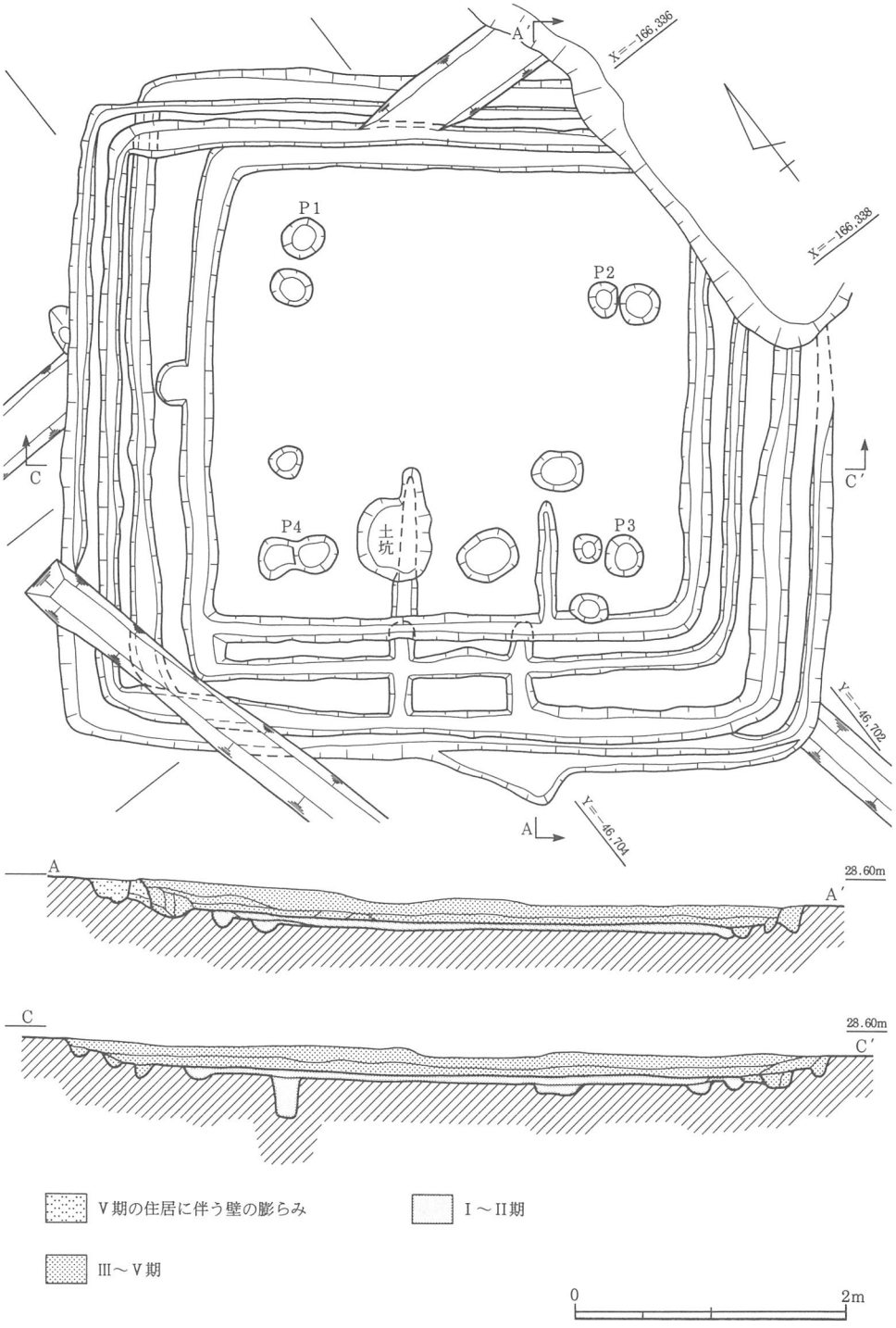
竪穴住居44－ＯＤ（第98～100図，図版15・77）

河岸付近に位置するため，河川の侵食により北東隅の一部が削平される。平面形は方形で，壁溝の重複関係からは当初の住居も含め計５回の建て替えが確認された。

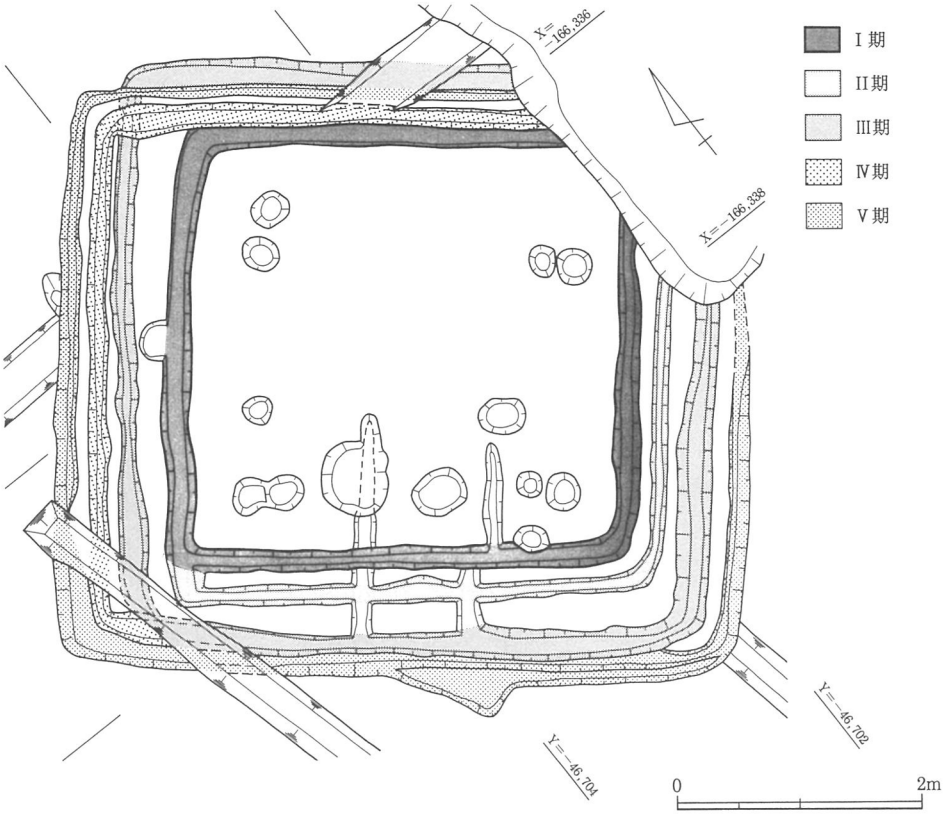
建て替えの状況は第99図に示した。建て替えは基本的には拡張する方法で行われているが，詳細に観察すると，II期からIII期に至る段階でのみ，４方の拡張が観察される。さらに，床面は，III期の段階では貼り床を行い新たな床面を形成しているが，III期以外は前段階の床を踏襲していることも確認された。II期からIII期に至る段階で最も大きな建て替えが行われたことがうかがえよう。

主柱穴（Ｐ１～４）は，建て替えに伴い，一部若干移動させたもの（Ｐ４）もあるがほぼ同じ位置で踏襲されている。主柱穴の深さはいずれも30㎝程度である。なお，住居内で検出されている他のピットは，深さ５㎝程度と浅く主柱穴にはなり得ないものである。炉と考えらる焼土は，両床面とも住居のほぼ中央で検出された。

また，この住居の南辺では中央に向かってのびる小溝が検出されている。明言できないが入口の可能性が指摘されよう。



第98図　竪穴住居（44－ＯＤ）平・断面図

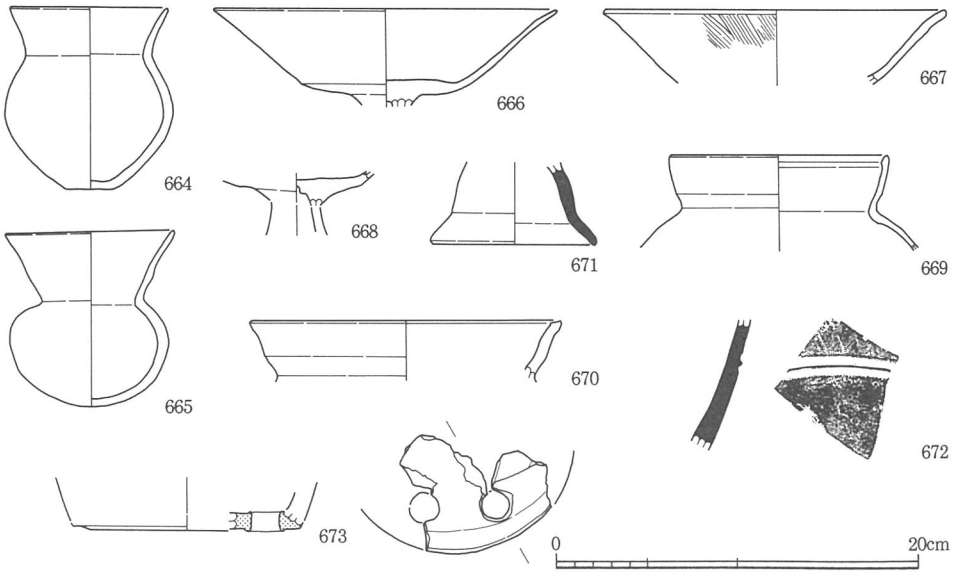


第99図　竪穴住居（44－ＯＤ）拡張の変遷

出土遺物は第100図に示した。このうち直接住居に伴うものは，南辺の小溝付近から出土した土師器664・666，土坑出土の665のみである。664・665はＶ期に伴う遺物で，前期でも須恵器出現期に近い時期が推定されよう。他の遺物はいずれも埋土中からの出土で，初期須恵器（671・672）や軟質系土器（673）の細片も含まれている。ただこれらはいずれも上層からの出土であり，周辺が中期の遺構の密集地でもあることから混入と推定される。

このように，出土遺物（664・665）から住居の時期は前期に比定される。しかし，この土師器は明確に初期須恵器に先行する時期のものとはいえないもので，併行する可能性も含んでいる。さらに，この住居は周辺の初期須恵器を伴う遺構との重複関係も認められず，遺構配置からは中期に存在していた可能性も指摘できる。

ここでは前期の竪穴住居として報告したが，前期でも中期に近い時期に出現し須恵器出現後の中期まで存続した可能性も考慮する必要があろう。



第100図　竪穴住居（44－ＯＤ）出土遺物

古墳時代中期

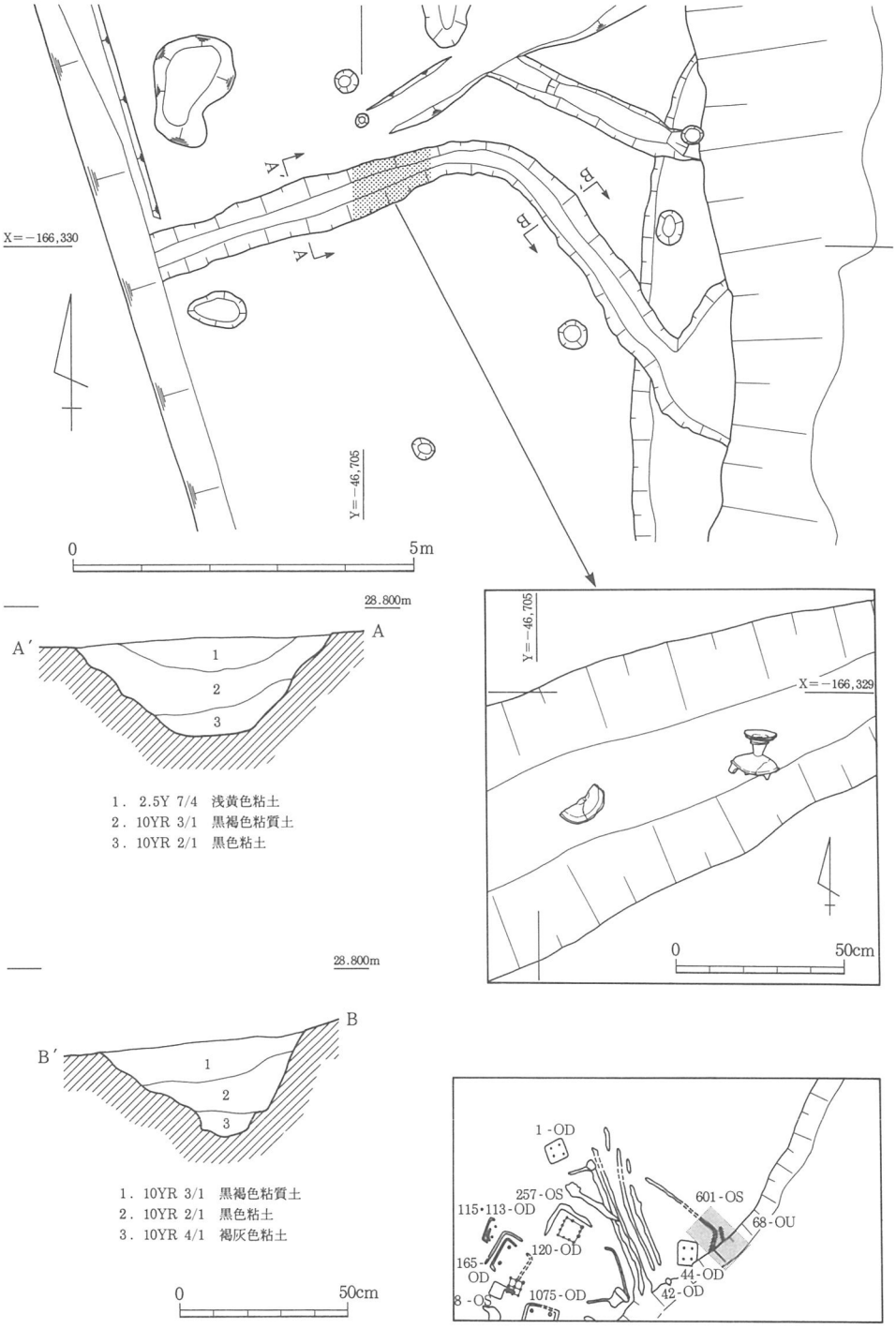
溝601－ＯＳ（第101・102図，図版77）

調査区北西端で検出された。今回の調査により第II調査区で検出された601－ＯＳ（『陶邑・大庭寺遺跡II』参照）に連続することが確認されるとともに，この溝が居住域を区画する性格を備えていたことも判明した。溝を境にして北側では住居は検出されず，土壙墓が１基検出されているのみである。また，ラッパ状に開く河川への注ぎ口も検出され，排水の機能も併せて備えていたことも確認された。

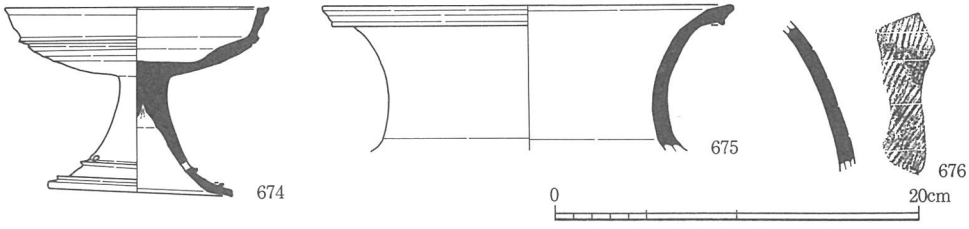
今回検出地点での法量は幅0.5～0.8m，深さ0.3mを測る。当調査区周辺は大幅な削平を逃れた場所であり，この法量は掘削当時に近いものと推定される。溝の埋土は大きく３層に分けられるが，このうち最下層は自然堆積と考えられた。

出土遺物は少なく，初期須恵器が３点図示された。674は第101図に出土状況を示した遺物で，完形品に近いものである。出土層位は第２層である。676は壺の体部片で螺旋状沈線を巡らす特徴がある。

なお，今回の調査地点ではみられなかったが，前調査では，溝の西端で大型甕や壺が並べられた状況が確認されている。土器が正立しているため土器棺墓とは考え難く，祭祀など他の機能や目的が考えられよう。



第101図　溝（601－ＯＳ）平・断面図



第102図　溝（601－ＯＳ）出土遺物

井戸42－ＯＷ（第103～106図，図版16・77）

河岸に立地する円形の井戸である。直径約1.3m，深さ約0.7mを測り，底付近からの湧水は著しい。埋土は２層に大別され，上層は褐色系の粘土混じりの砂礫土，下層は褐色系の砂礫土であった。

遺物は下層の上面でまとまって出土している。遺物は104～106図に示したが，これらの中には完形品に近いものがあり，出土の状況も考え合わすと意図的に投棄された可能性が高いと判断された。また，出土遺物には初期須恵器（677～683）と軟質系土器（685～691）があるが，他の遺構に比べると軟質系土器の出土が多い傾向もうかがえた。

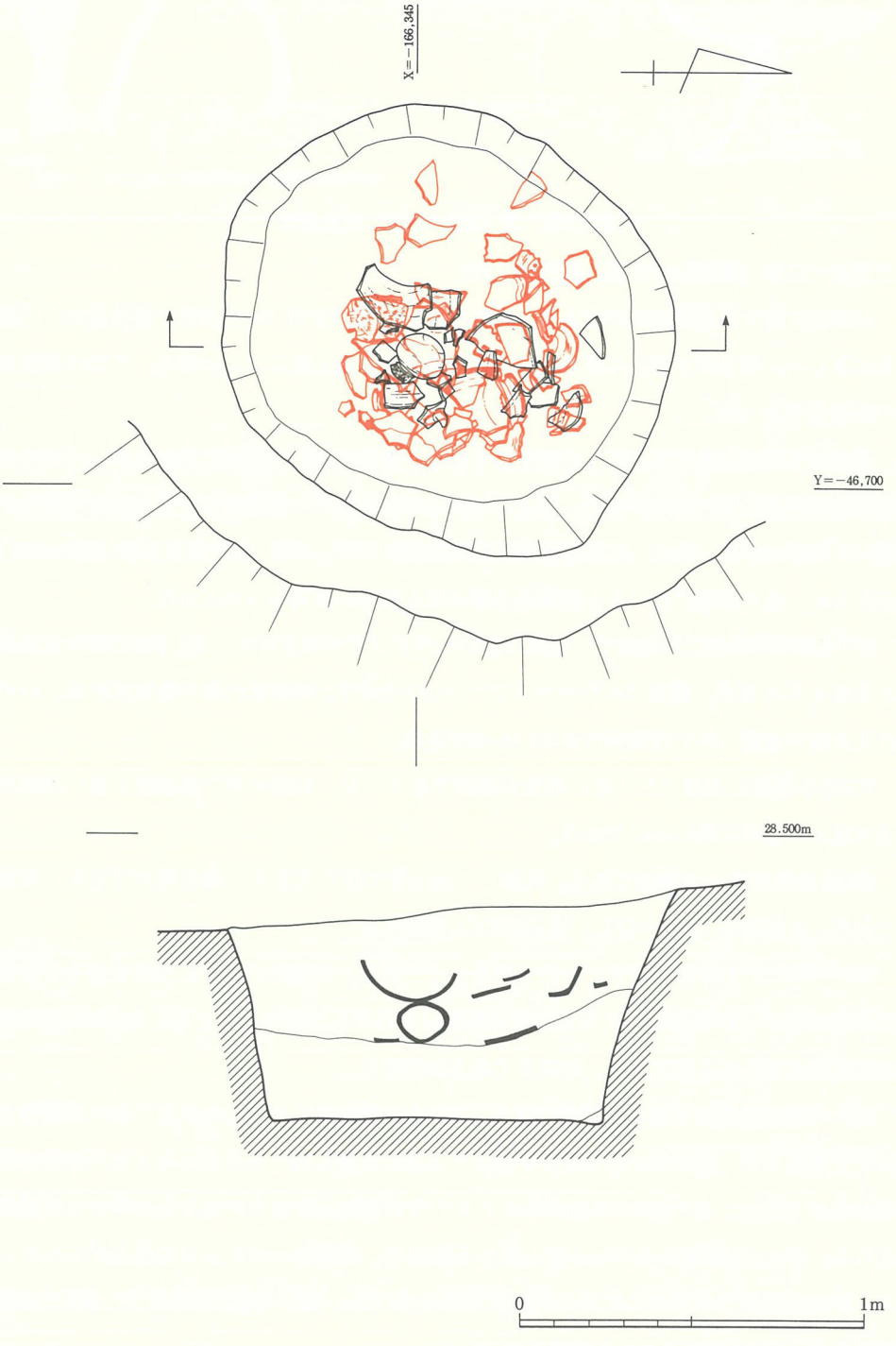
677は高杯の杯部に似る鉢で，底部は粗いヘラケズリが施されている。678の破片は高杯とも考えられるが，底部はヘラケズリで仕上げられ677と同形態の鉢と推定される。いずれも大庭寺遺跡の中では類例の少ないものである。

679の小型壺は欠損のため孔の有無が確認できないが，体部中央に波状紋と低い凸帯が巡り瑯の可能性が高いものである。

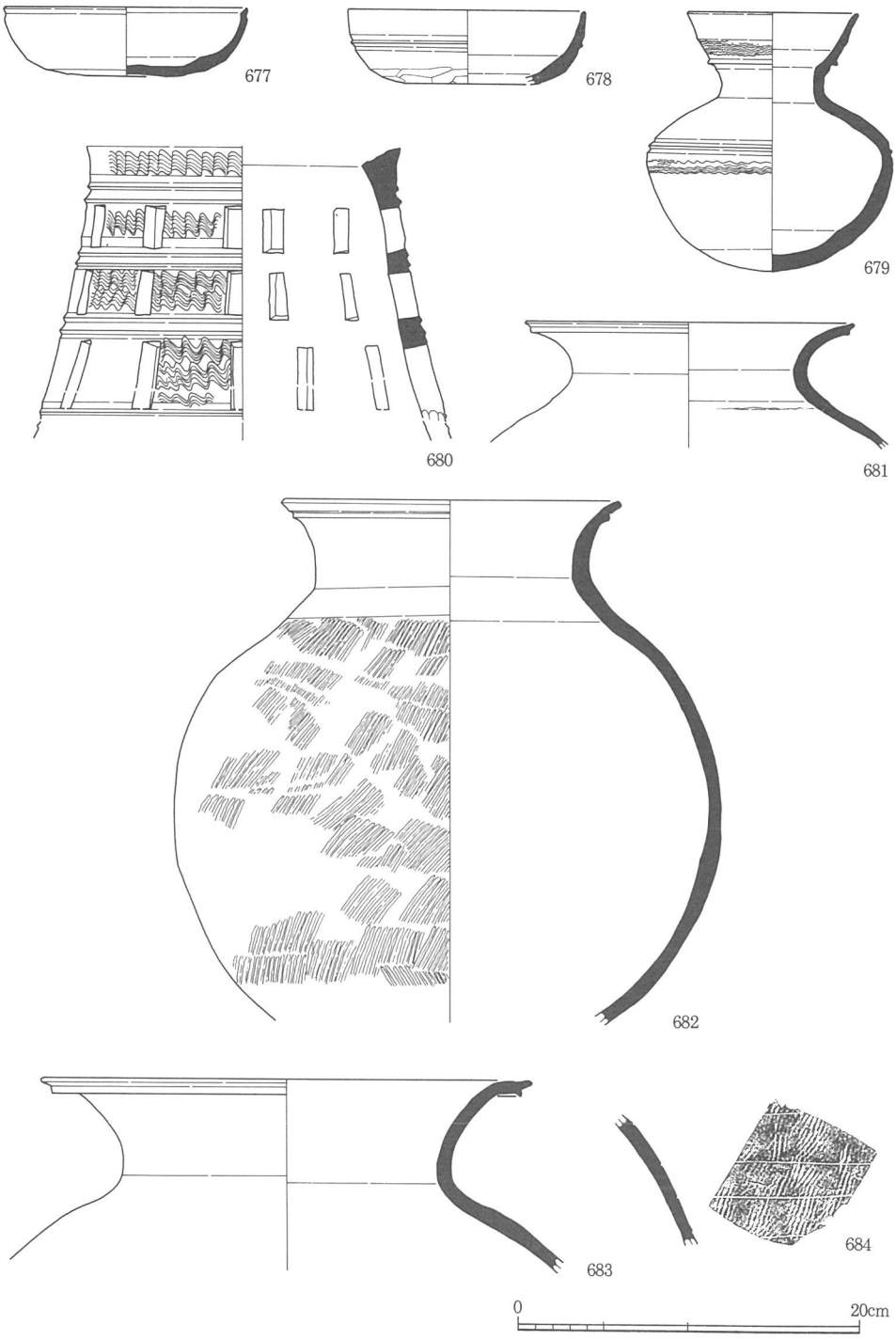
680は高杯形器台の脚部である。杯部との接合面の径が大きく，脚の開きは小さい形態である。小開析谷（393－ＯＬ）出土の500と類似する。

681～683はいわゆる中型甕と呼称されるものである。口端部の直下に凸帯を巡らす特徴は共通するが，口頸部の傾きなど細部の形態はそれぞれで異なっている。684は体部に螺旋状沈線を巡らせる壺である。小破片であるが図示した。

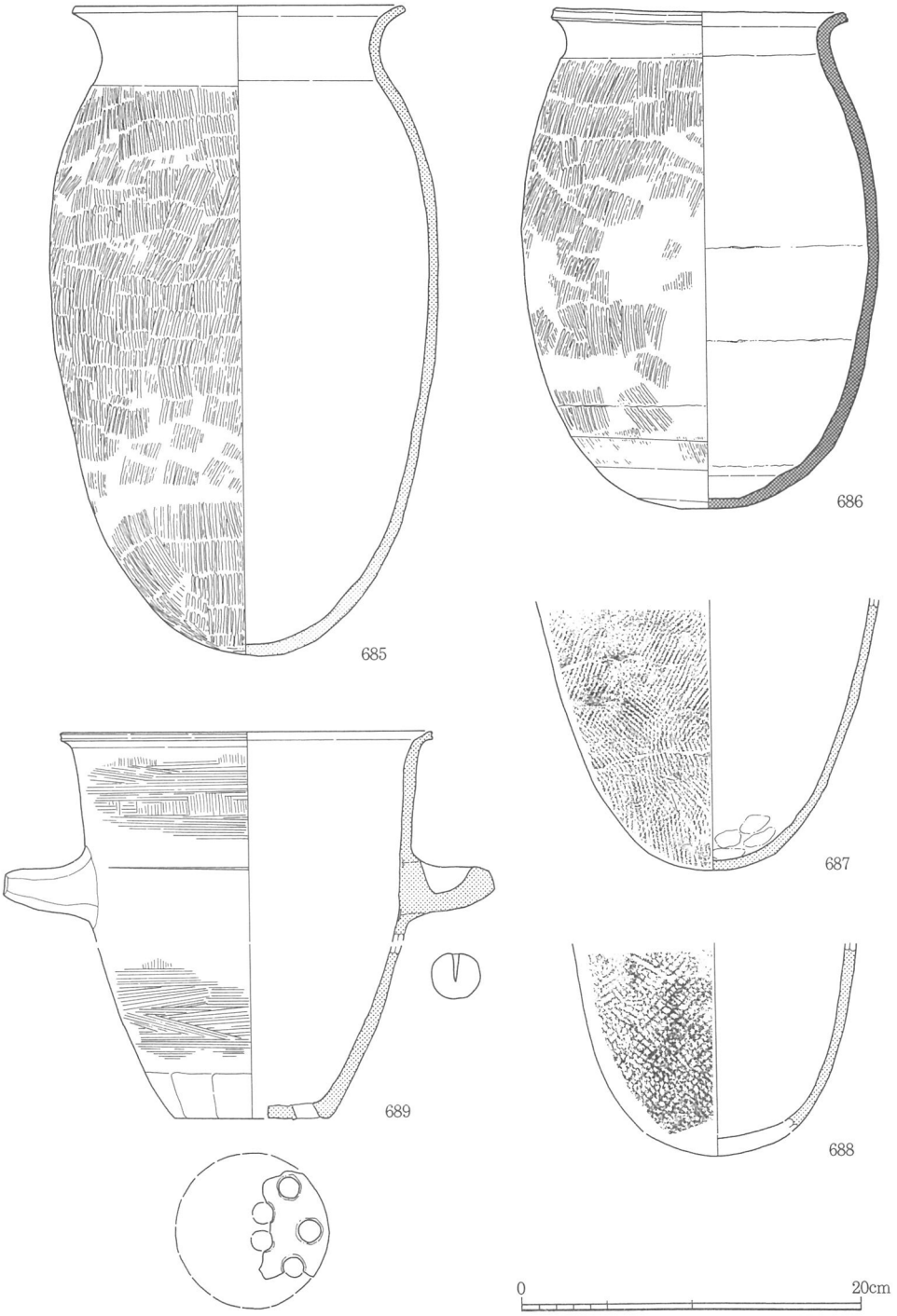
685～688は軟質系土器の長胴甕である。685は口縁端面にやや丸みがあり他の長胴甕とは若干異なるが，胴体部は最大径が中央より上方に位置し張りも小さいなど先行形態の特徴が看取される。また685では底部のタタキ方向の変換点付近での胎土色の異なりが観察される。686は長胴甕の中では小型に属する製品で，底部はヘラケズリで仕上げられている。焼成は硬質で部分的には還元状態まで及んでいる。687・688は底部片で，687には縄席タタキ，688には格子タタキが残されている。



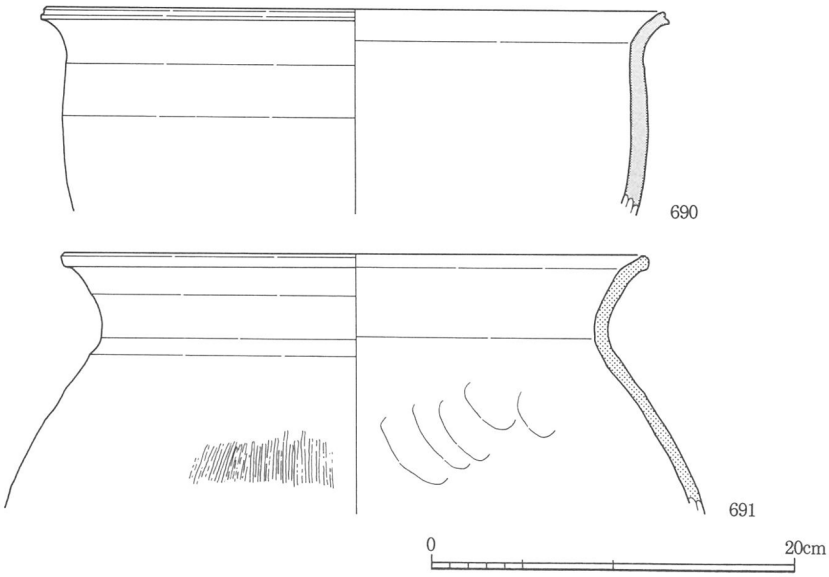
第103図　井戸（42－ＯＷ）遺物出土状況図



第104図　井戸（42－ＯＷ）出土遺物１



第105図　井戸（42－ＯＷ）出土遺物２



第106図　井戸（42－ＯＷ）出土遺物３

689の甑は図上で完形品に復元された。外面にはＴＧ232号の大型甕の頸部に施されたものと似たハケ目を施す。蒸気孔は小円孔を巡らす形態である。

690は小破片であるが傾きから深鉢と推定された。

691の甕は軟質系土器では他に類例のない器形である。須恵器の焼成不良品とも考えられたが，口縁端部の形態，胎土などは異なっており，ここでは軟質系土器とした。

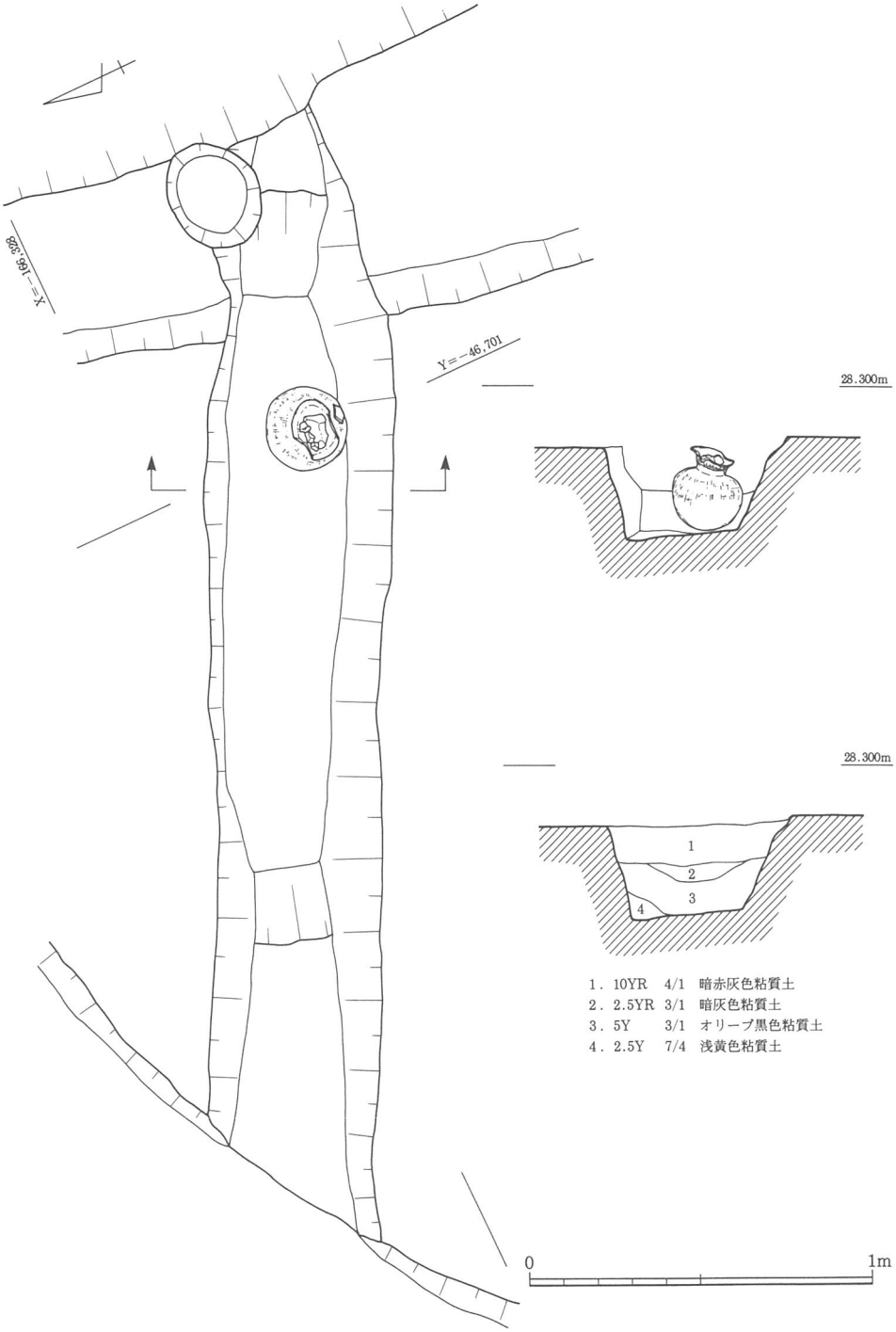
土壙墓68－ＯＵ（第107・108図，図版17）

居住域を区画する溝（601－ＯＳ）の北側に位置する。

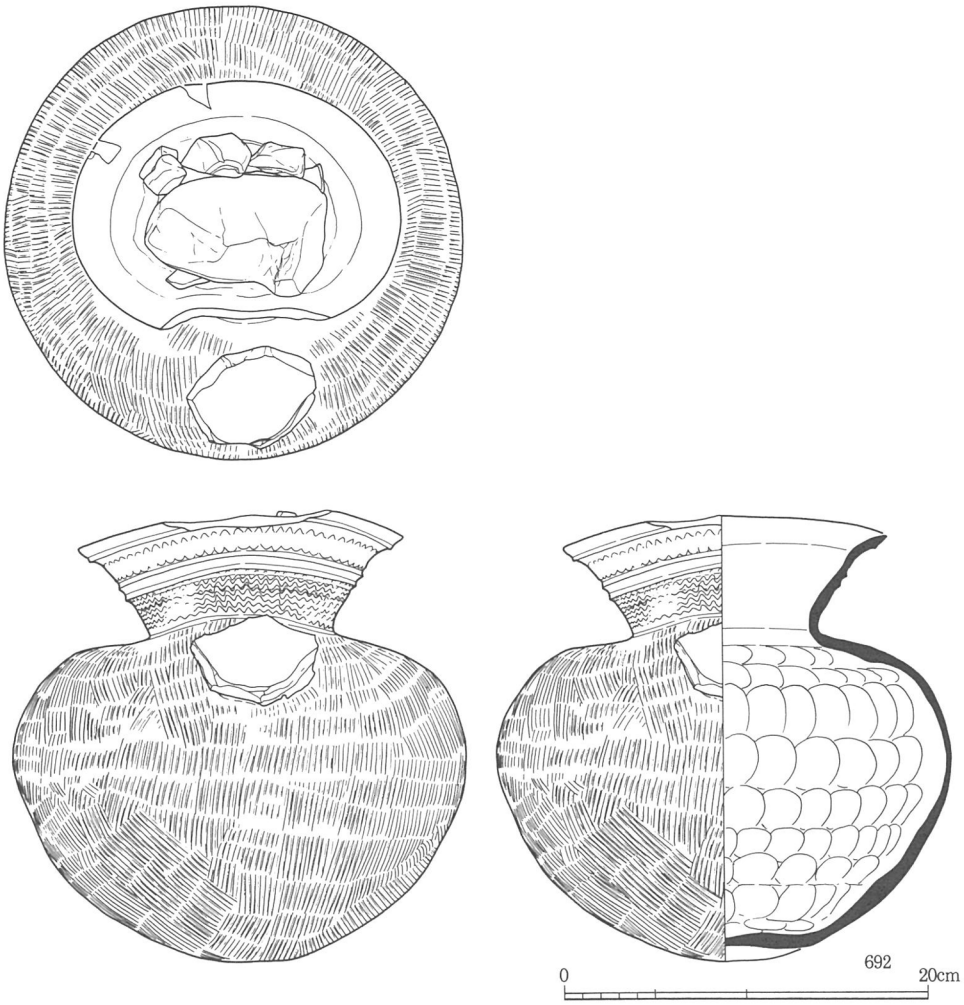
墓壙の平面形は細長い長方形を呈し，主軸は東西方向である。法量は全長2.8m，東側幅0.56m，西側幅0.48mで東側の方が若干広い。深さは東側で0.26mを測る。断面形は逆台形を呈するが，埋土観察の結果，木棺の側板や蓋の痕跡は確認できなかった。

棺内遺物は玉類や鉄製品はみられなかったが，東端付近に須恵器の壺が底面に据えられていた。この壺（692）の内部には有機物を含む黒褐色粘質土が入っており，口頸部は河原石により蓋がなされていた。

このような棺内に土器を供献する形態は，わが国での類例は少なく，朝鮮半島の墓制に通有みられるものである。土器など遺物からだけでなく，墳墓形態からも大庭寺遺跡における渡来系工人の存在が確実視されよう。



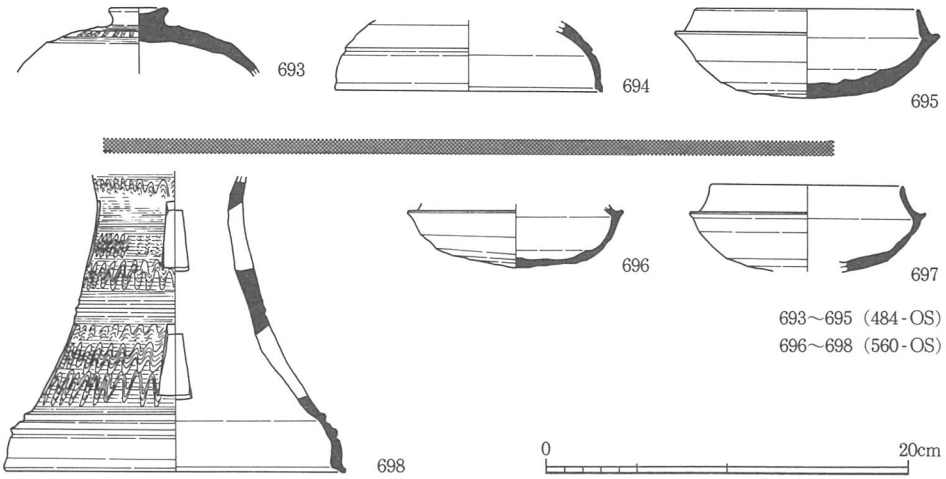
第107図　土壙墓（68－ＯＵ）平・断面図



第108図　土壙墓（68－ＯＵ）出土遺物

墳丘については不明であるが，土壙墓と溝の位置関係から判断して明確な墳丘が築かれたとは考えられない。存在しても土壙墓を覆う程度の土盛りであったと推定される。須恵器生産開始時，須恵器生産集団は墳丘まで備えた古墳を築造する地位になかったこともうかがえよう。

なお，古墳時代中期のわが国における棺内に土器（須恵器）を供献する土壙墓の類例であるが，福岡県甘木市池の上・古寺墳墓群でその存在が知られている。池の上・古寺墳墓群でも陶質土器に近い形態の須恵器が供献されており，大庭寺遺跡同様，渡来系工人の墳墓と考えられている。



第109図　溝（484・560－ＯＳ）出土遺物

古墳時代後期（第94・97・109図）

調査区の南端で溝が検出された他，河川の岸に多量の遺物が廃棄された状況で出土している。河川については別項で記述するため，ここでは溝のみを記した。

溝560・484－ＯＳ（第97・109図）

前調査（第Ⅱ調査区）で検出された東西方向に走る溝群（560・484－ＯＳ）に連続することが確認された。また，今回の調査区では河川への注ぎ口が検出され，この溝が排水目的を含んでいたことも明らかとなった。図示した遺物のうち693～695が484－ＯＳ，696～698が560－ＯＳからの出土である。

第２項　奈良時代（第110・111図，図版13）

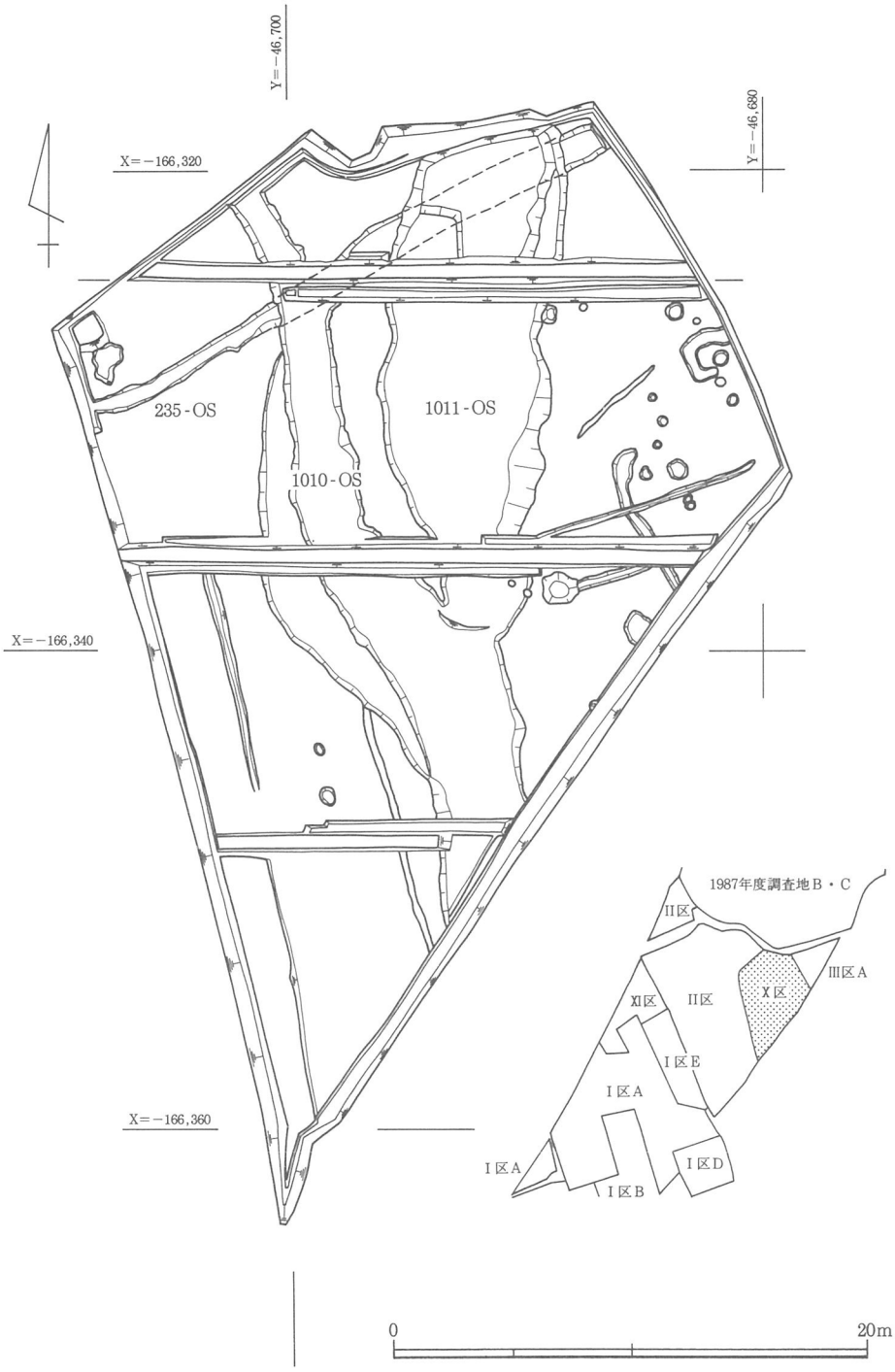
奈良時代の遺構は第Ⅵ層の上面で，自然流路が２条検出されている。

自然流路1010－ＯＳ（第110・111図）

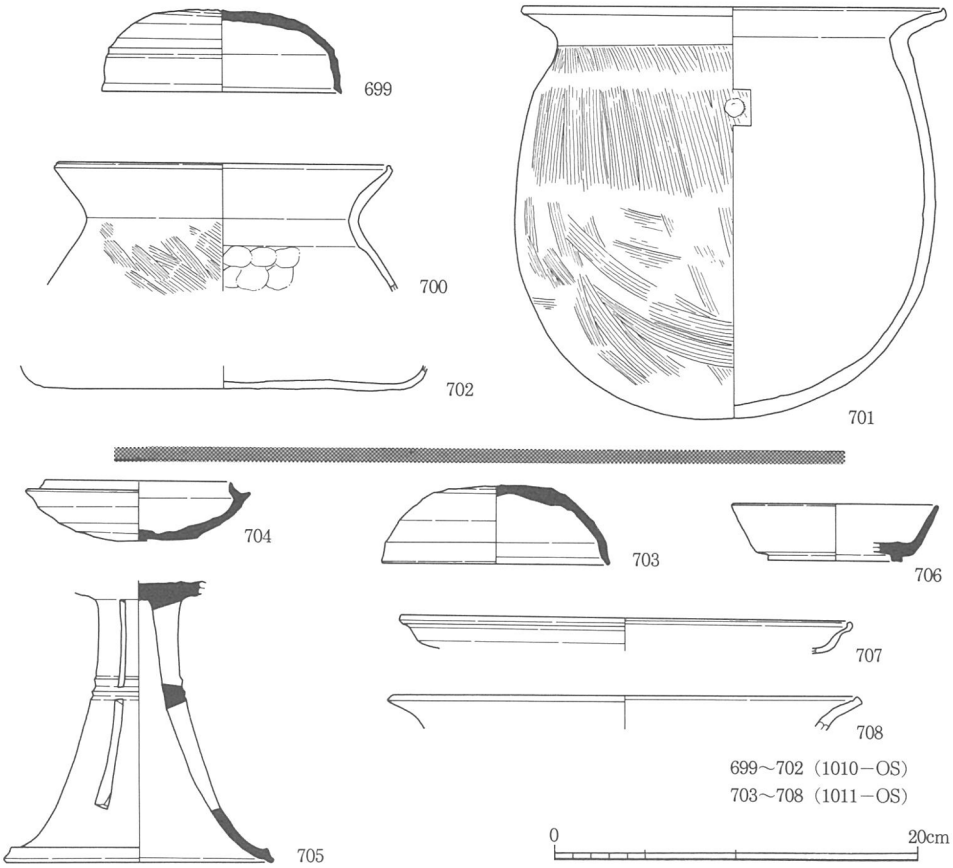
古墳時代の河川（56－ＯＲ）に沿って走り，埋土の状況からは比較的強い流れによって埋没したことがうかがえる。出土遺物には古墳時代のもの（699）もあるが，奈良時代の遺物（700～702）が主である。奈良時代の遺物のうち土師器甕（701）は完形品で，胴体部の上端付近には焼成後の穿孔が認められた。正立して出土した状況も考え合わせると，祭祀に伴うものと考えられよう。

自然流路1011－ＯＳ（第110・111図）

1010－ＯＳから分岐する。規模から考えると当溝の方が本流かもしれない。基本的な埋



第110図　奈良・鎌倉時代の遺構



第111図　溝（1010・1011－ＯＳ）出土遺物

土は1010－０Ｓと同一である。遺物は奈良時代の須恵器（706）や土師器（707・708）の他，古墳時代後期から末頃の須恵器（703～705）も出土している。

なお，両流路とも古墳時代の河川（56－ＯＲ）上を走り，この河川が埋没していく過程での，最終的な河川のなごりと理解される。

第３項　鎌倉時代

当期の遺構は，第Ⅴ層上面で，溝が１条検出されたのみである。

用水溝235－ＯＳ（第13・110図）

屋敷地を囲む溝につながる用水路である。これまでの調査により，溝の全容はほぼ把握されており，今回の調査区でも推定通りの位置で検出された。検出地点での幅は約1.5m，深さ約0.5mを測る。遺物の出土は少ないが，瓦器椀の細片などがある。

第３節　旧河川（56－ＯＲ）の調査

第１項　概要（第94・95・112図，図版18～21）

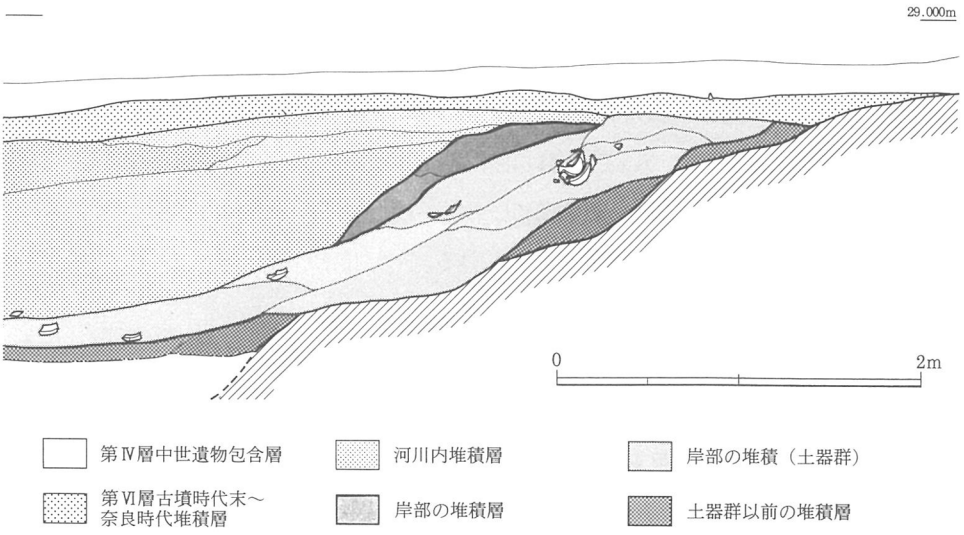
旧河川（56－ＯＲ）については，1987年度に行われた調査でその概要はほぼ把握されている。

河川の初源は出土遺物からみて弥生時代中期とされ，その後，規模や流れる位置を変えながら，奈良時代にはそのほとんどが埋没する。1987年の調査では，平面的には明確に検出されなかったが，断面観察により埋没するまで計５回の大きな流れの変化が確認されている。

最も河川の規模が大きかった時期は，弥生時代中期から６世紀の前半期である。河川幅は約60m，深さは４～4.5mを測り，弥生土器，古式土師器，初期須恵器，６世紀前半代の須恵器が多量に出土した。ただ，これらの遺物が集中する場所は各時代で多少異なっていることが看取され，数時期に及ぶ流れの変化がうかがえよう。

６世紀前半以降は規模を縮小する。６世紀中頃では前河川の西岸付近で幅14m，深さ２mまで規模を縮小し，６世紀後半ではさらに縮小している。特に６世紀後半の河川は自然流路と呼称すべき規模である。

今回の第Ｘ調査区は，調査地を横断する当河川の南西端付近にあたる。



第112図　河川（56－ＯＲ）の堆積状況

調査では河川の西岸部の河川岸が良好な状況で検出され，６世紀前半代に限定される遺物が廃棄された状況で多量に出土した。検出された河川岸の時期が確定されるともに，段丘面（丘陵１）に展開する集落との関係が注目された。

さらに，河川岸にこの遺物群が投棄された後の堆積状況も把握された。第112図にその状況を示したが，遺物群の上層には６世紀中頃の遺物を出土する比較的規模の大きい堆積が観察される。６世紀前半に土器が投棄された後，河川岸の斜面には若干の堆積が進行するが，河川全体を埋没させるような堆積は６世紀中頃以降のことであることがうかがえよう。また，この堆積は前調査で確認された規模を縮小した河川の可能性が高いが，今回の調査では検証できていない。

６世紀中頃以降の河川の変遷についても，調査面積が小規模で河川の底まで調査を行うことができなかったため，明確には確認されなかった。ただ，６世紀後半から末頃の遺物は河川岸からやや東によった地点の堆積層の上層（第95図第39層）から集中して出土している。断面観察でのみからではあるが，この39層の落込みが規模を縮小した河川痕跡である可能性は指摘できよう。

なお，前回の調査では多量の初期須恵器が出土したが，当調査区では，河岸に近接した場所で数点出土したに留まっている。６世紀前半の河川と重複することを考えると，下流域に流された可能性が高いとされる。

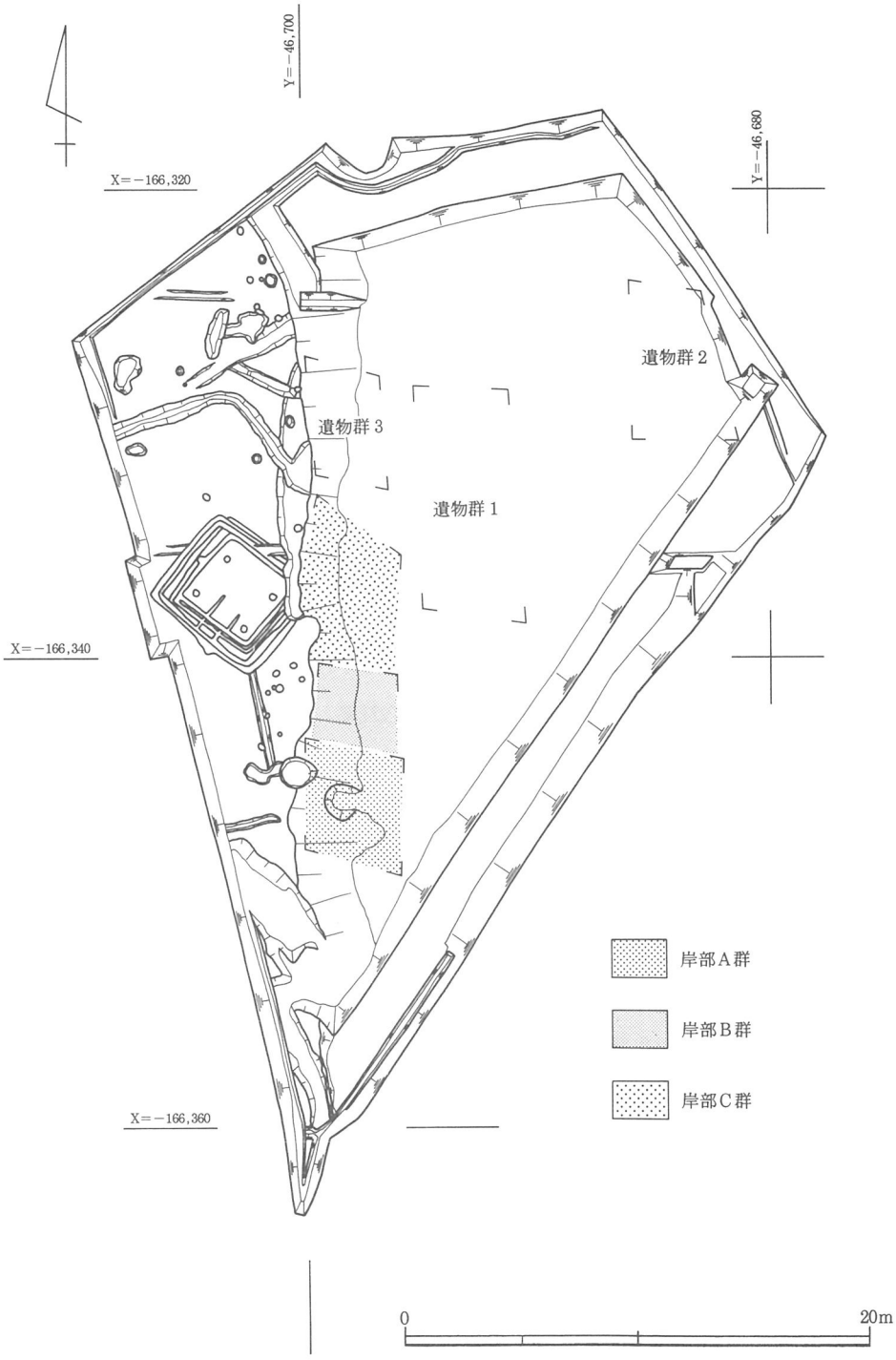
第２項　出土遺物（第113～150図，図版19～21・78～91）

１．河川岸の出土遺物

河川から出土した遺物は膨大な量に及ぶが，その大半が，河川岸に投棄された遺物群である。遺物群の出土範囲については第113図に示したが，出土の密集地点は大まかにはＡ～Ｃの３群に分けられた。また，遺物様相にもＡ～Ｃのそれぞれの地点では特徴がみられ，ここでは各群に分けて遺物の実測図を示している。

ａ．河川岸部Ａ群（第114～132図，図版20・78～86）

Ａ群は遺物群の中で南側に位置し，最も遺物が密集する群である。遺物は河川岸の上端肩部から斜面部にかけて分布するが，特に上端付近では足の踏み場がないほどの密集度であった（図版20参照）。このような出土状況から判断して，この遺物群は極めて一括性の高い遺物群であると認識した。



第113図　河川（56－ＯＲ）内遺物出土位置

一方，出土遺物の内容では，多くの完形品が出土しているが，土師器は少なくそのほとんどが須恵器で占められていることがＡ群の特徴である。さらに須恵器でも遺物の密集する肩部付近では蓋杯や高杯など小型器種の出土が特に顕著であった。

以下，各器種毎に詳説する。

須恵器（第114～132図，図版78～86）

蓋（709～765・815～832）

709～765は杯蓋である。口径11㎝から17㎝までのものがあり，口径からは５つに大別された。なお，口径から各類を明確に区切ることは難しく，ここでの分類基準の区切りは便宜上設定したものである。

①（709～714）－口径11.2～12.5㎝のものである。天井部に丸みをもち口径に対し器高の高いものと，やや偏平で低いものがある。

②（715～720・723）－口径12.6～13.3㎝のものである。口径と器高の比はＡ類の器高の低い一群と類似するものが多い。

③（721・722・724～749・752）－口径13.4～14.5㎝のものである。②同様器高の低い一群に加え，さらに天井部が偏平となる一群がみられる。

④（750・751・753～762）－口径14.6～15.7㎝のものである。口径の拡大に伴う器高の増加はほとんどない。口径と器高の比率は，③の器高の低い一群と類似するものがほとんどである。

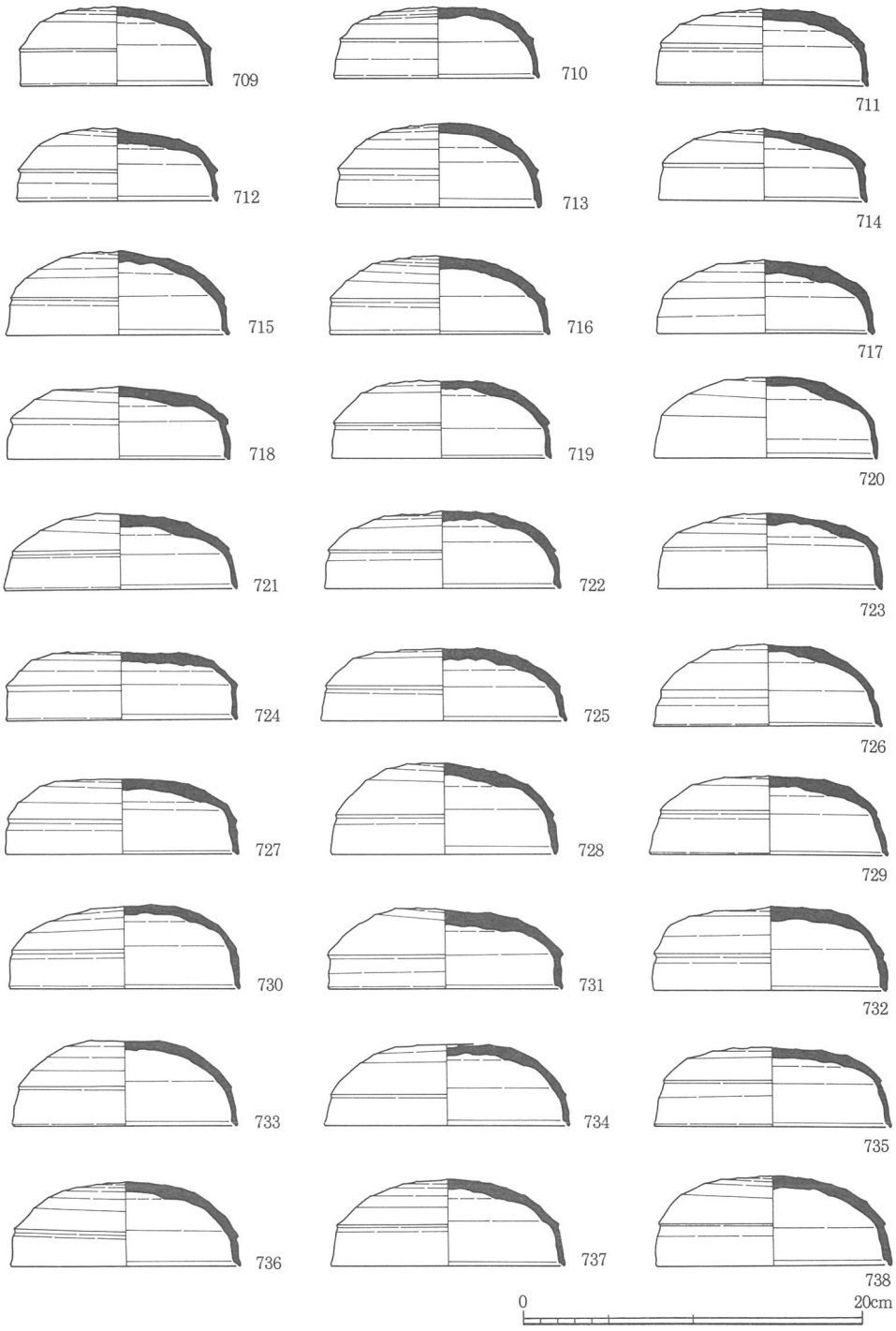
⑤（763～765）－口径16㎝を越えるものである。口径と器高の比は④と類似する。

各類の出土数は，③が最も多く次いで④の順となる。①・②・⑤の出土数は少なく，口径13.5～15.5㎝前後の製品が当遺物群の一般的な大きさといえよう。また，全体器形は，口径の拡大にともない天井部が若干偏平になる傾向がうかがえる。

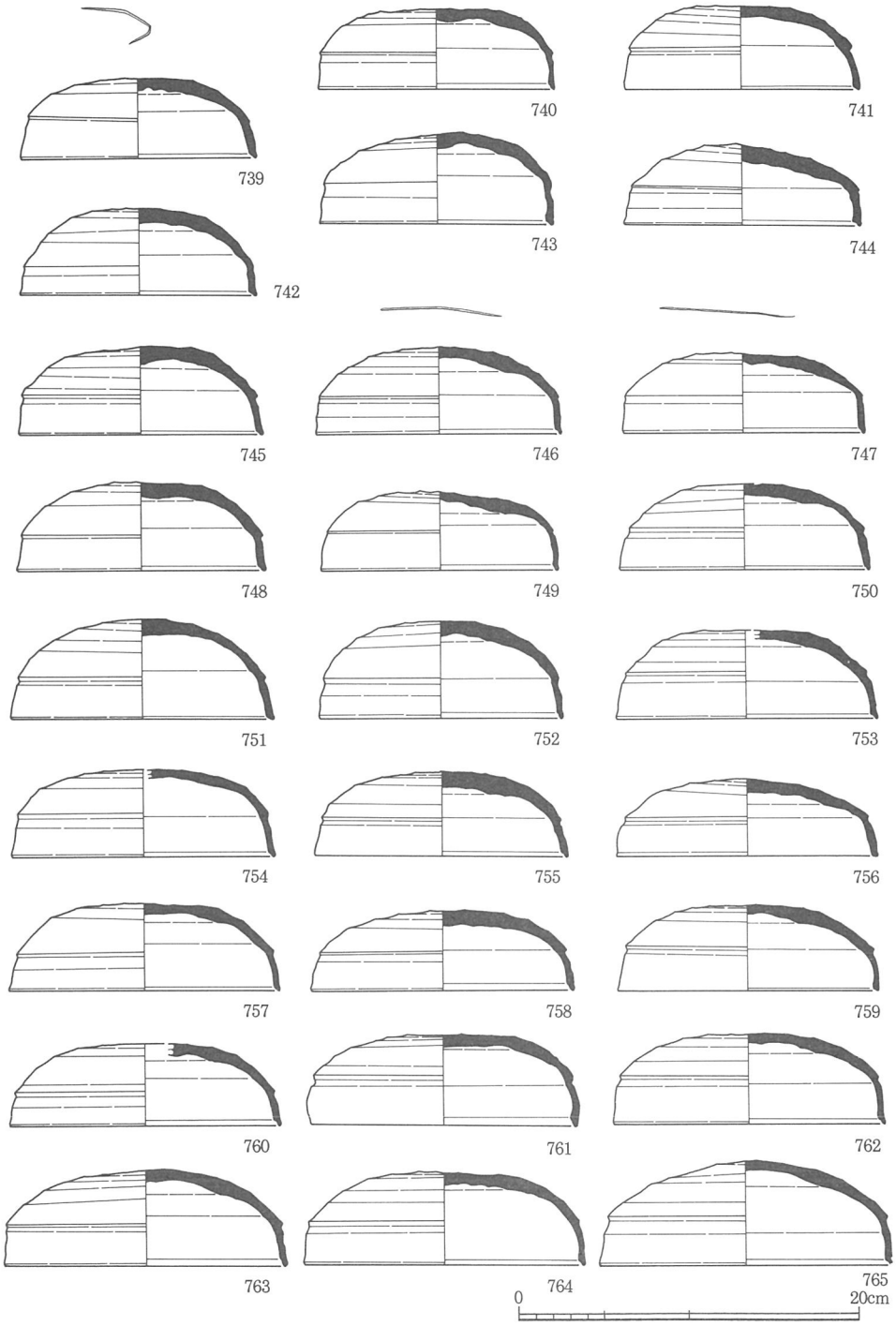
815～817は，口径から推測して小型の短頸壺に伴う蓋と考えられる。いずれも口縁部と天井部の境には明瞭な稜が認められない。

818～830は高杯の蓋である。

多くは杯蓋につまみを付ける形態（818～828）である。口径は杯蓋の②・③・④に含まれるものがあるが，特に13.5～15㎝までのものが多いようである。また，数は少ないが，天井部を刺突紋（831・832）やカキ目（829・830）で飾るものもある。



第114図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物１



第115図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物２

杯身（766～814）

受部径から，５つに大別した。

①（766～775）－受部径11.6～12.7㎝のものである。口径に対する器高は当土器群の中で比較的高い一群であり，体部全体に丸みをもつ。口縁端部は内傾し，面や段をもつものが多い。

②（776・778～781）－受部径12.8～13.4㎝のものである。口径と器高の比率は①と類似し底部に丸みをもつものと，器高がやや低くなり偏平な感をうけるものがある。口縁部端部も内傾し段や面をなすものと丸くおさめるものがある。

③（777・782～802・804）－受部径13.5～14.9㎝のものである。底部に丸みをもつものと器高が低く底部全体が偏平な感を受けるものがある。口縁端部は面や段をなすものは少なく，ほとんどは丸く仕上げている。

④（803・805～813）－受部径15～16㎝のものである。底部に丸みをもつものもあるが，多くは③よりもさらに底部の偏平化が進んだものである。口縁端部は③同様丸くおさめるものがほとんどである。

⑤（814）－受部径が16㎝を越えるものである。出土数は少ない。

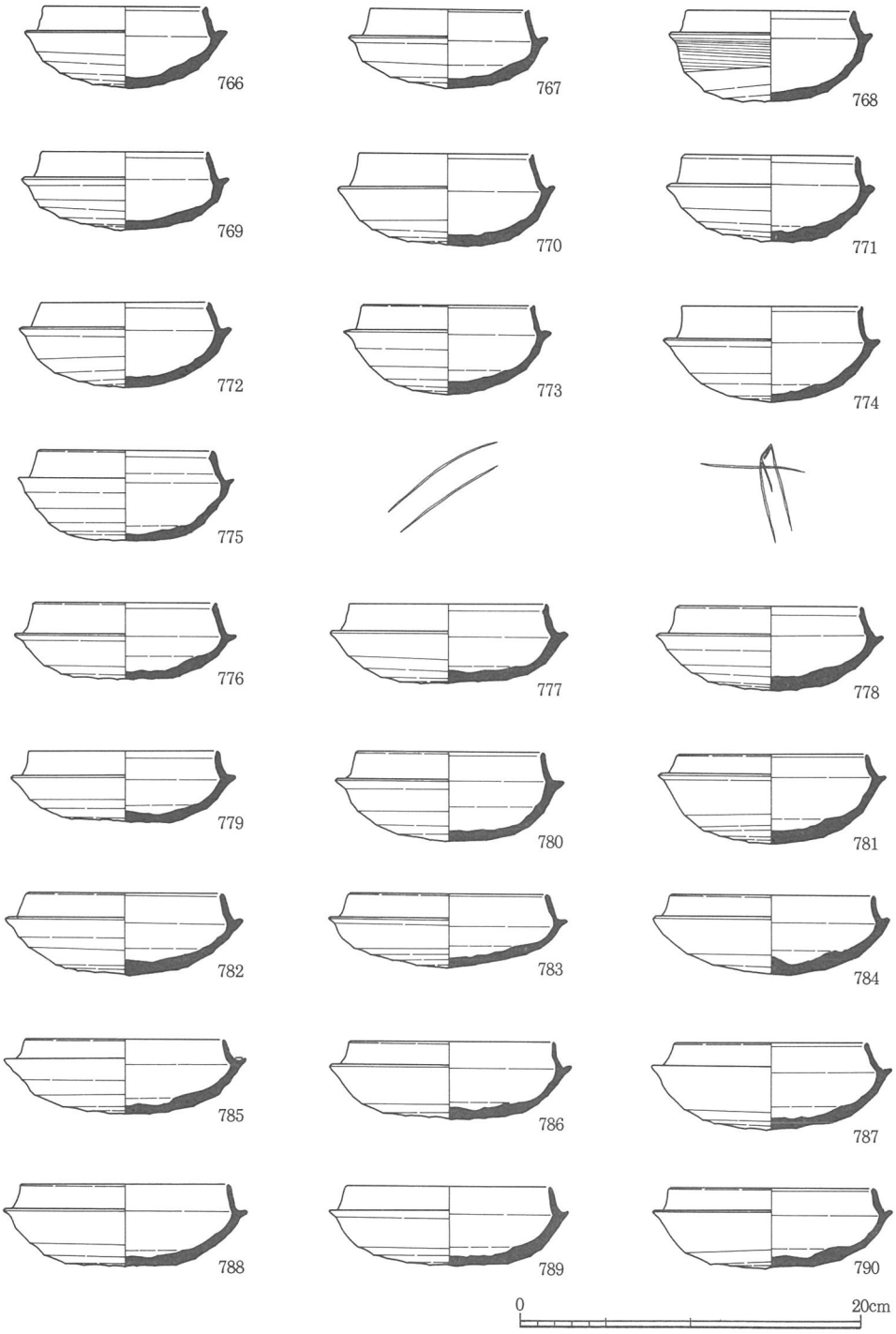
杯身の各類は，蓋の①～⑤にほぼ対応するものであり，出土数は蓋同様③が最も多い。口径と器高の関係は，口径の拡大とともに底部の偏平化の傾向が認められた。また，口縁端部形態は①・②では内傾し面や段をもつものが主流であったが，口径が拡大した③・④では丸くおさめるものが多くみられた。口径と器形・端部調整には有機的な関係が認められよう。

高杯（833～868）

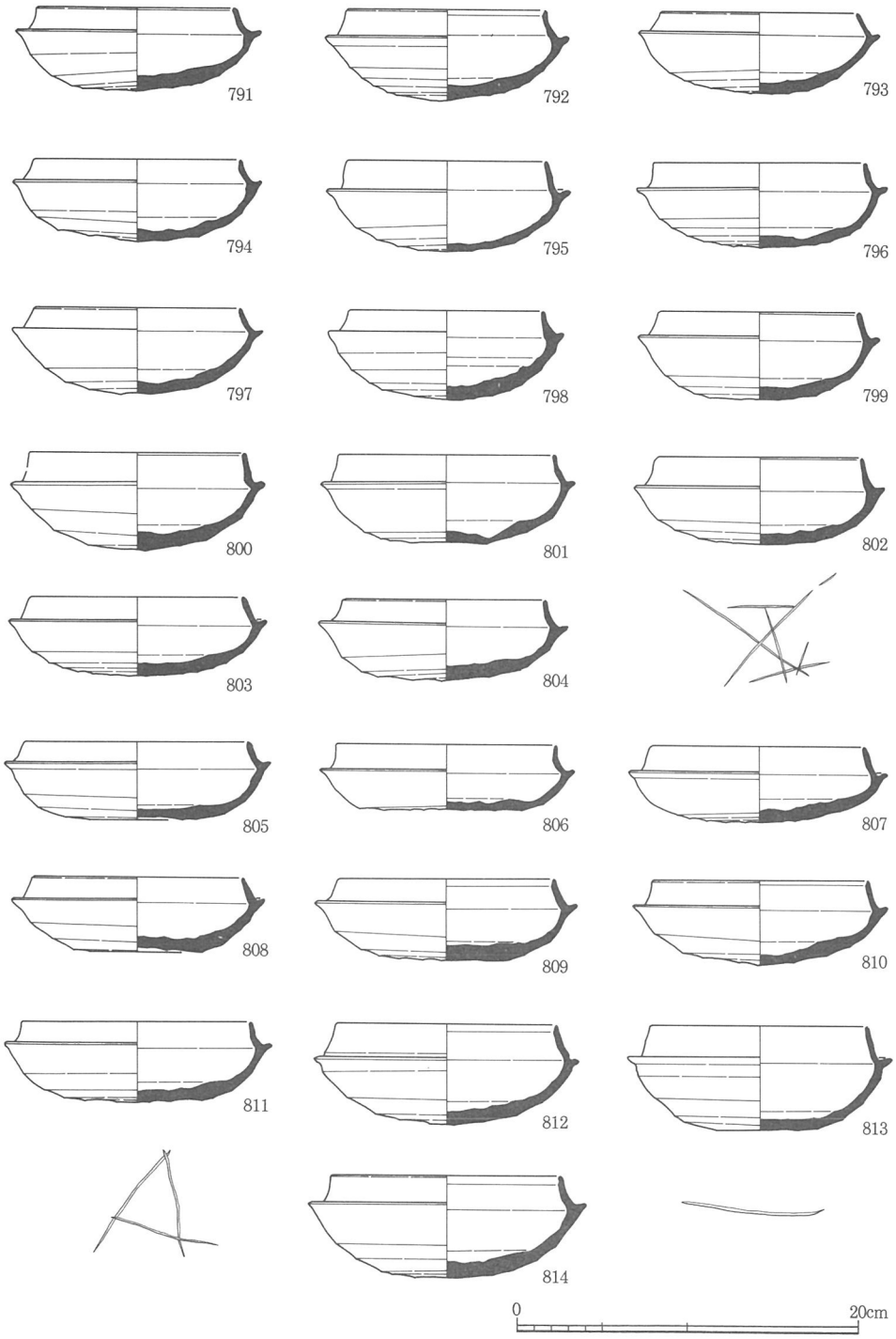
有蓋高杯と無蓋高杯がある。

有蓋高杯は，短脚のなかでも高台状の低い脚部形態のものがほとんどで，長脚形態のものは少ない。

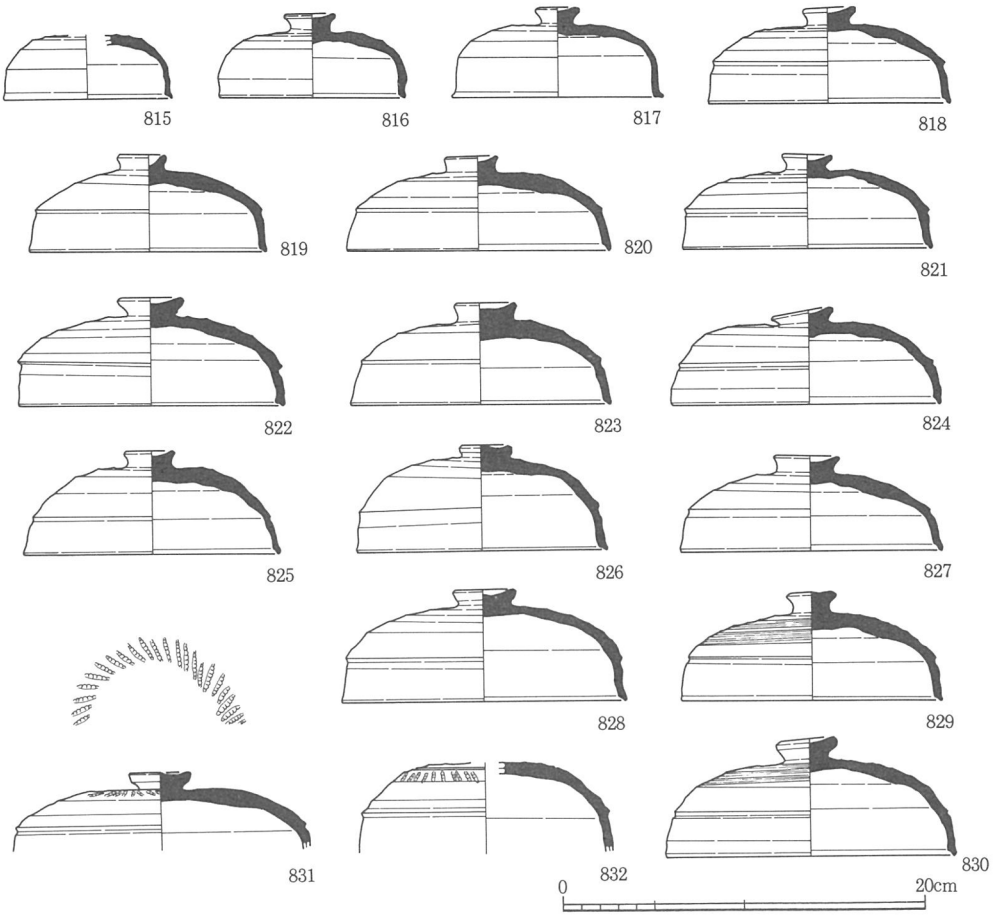
前者は杯部の法量によって細別される。口縁端部の形態は，杯身同様，口径の小さいものは内傾し面をなすものが多いが，口径の拡大したもののほとんどは丸くおさめている。834は受部の稜に鋭さの欠けるものであるが，同様の受部形態のものは杯身の中にはみられない高杯特有のものである。脚部形態は，直線的に「ハ」の字状に開くものが多く，外湾して開くものは少ない。装飾されるものも少なく，円形透かしを穿つもの（842）やカキ目を施すもの（838）がわずかながら存在する。



第116図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物３



第117図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物４



第118図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物５

有蓋長脚高杯は出土数が少なく図示できた完形品は１点のみであった。845は口径15㎝，器高21㎝の大型品である。杯部の特徴は杯身⑤と類似する。脚部は長脚で２段の透かしを配し，全体を波状紋で飾る。透かしは上段が長方形，下段は三角形で，３方に千鳥状に配置する。

また，前述の393－ＯＬ（第Ⅵ層出土遺物）で出土した短脚で長方形透かしを採用する形態のものは極端に少なかった。脚部は欠損するが，杯部を波状紋や刺突紋で飾る844がその可能性の高いものである。

無蓋高杯も数多く出土している。

なかでも，蓋を逆転させたような鉢状の杯部に，短脚で長方形透かしを採用した脚部が伴うものの出土数が最も多く，杯蓋同様，口径や杯・脚部の形態によって細別された。

①（846～852）－口径11.5㎝前後の小型品で，口径に対して器高が高く，脚部は細長い感を受けるものである。杯部は蓋を逆転させたような形状と口縁部が外反し鉢状を呈するものがある。なお，852は口径13㎝とやや大型であるが，杯部や脚部の形態の特徴から①に含めた。

②（853・854）－口径は13㎝前後で，杯部の底部付近には丸みをもつ。脚部は杯部の大型化に伴い基部径が拡大する。

③（855～858）－口径14～14.5㎝前後で，杯部の底部はやや偏平となる。脚部は②に比べ裾の開きが大きく安定感の増したもの（858），杯部に対して脚の短いもの（856・857），細長い感を受ける（855）ものがある。このような脚部の形態差からはさらに細分することも可能である。また，脚部が欠損する860も③に含まれると考えられる。

④（859）－口径16㎝を越える大型品である。出土数は少ない。

⑤（861・862）－杯部を波状紋などの紋様で飾るものである。図示したものはいずれも脚部の透かしを4方向に配する特徴を有する。

以上5つに細別したが，全体器形で概観すると，大きくは細長い脚部の小品型（①）・全体に安定感のある中型品（②・③），大型品（④），に大別される。また，杯部だけを概観すると，口縁部が外反し鉢状を呈するものと蓋に似た形状を呈するものの2者が混在しているようである。

他の形態の無蓋高杯の出土数は少ない。

866・867は杯部が椀状を呈し，脚部は裾が大きく開くものである。杯部のみの残存であるが863・865も同形態と推定される。864は脚の短いもので，脚裾は屈曲して開く。868は大型高杯と推定され，脚裾上部には凸帯が巡る。

異形須恵器（869・870）

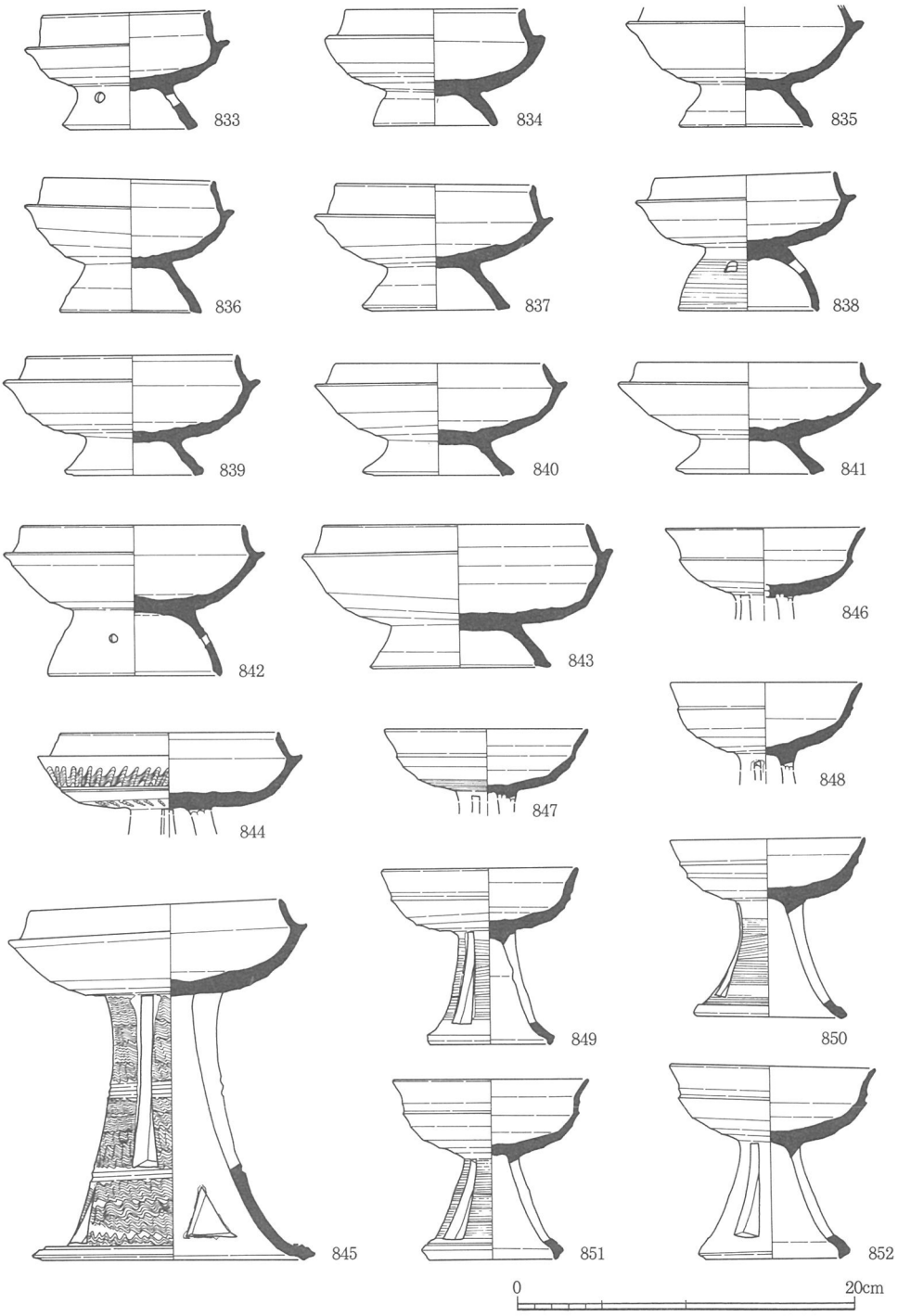
全体形状は，無頸の小型壺状を呈し，体部上半と底部の計3箇所に円孔が穿たれる。容器とは考え難いが，類例もなく用途は不明である。

瓿（873～876）

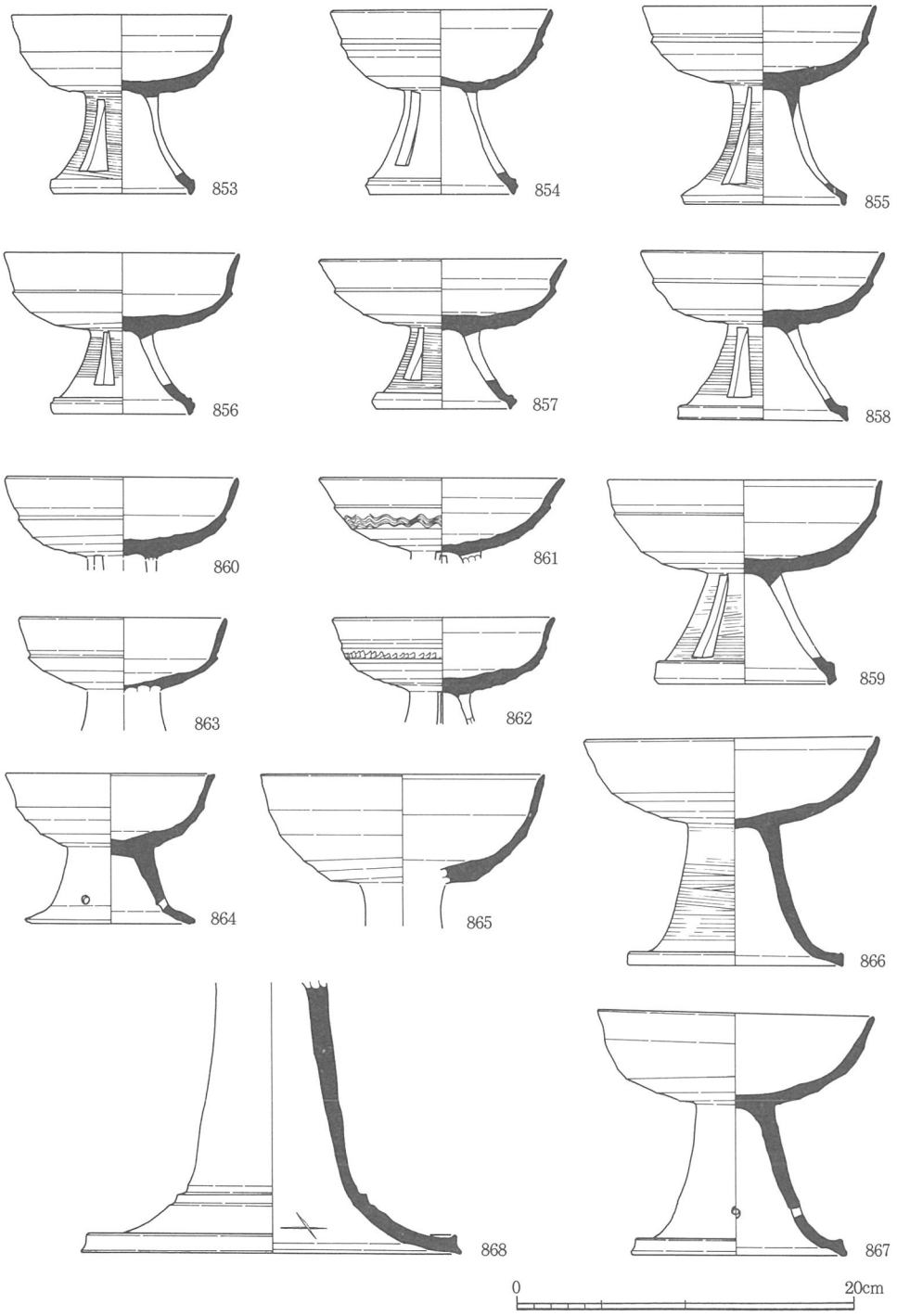
口頸部が大きく発達した形態である。底体部は球形に近いもの（871・873・876）と底部がやや尖り気味のもの（872・875）が混在している。874は小型で他より後出する可能性が高い。

小型壺（877～879）

口頸部まで完存したものは無いが，瓿に比べると大型である。底体部の形状は，最大径



第119図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物６



第120図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物７

が体部中央付近にあり全体に丸みをもつもの（878）と最大径が上半にあり底部が尖り気味のもの（877・879）がある。877にはヘラ記号が刻まれる。

短頸壺（880～889）

短頸壺には多形態のものが混在している。

①（880・881）－偏平な底体部をもつ小型品である。880は小型品にしては器壁が厚く重厚な製品である。

②（882～887）－口径は８～９㎝前後で，短頸壺の中では一般的な器形のものである。底体部の法量により細分されるが，底体部の形態は小型のものほど底体部が偏平で低くなる傾向が看取される。887は大型品のためかタタキ目が残存する。

③（888・889）－①②とは形態が大きく異なる。口頸部は直立から外反気味にのび，端部は拡張させたような面をなす。底体部も肩部の張りが小さい。

大型蓋（890）

口径16㎝を測る。全体の形状は半球状を呈すると推定される。

椀・鉢（891～894）

椀や鉢の出土数は少ない。891・892は把手付椀である。いずれも平底であるが，892には若干の丸みがある。

893は平底の鉢である。体部は内湾してのび，口縁部をわずかに直立させる。全体は回転ナデで調整するが，底部付近は静止ヘラケズリで仕上げている。894も平底の鉢の可能性が高いものである。

脚台付鉢（895）

出土数は少ない。895は口径21.2㎝，器高14.8㎝を測り，完形品に復元された。鉢体部は底部から屈曲してのび，口縁端部を外側に若干肥厚させる。脚台は低く，逆三角形の透かしを５方に配する。仕上げにはカキ目調整を施すが，体部や底部にはタタキ目が一部残存する。

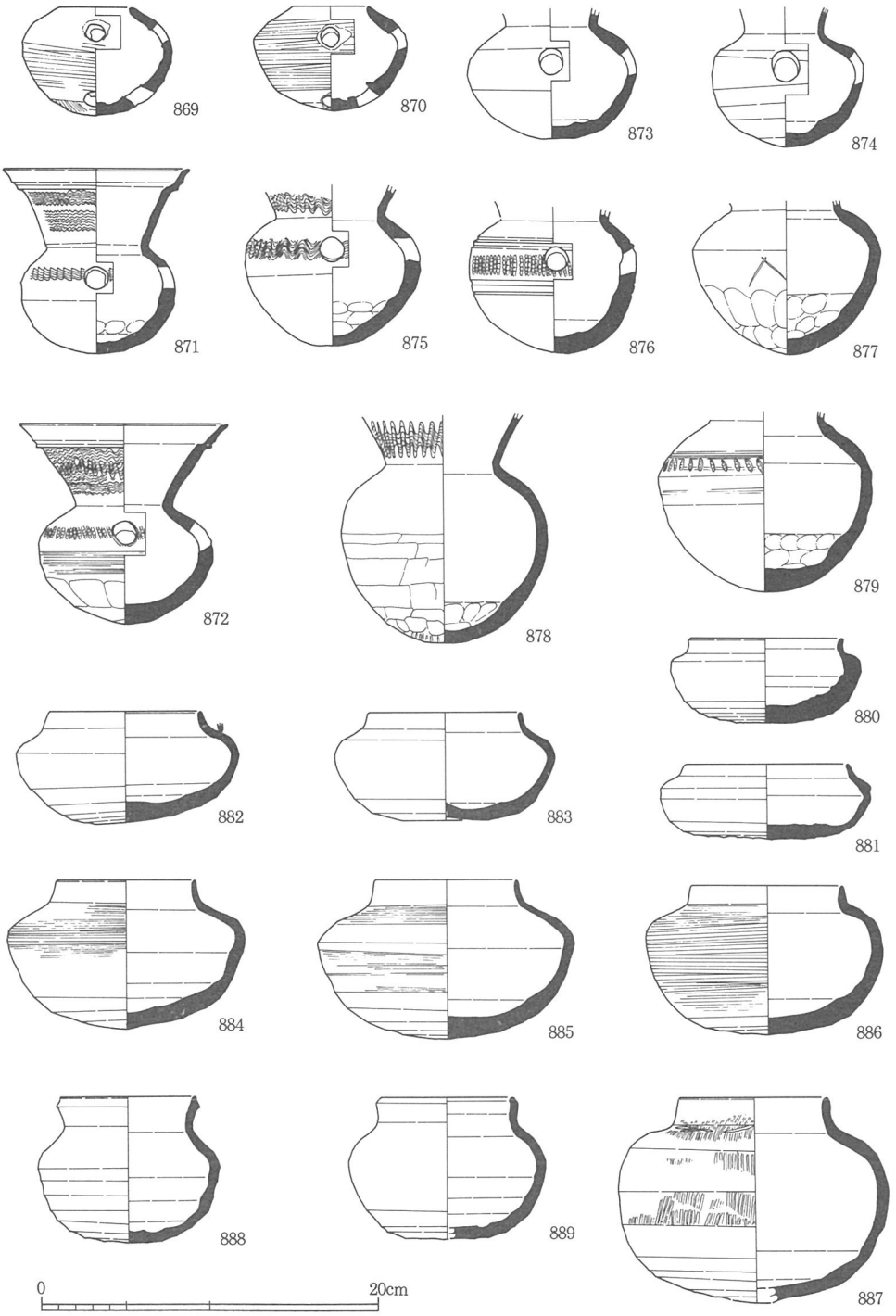
提瓶（896）

提瓶の出土数も少ない。896も破片資料で，肩部に環状の耳が付く。

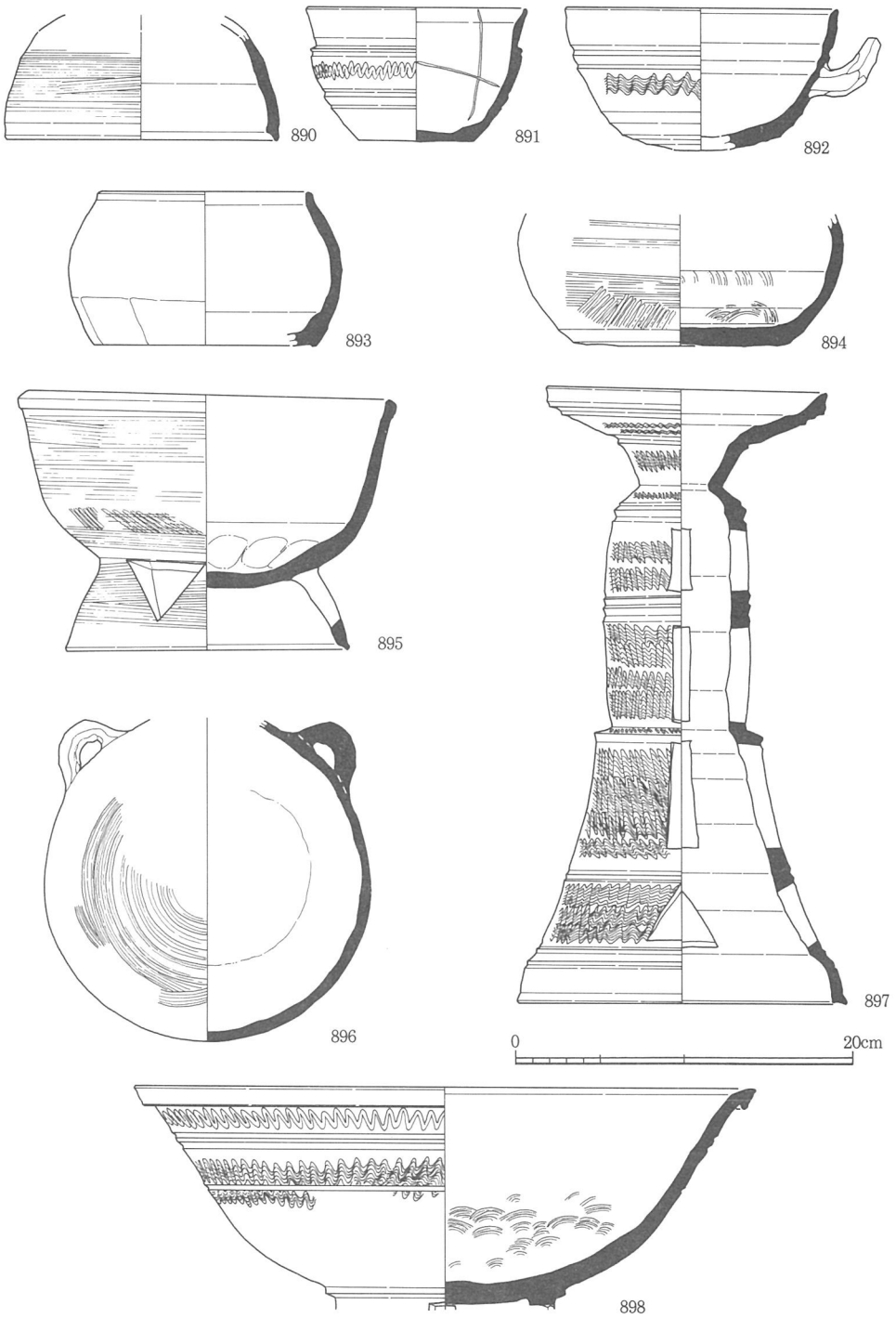
器台（897～899）

筒形器台（897）と高杯形器台（898・899）がある。

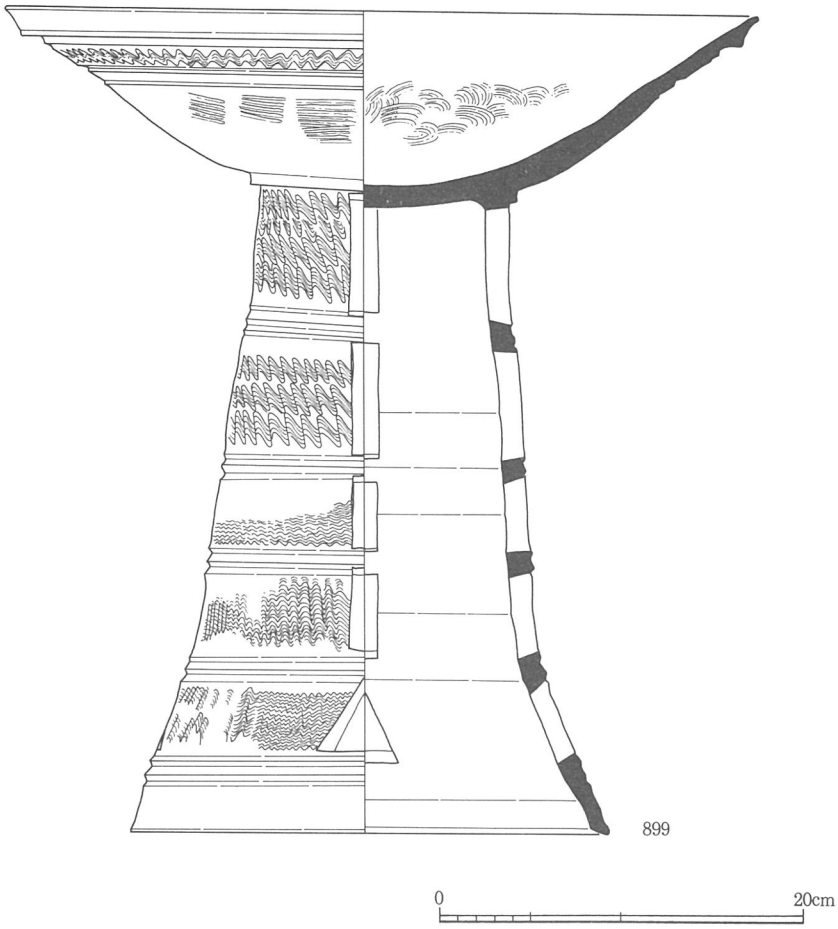
筒形器台897は器高36㎝の小型品であるが，丁寧なつくりの優品である。台部は頸部から屈曲して大きく開き，筒部は短く若干の膨らみをもつ。脚部は筒部から平坦な段をつく



第121図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物８



第122図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物９



第123図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物10

り出してから下方に開き，脚裾は直立気味となる。紋様は台部，筒部，脚部に波状紋，筒部の段の部分には刺突紋が巡る。透かしは筒部には長方形，脚部には長方形と三角形のものを４方に配し直列させる。

高杯形器台は２点図示した。899は完形品に復元された。杯部は浅く，脚部が長脚化した形態である。透かしは，各段４方向に穿ち，５段に直列させる。透かしの形状は上４段は長方形，最下段は三角形で，筒形器台と共通する。

898は899に比べ，やや深い杯部をもつものである。口縁部も若干異なり，898では口縁端部を凸帯状に下垂させている。脚部は不明であるが，上端には長方形透かしを４方に配し，899と類似すると推定される。

横瓶（900）

出土数は少ない。900はほぼ完形品に復元された。底体部の側面には，粘土板による閉塞の痕跡が観察される。また，カキ目は縦方向であり，側面を正立させ，ロクロ回転により施されたことも看取される。

壺（901～913）

法量により３つに大別される。

901～906は口径16㎝以下の小容量のものである。口頸部の全体形状により，①体部から屈曲してのびるもの（901～904）と，②緩やかに短く外反させるもの（905・906）に大別される。出土数は前者の形態が多く，後者は少ない。また，①の形態は，口径に対し頸部の長いもの（903・904）と短いもの（901・902）に細分され，口縁端部は外側を凸帯状に肥厚させたものと面状に肥厚させたものがみられる。

907～912は口径20㎝前後を測り，前者より容量の大型化したものである。口頸部の形態は①がほとんどであり，その中でも，口径に対し頸部が短く，口縁端部を面状に肥厚させたもの（909～912）の出土が顕著となる。908は口径16.6㎝と小さいが，底体部の容量からここに含めた。

913は底体部の最大径が36㎝を測り，壺の中では最も容量の大きいものである。口頸部は口径に対し極端に短い特徴を有する。出土数も少ない。

大型甕（914・915）

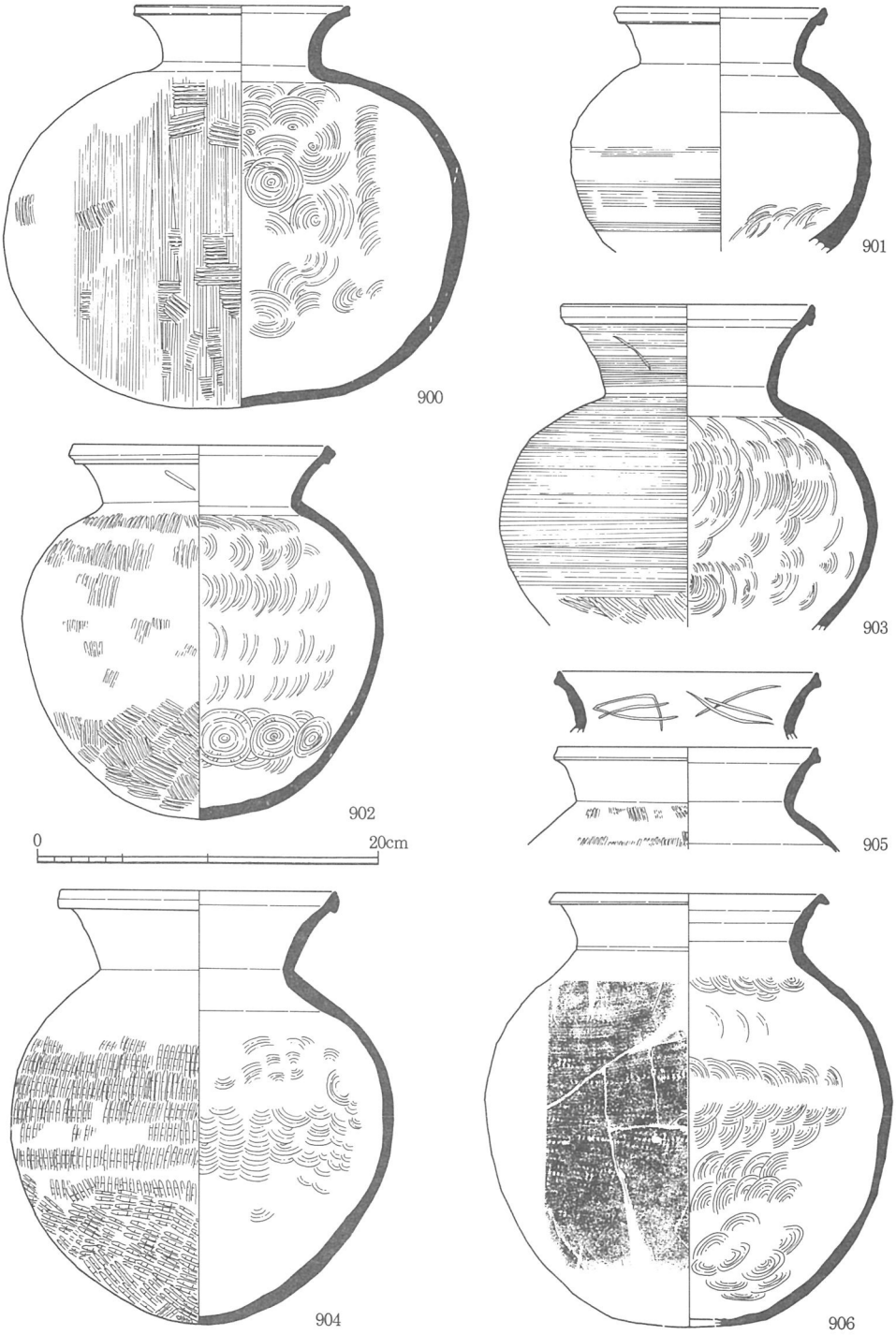
壺に比べると出土数は少ない。いずれも口頸部がラッパ状に開く形態であるが，細部には若干の差異が認められる。914は口縁端部を凸帯状に肥厚させ，頸部の紋様帯も凸帯により区画する一般的な形態のものである。一方，915は口縁端部の外側を面状に肥厚させ，紋様帯も沈線によって区画されるなど，やや異なった特徴が看取される。

甑（916～921）

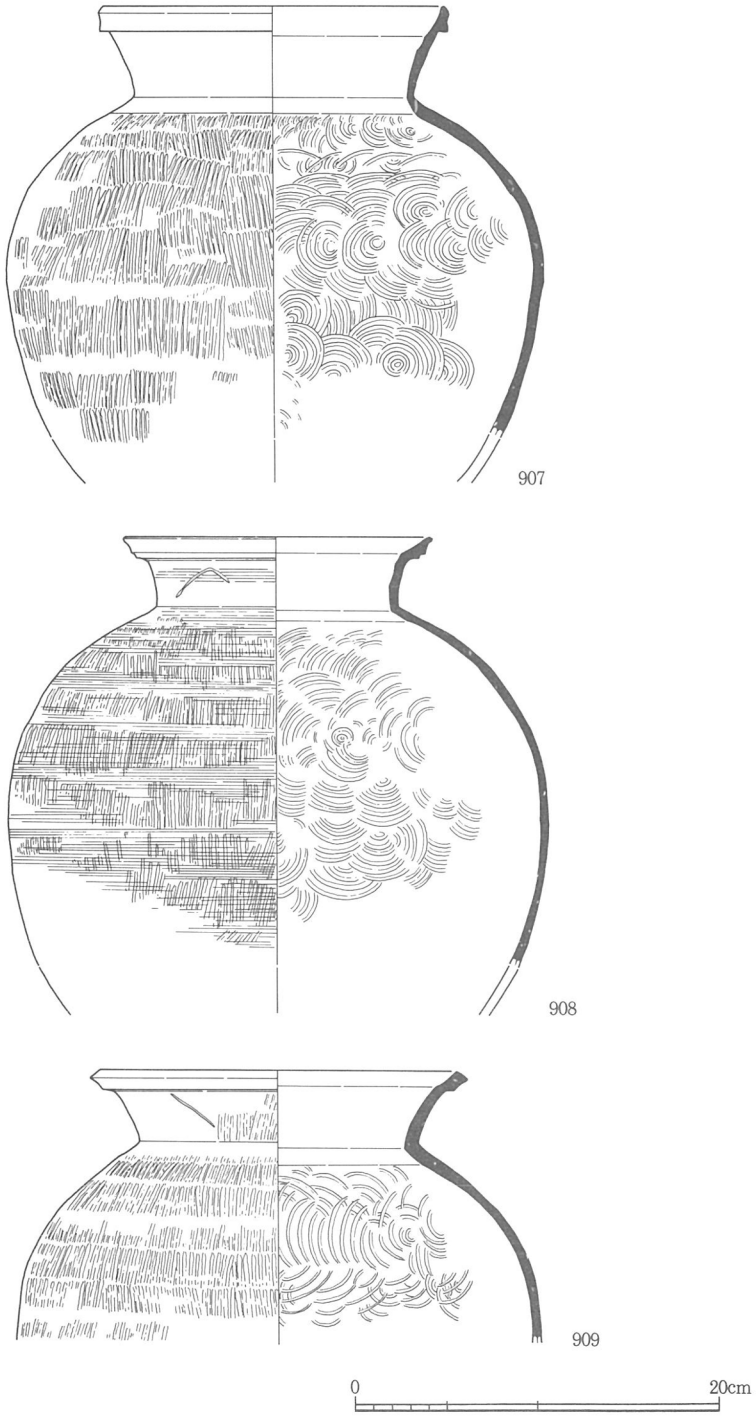
完形品に復元される良好な資料が出土している。

口径30～32㎝，器高30㎝前後のもの（916・917・919・921）が一般的な大きさである。全体の器形は，体部に若干の膨らみをもち口縁部を短く外反させるもの（916・917・921）と底部から直線的に開く体部をもち口縁部を壺の口縁状に肥厚させるもの（919）がみられる。調整はカキ目や回転ナデを施すもの，タタキ目を残存させるものと様々であるが，底部付近にはいずれも広い範囲にヘラケズリが施されている。

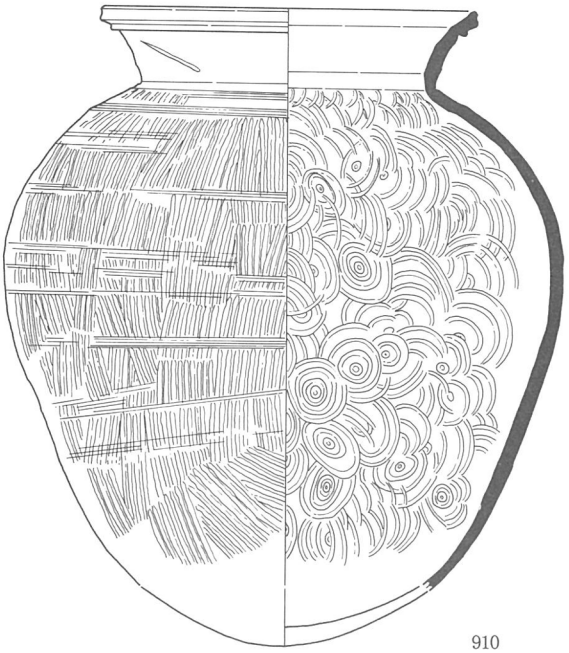
918は口径26.4㎝，器高27.8㎝とやや容量の小さいもので，口縁部は体部からそのまま



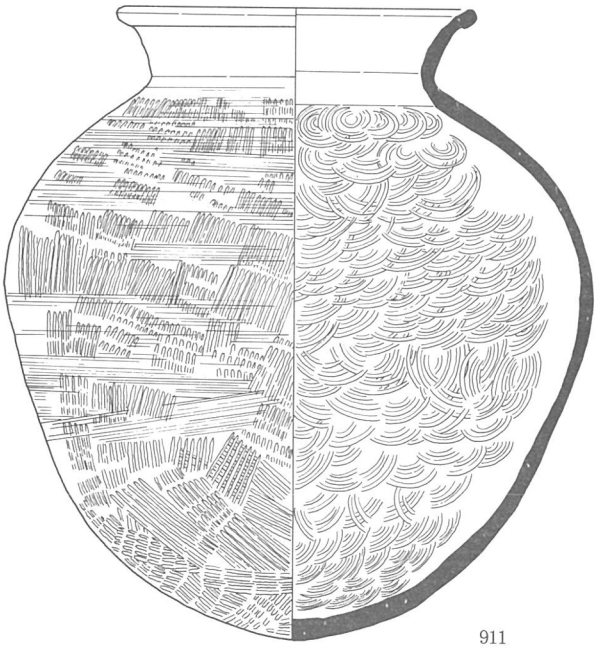
第124図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物11



第125図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物12



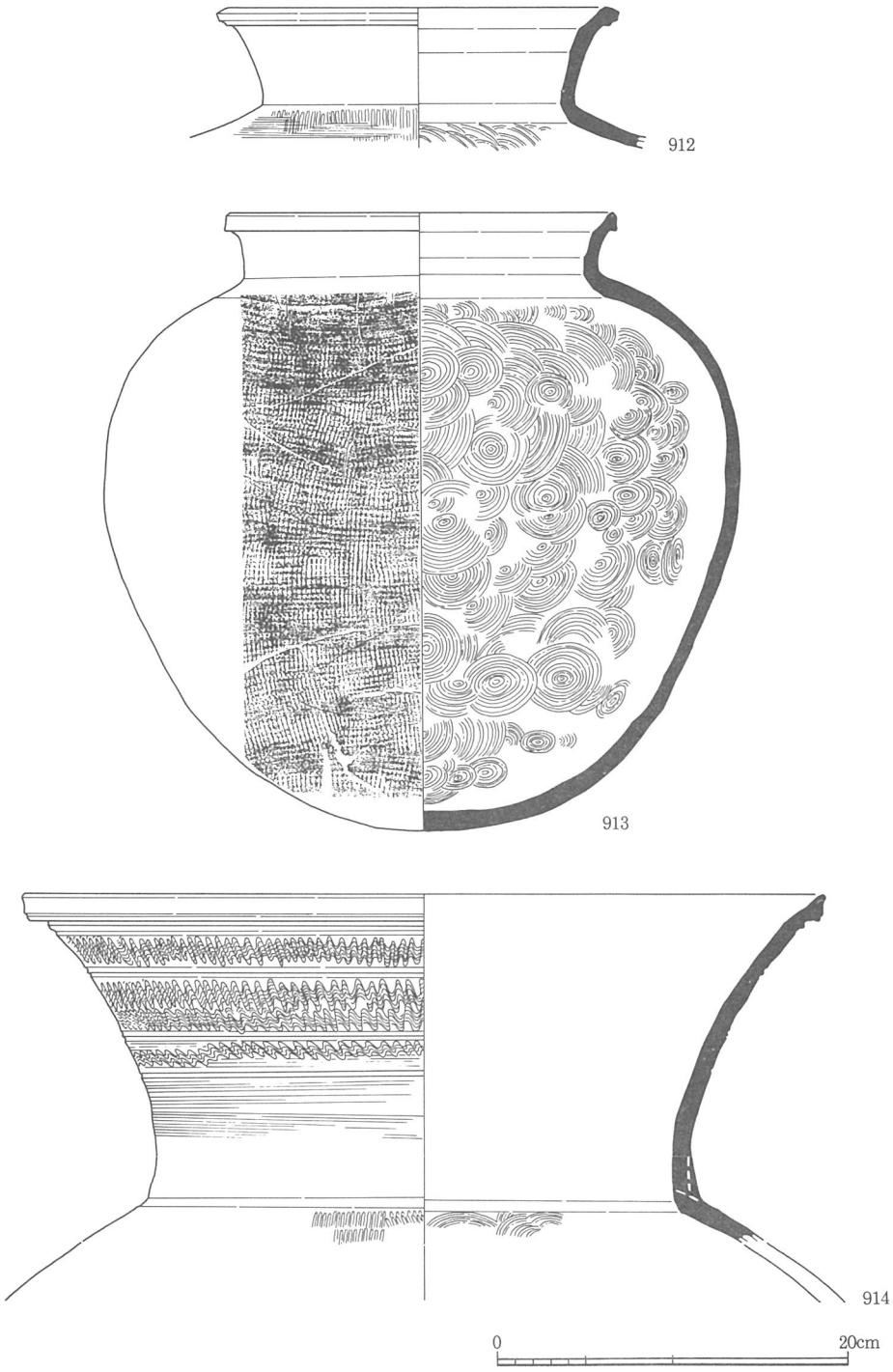
910



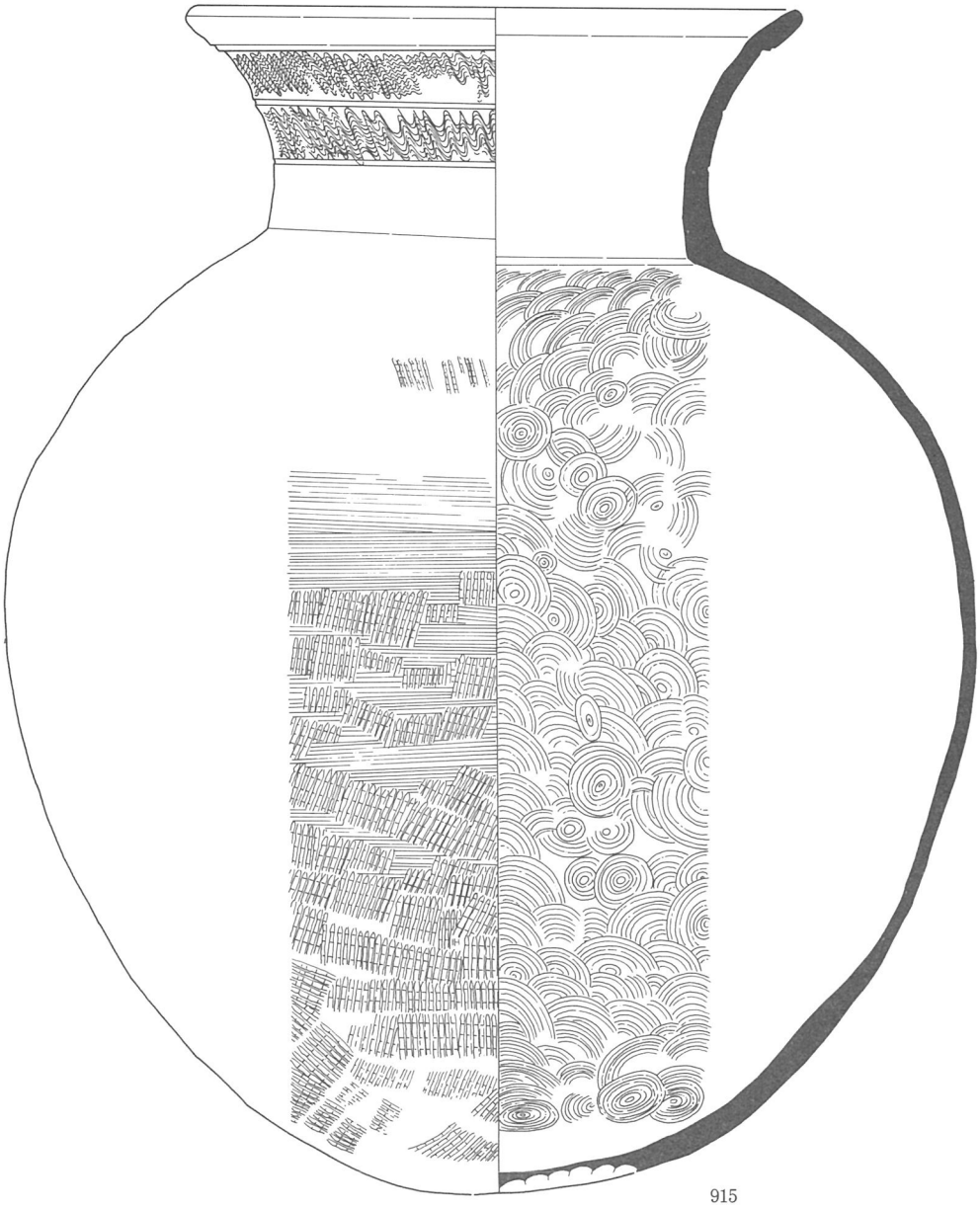
911

0　　20cm

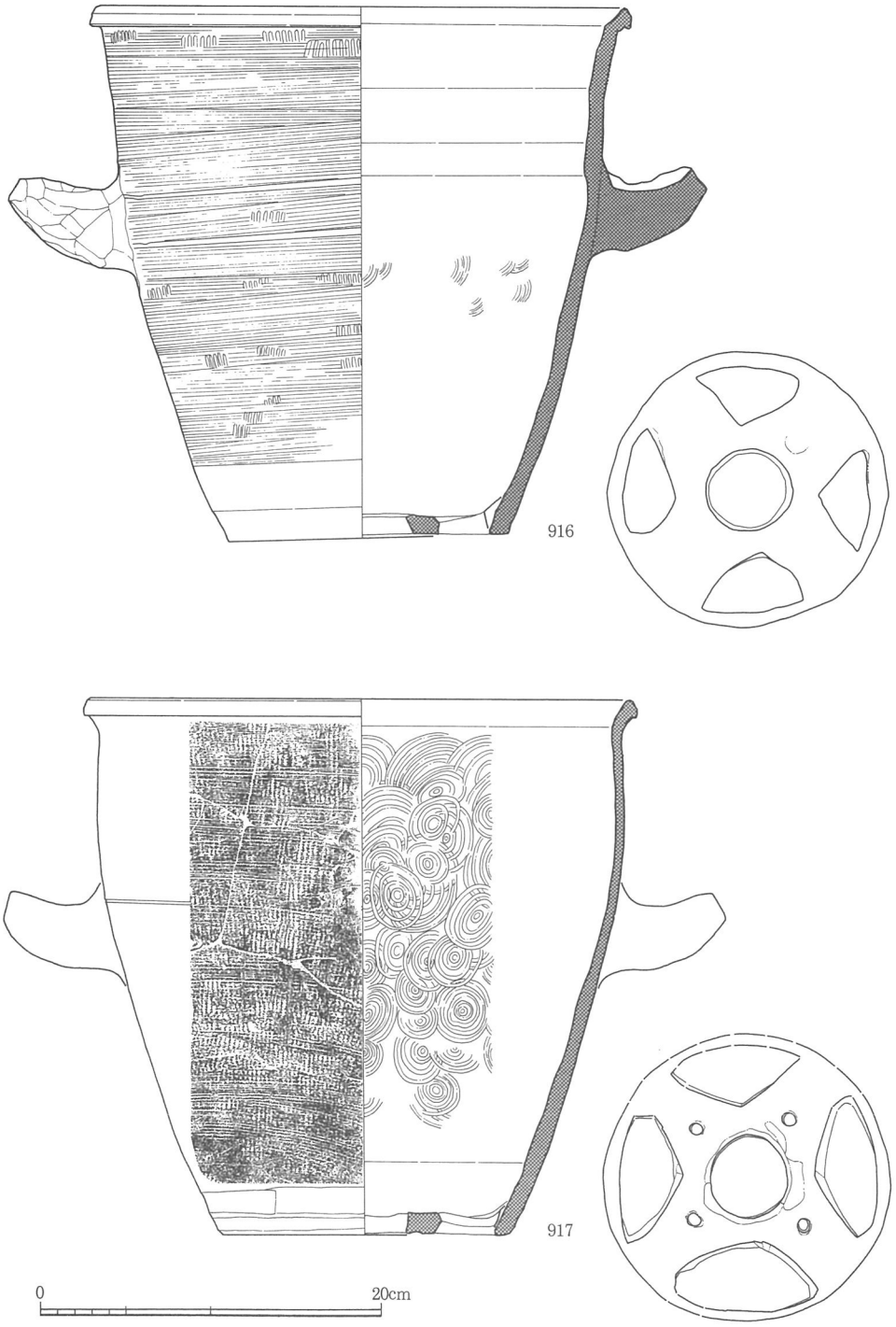
第126図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物13



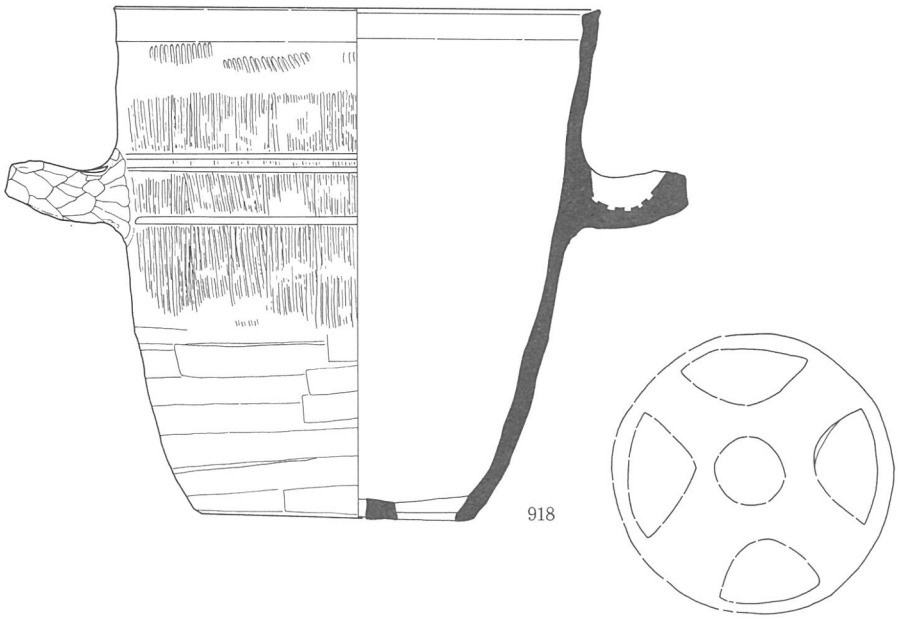
第127図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物14

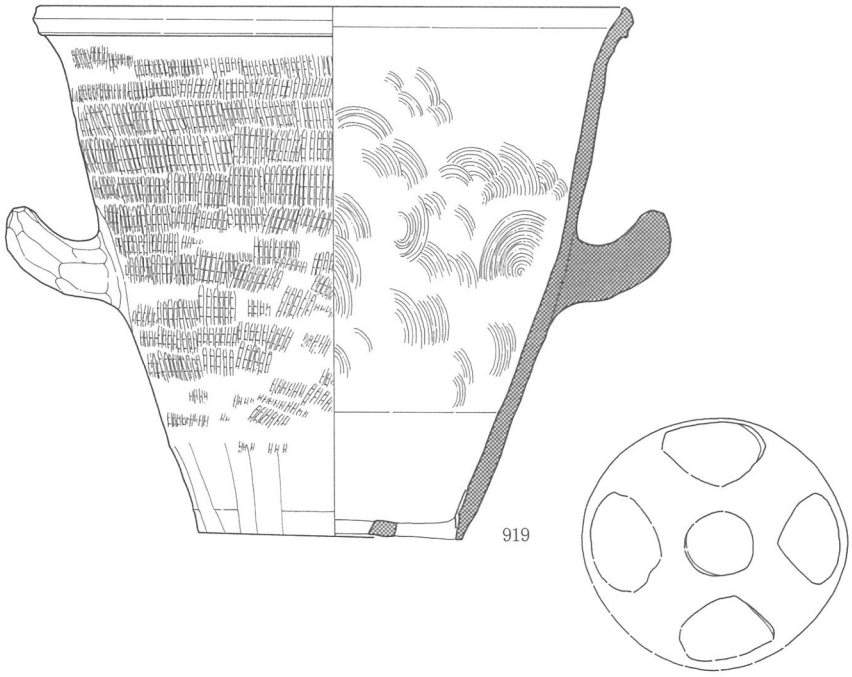


第128図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物15



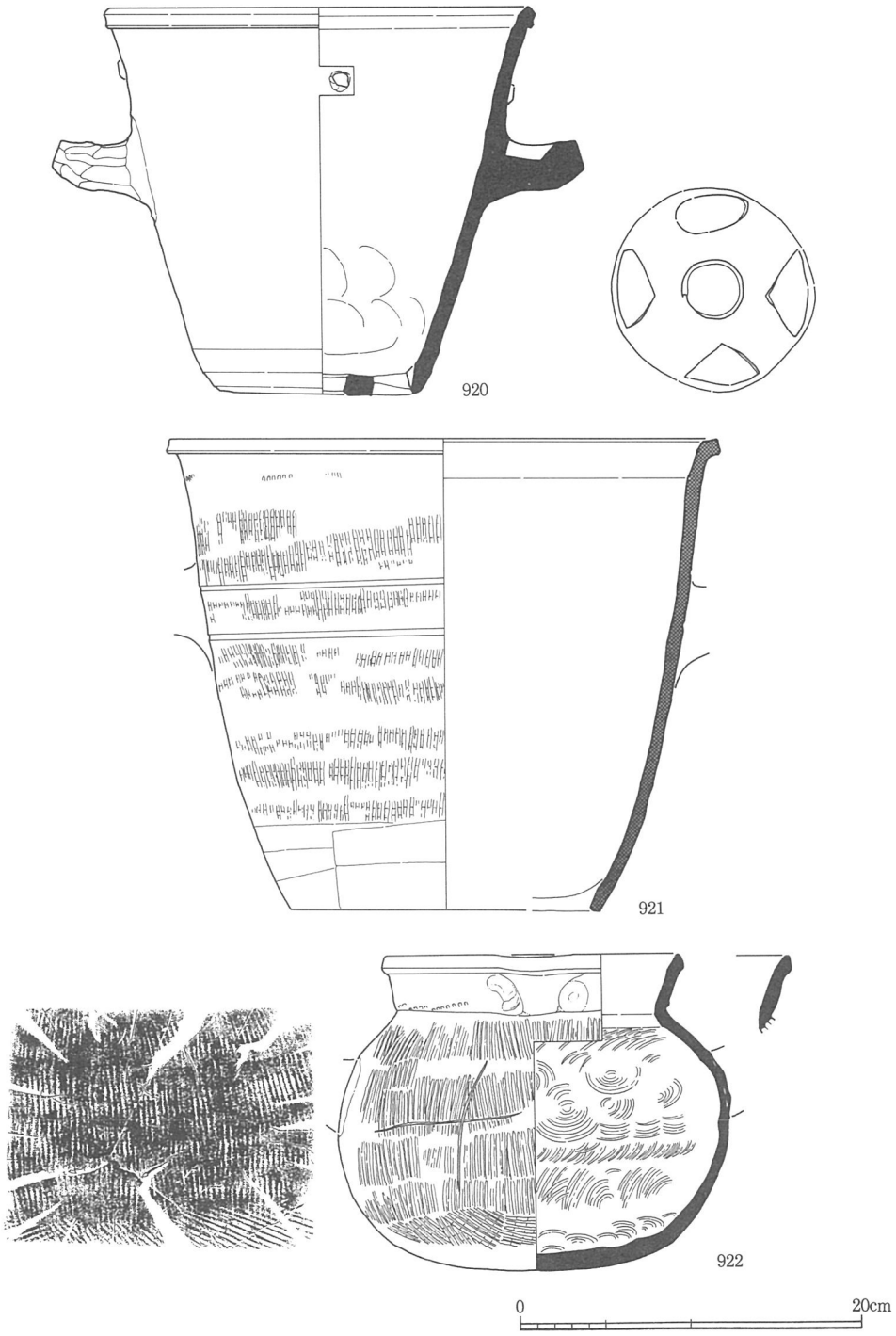
第129図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物16





0　　20cm

第130図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物17



第131図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物18

のびる。920は口径24.2㎝，器高22.2㎝の小型品で，器形は919と類似する。

蒸気孔は容量の大小にかかわらず，中央の円孔の外周に隅丸三角形の孔を配する。また，甑の焼成には，還元状態まで達するが，通有の須恵器に比べるとやや軟質に仕上がるものが多くみられた。意図的にやや軟質に焼成されたことがうかがえる。

堝（922・923）

甑に比べると出土数は少ない。922は口径17㎝，器高18.2㎝の小型品で，底体部はやや偏平である。923は口径26㎝，器高28.2㎝を測る大型品で，底体部の膨らみは大きく球形に近い。注ぎ口は，いずれも口縁部をわずかに垂下させてつくりだしている。

土師器（第132図，図版86）

長胴甕（924・925）

口縁端部を丸くおさめるもの（924）と面をなすもの（925）がある。胴体部は胴部の膨らみに若干の差異があるが，調整は同一である。

甕（926・927）

いずれも口縁部の破片である。全体の器形はC群出土の1027～1030と類似するものと推定される。

壺（928）

ここでは壺として扱ったが，底部が平底の特異な器形である。体部外面にはハケ，内面にはケズリが施される。

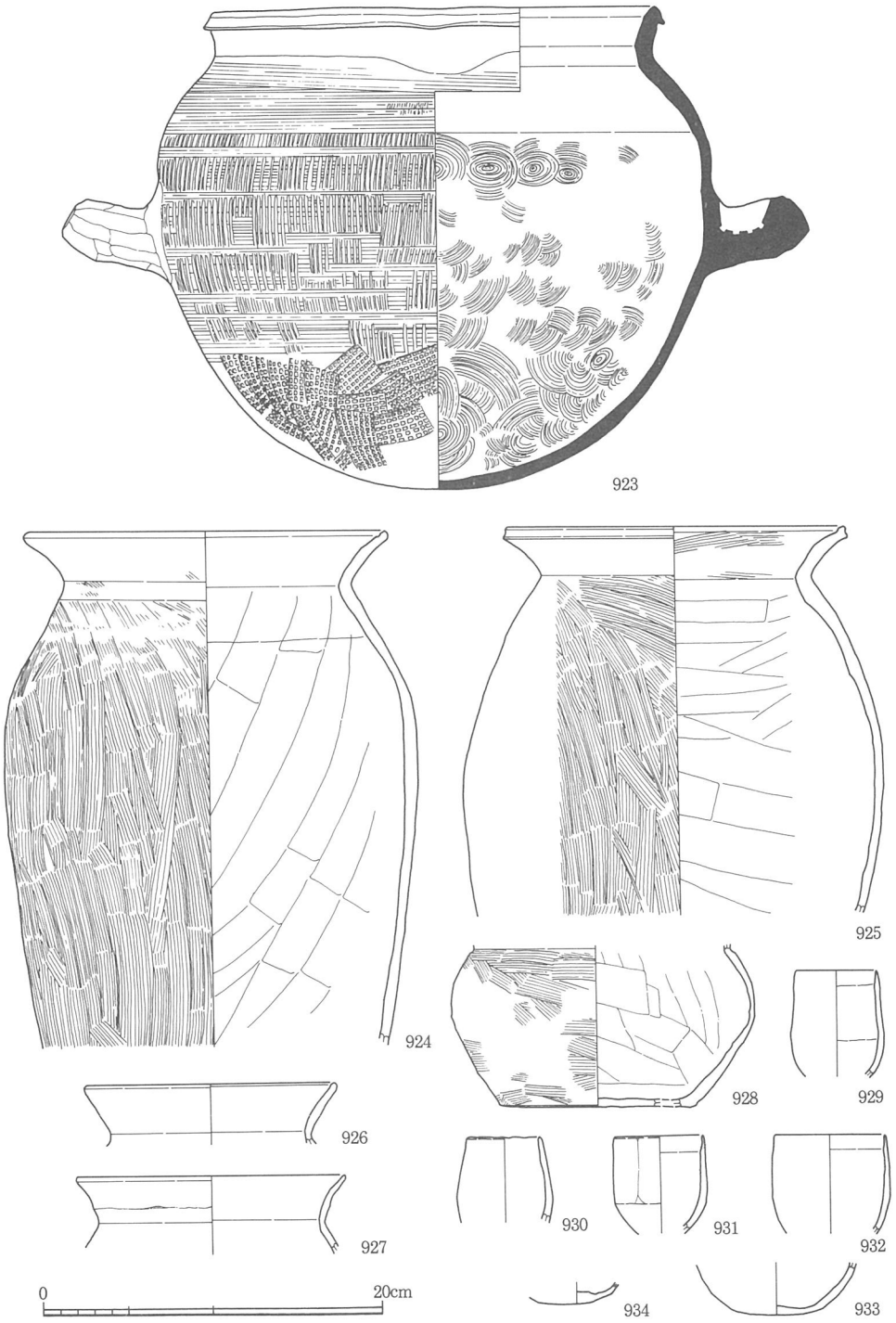
製塩土器（929～934）

いずれも，丸底の底部から体部が直立してのびる形態である。表面が赤変したものもみられる。

b，河川岸部B群（第133～136図，図版21・87・88）

A群の北側に広がる。遺物は河川岸に散在した状況で出土し，A群のように密集する傾向はみられなかった。そのため，A群とは比べものにならないほど遺物数は少ない。

一方，出土遺物の様相をみると，A群同様そのほとんどは須恵器で占められるが，A群の出土品と細部形態の異なるものや後出する時期のものが含まれる傾向が看取された。B群は遺物様相に出土状況も考え合わせると，A群よりも若干の時期幅が存在する群として認識される。



第132図　河川（56－ＯＲ）岸部Ａ群出土遺物19

須恵器（第133～136図，図版87・88）

蓋（935～946・965～969）

935～946は杯蓋である。法量的には，Ａ群の③（口径13.4～14.5㎝）に含まれるものがほとんどで，形態の特徴も類似する。ただ，944は口縁部と天井部の境に巡る稜が不明瞭である，口縁端部を丸くおさめるなどの特徴が看取され，他より後出する時期のものと推定される。

965～969は高杯の蓋である。口径12㎝前後のもの（965～968）と14㎝を越えるやや大型のもの（969）があるが，前者はＡ群ではほとんど出土していない法量のものである。また，口縁部と天井部の稜がやや不明瞭となったもの（965・967・968）も多くみられ，形態的にもＡ群とは若干の差異が認められる。

杯身（947～964）

法量的には，Ａ群の③（受部径13.5～14.9㎝）や④（受部径15～16㎝）に含まれるものが多く，小型品の①（受部径11.6～12.7㎝）や②（受部径12.8～13.4㎝）はほとんどみられない。

高杯（970～979）

有蓋高杯（970～975）と無蓋高杯（976～979）がある。

有蓋高杯は，高台状の短い脚部を伴うものがほとんどであるが，杯部の口径が10㎝前後で脚高が極端に低いもの（970～973）と杯部が大型化し脚部のやや長いもの（974・975）に細分される。このうち前者には，受部が体部から肥厚したような形状を呈し，稜の鋭さに欠ける特徴が看取される。Ａ群でも数点出土しているが，Ｂ群で特にその出土が顕著なものである。なお，これらとセットとなる蓋は受部径から判断して天井部と口縁部の境界の稜が不明瞭な形態の965・967・968が伴うと推定される。

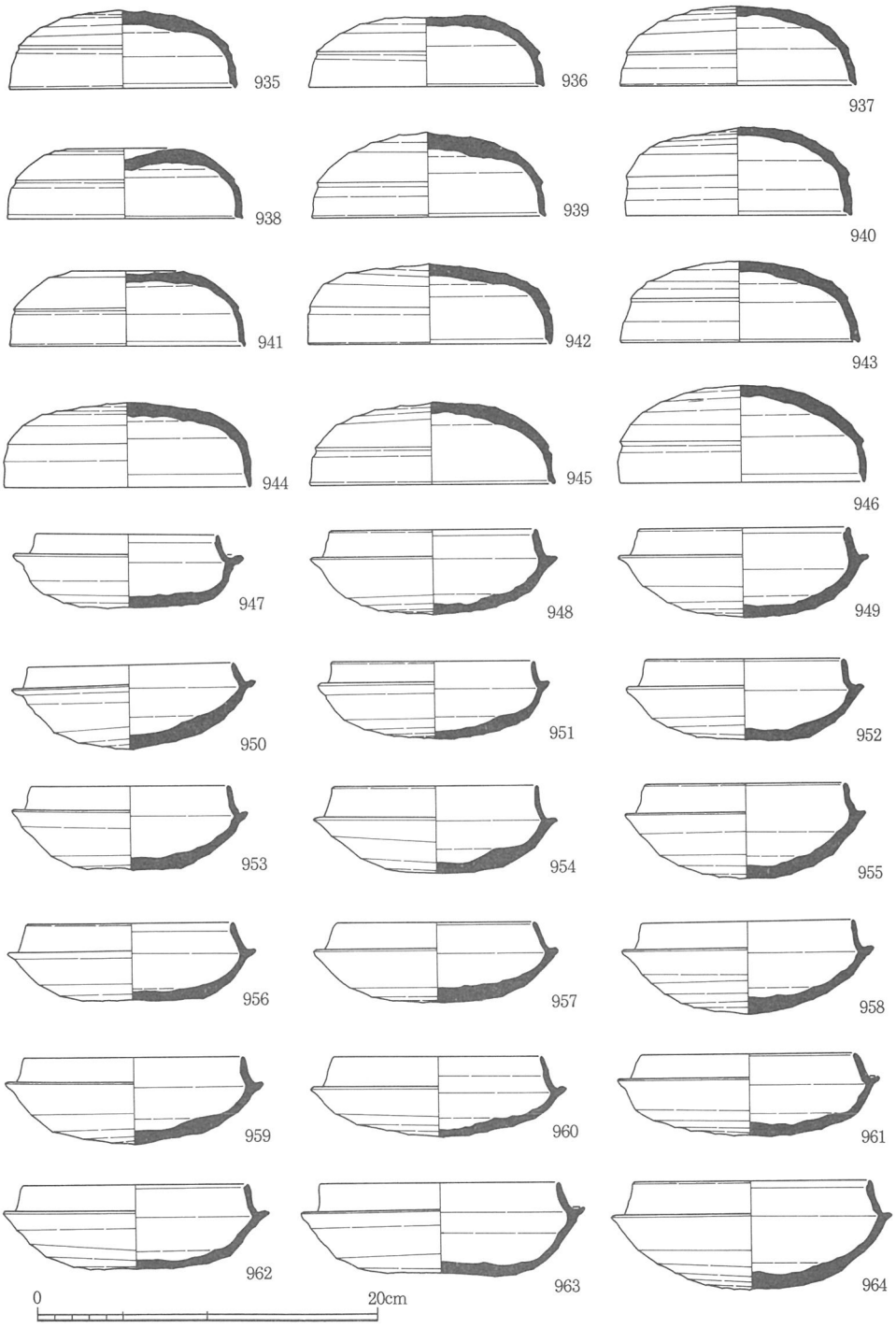
無蓋高杯は４点図示した。976・977・979はＡ群でも出土しているが，978はＡ群では出土していない形態である。杯部や脚部の特徴から，他に比べ後出する時期のものと考えられよう。

把手付椀（980）

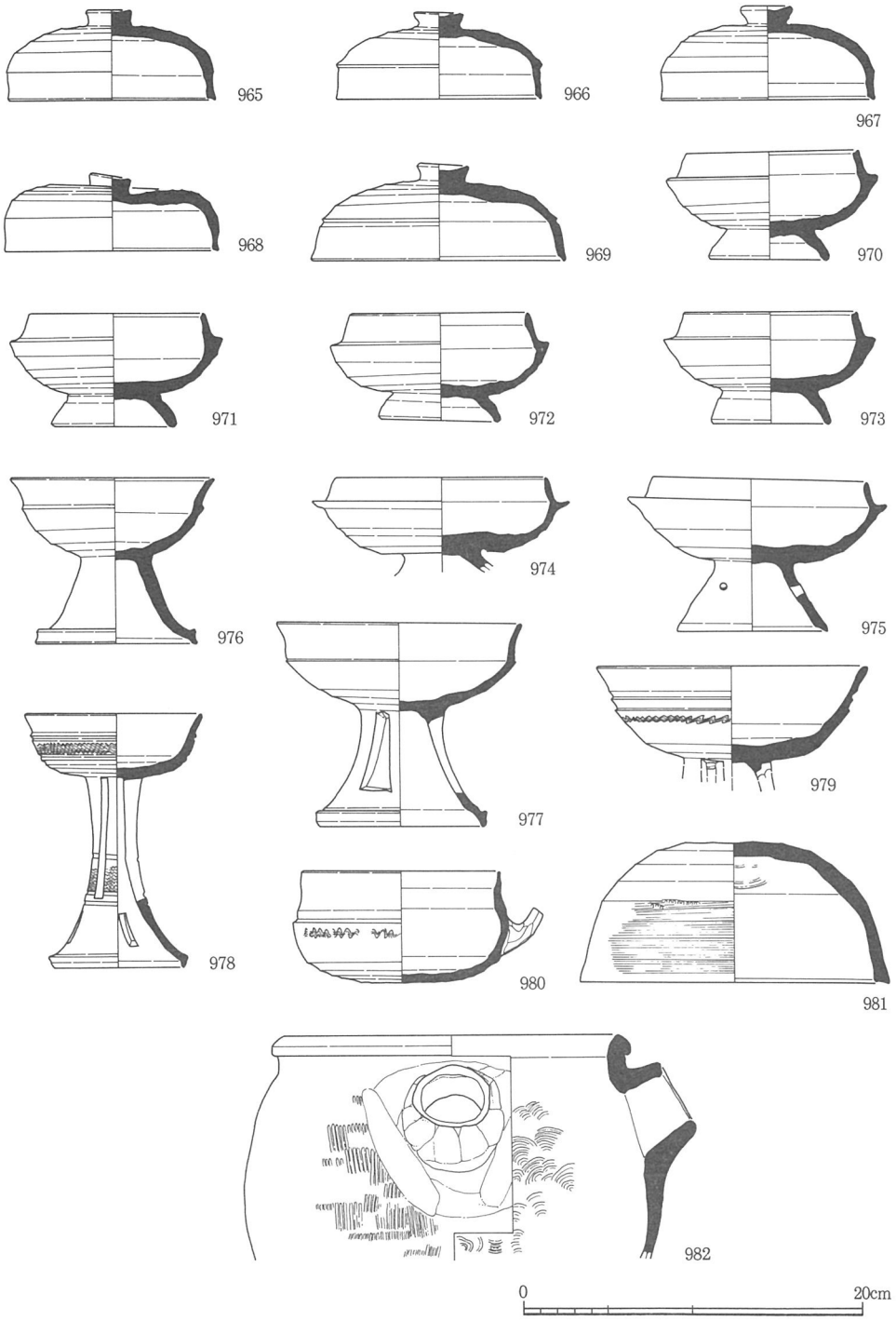
やや偏平な底体部から口縁部が長く直立するもので，Ａ群の出土品とは器形が若干異なっている。

大型蓋（981）

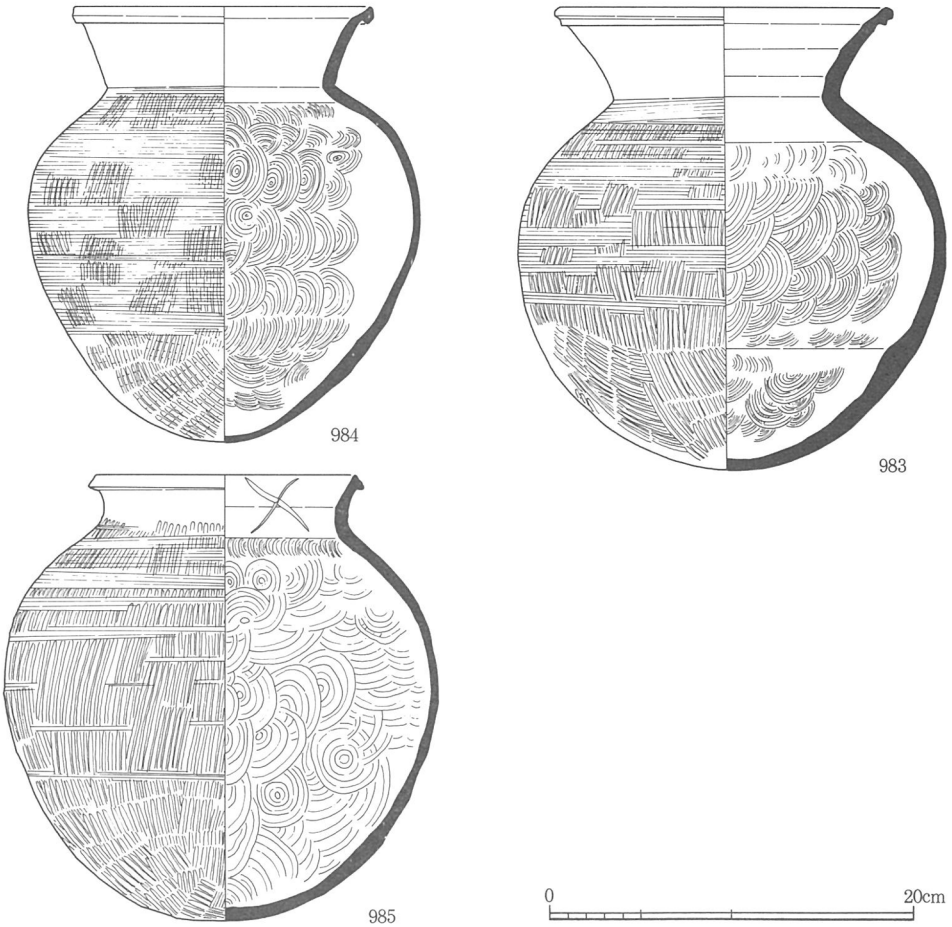
口径18.4㎝，器高８㎝を測り，大型の短頸壺などに伴うと推定される。天井部には回転



第133図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｂ群出土遺物１



第134図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｂ群出土遺物２



第135図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｂ群出土遺物３

ヘラケズリ，口縁部にはカキ目が施される。また，天井部の内面には部分的ではあるが，アテ具痕が残存する。

注口土器（982）

全体の器形は堝と類似するが，破片資料のため把手の有無は不明である。初期須恵器にも注口土器の出土例があるが，器形は大きく異なっている。本例は器形や注口の形態から判断して，堝に近い用途が考えられよう。

壺（983～986）

983～985は小容量のものである。983は口頸部がラッパ状に開く形態で，Ａ群では類例の少ないものである。984・985はＡ群でも出土例のみられる形態である。

986は口頸部に対し底体部の容量の大きいものである。口頸部に特徴があり，体部から

第136図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｂ群出土遺物４

屈曲して直線的に開き，口縁部の外側を凸帯状に肥厚させる。他ではみられない口頸部である。なお，986は完形品であるが，口頸部や底部は大きく焼き歪んでいる。

甑（987）

一般的な大きさのもので，口径30㎝，器高27㎝を測る。体部は直線的に開き，口縁部はそのまま体部からのびる。口縁端部は内傾して面をなし，端面はナデにより凹線状にくぼむ。蒸気孔の形態はＡ群出土品と類似するが，円孔の外周に配した孔はＡ群よりもやや楕円形に近い。

ｃ，河川岸部Ｃ群（第137～144図，図版21・89～91）

Ｃ群はＡ・Ｂ群の北側の河川岸下端付近で出土した遺物群で，Ｂ群同様，散在した状況で出土している。

しかし，Ｃ群では土師器の出土が顕著となり，そのほとんどが須恵器で占められていたＡ・Ｂ群とは異なった特徴が認められた。さらに，出土した土師器中には使用痕の認められる完形に近い製品も数多く含まれていた。また，Ａ群との廃棄時期の同時性については出土位置が異なるため証明できないが，出土須恵器や層位からは同時あるいは極めて近い時期に行われたものと考えられた。

須恵器（第137～139図，図版89）

蓋（988～996）

法量的にはＡ群の①～④までのものがあり，Ａ群同様③や④（口径13.4～15.7㎝）の出土が顕著である。形態の特徴もＡ群と同一である。

なお，高杯の蓋はいずれも破片資料であり，ここでは図示していない。

杯（997～1008）

法量・形態ともほぼＡ群の様相と同一である。

高杯（1009～1012）

有蓋高杯（1009・1010）は，いずれも短い脚部を伴うものである。Ａ群でも出土している形態である。

無蓋高杯は２点図示した。1011はＡ群中に数多くみられる形態である。1012は杯体部の一方に耳の付くものであり，Ａ群での出土は確認されていない。他に比べ若干先行する時期に比定される可能性が高い。

把手付椀（1013）

底端部の稜が鋭いもので，Ａ群でも類似例（891）が出土している。把手は欠損するが，角状を呈すると推定される。

異形須恵器（1014）

無頸の小型壺状を呈するもので，体部上半と底部の計３箇所に円孔が穿たれる。容器とは考え難いものである。Ａ群でも２点（869・870）出土している。

短頸壺（1015）

法量的には，Ａ群で出土数の多い一群に含まれる。しかし，Ａ群の出土品に比べ口頸部が長く，底体部の最大径も下方にあり，形態的にはやや異なった特徴が看取される。

小型壺（1016）

底体部の残存品で，全体に丸みをもつ形態である。

壺（1017～1021）

1017・1018は壺の中では容量の小さいものに含まれる。いずれも口頸部を緩やかに外反させ，端部は面をなす。Ａ群では出土数の少ない形態である。

1019・1020は口径が約20㎝で，前者に比べ容量も大きいものである。Ａ群同様，口径に対し頸部の長いもの（1019）と短いもの（1020）がみられる。

1021は口頸部に対する底体部の容量が大きいもので，他に類例の少ないものである。

大型甕（1022）

ラッパ状に大きく開く口頸部の端部を，上下に拡張させる特徴を有する。

土師器（第140～144図，図版89～91）

鉢（1023・1024）

1024は小型の平底鉢で，口径12.6㎝，器高11.8㎝を測る。体部には膨らみがほとんどなく直線的にのび，口縁部は横ナデによりわずかながら外反させ端部を丸く仕上げている。体部の調整は外面に縦方向のハケを施し，内面はケズリにより器壁を薄く仕上げる。1023も小破片であるがその特徴から小型の平底鉢と推定される。なお，古墳時代後期に属する土師器の平底鉢は当遺跡では他に出土例はない。

高杯（1025）

高杯はほとんど出土していない。

図示した1025は完形品に復元された大型高杯である。杯部は平たい底部から口縁部が屈

曲して直線的に長くのびる，脚部は太い柱部から裾が大きく開く，柱部の内面にケズリを施すなどの特徴があり，他の土師器よりも先行する時期のものと考えられる。

甕（1026～1033・1052）

法量や器形の特徴から３つに大別される。

①（1026・1027）－口径11㎝以下の小型品である。口縁部が他に比べ長く，甕とするより壺とした方が妥当かもしれない。体部の外面はハケ，内面はケズリで仕上げる。

②（1028～1030）－口径約13㎝を測る小型品である。口縁部は「く」の字状に短く屈曲し，体部は球形を呈する。口縁端部は丸くおさめるもの（1028）やつまみ上げたように上方に肥厚させるもの（1029）などがある。

③（1031～1033）－甕としたものの中では最も容量の大きいものである。口縁部は「く」の字状に短く屈曲し，胴体部はやや長胴である。ただ，完形に復元された1031は口縁部や体部のハケ目など他と異なった特徴が看取され，一般的な製品とはいい難いものである。一般的な口縁部や調整が施された1032・1033は，欠損するため明確ではないが，②同様底体部は球形を呈する可能性もある。

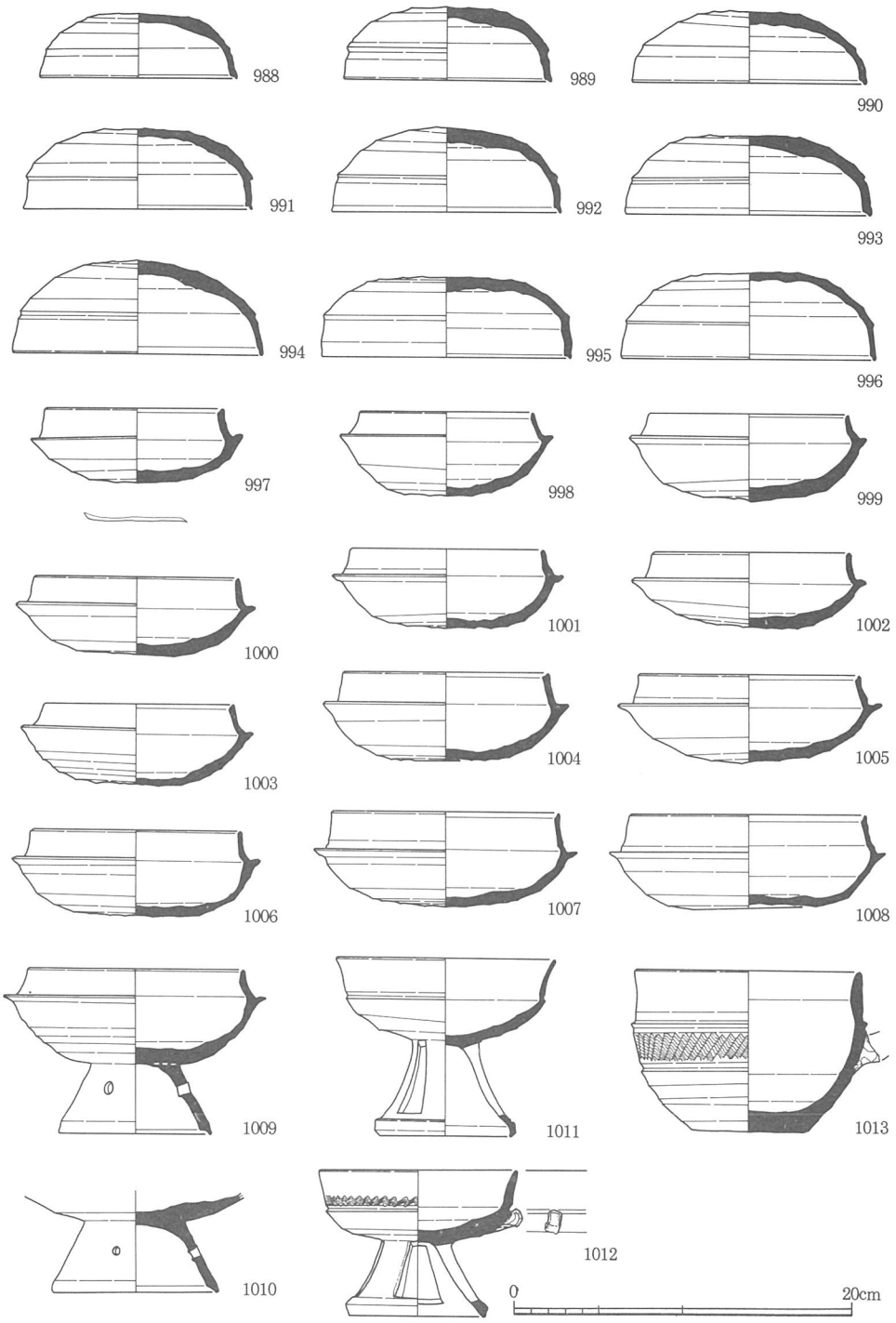
長胴甕（1034～1051）

長胴甕は良好な資料が得られている。まず，完形品（1034・1035・1037・1041・1045・1051）を基準として概観する。

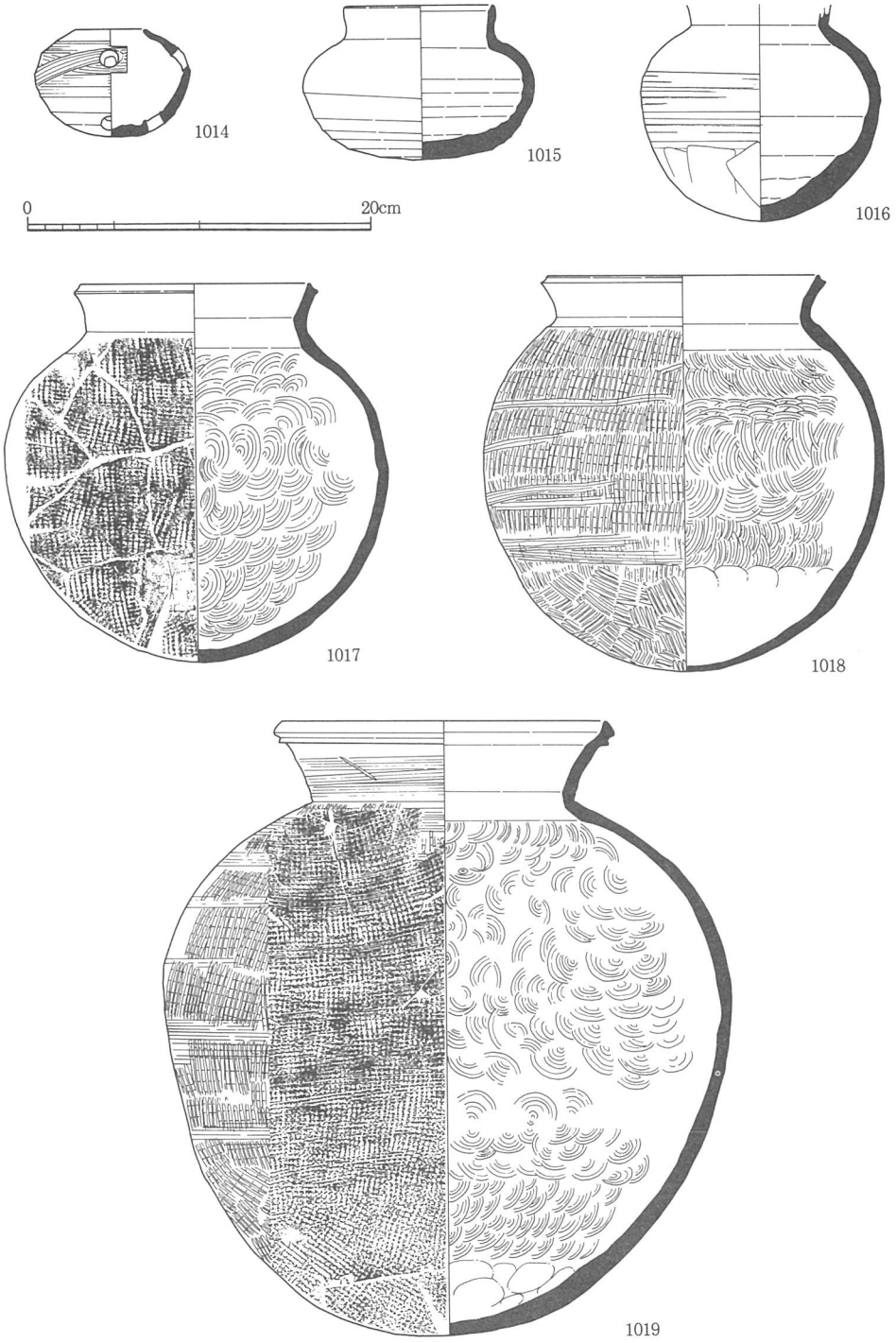
法量は若干の例外はみられるが，口径20～22㎝前後，最大径25～27㎝前後，器高39～42㎝前後で一定し，規格性は比較的高いといえる。

器形は胴体部の形状から，①最大径が上半にあり卵形を呈するもの（1034・1037・1045），②体部下半の膨らみが大きいもの（1035・1051），③胴体部に丸みのないもの（1041）に大別される。出土数からみると①が最も一般的な器形であり，②・③は例外的なものとされよう。なお，調整方法はいずれも共通し，外面は全体にハケを施し，内面はケズリにより器壁を薄く仕上げている。

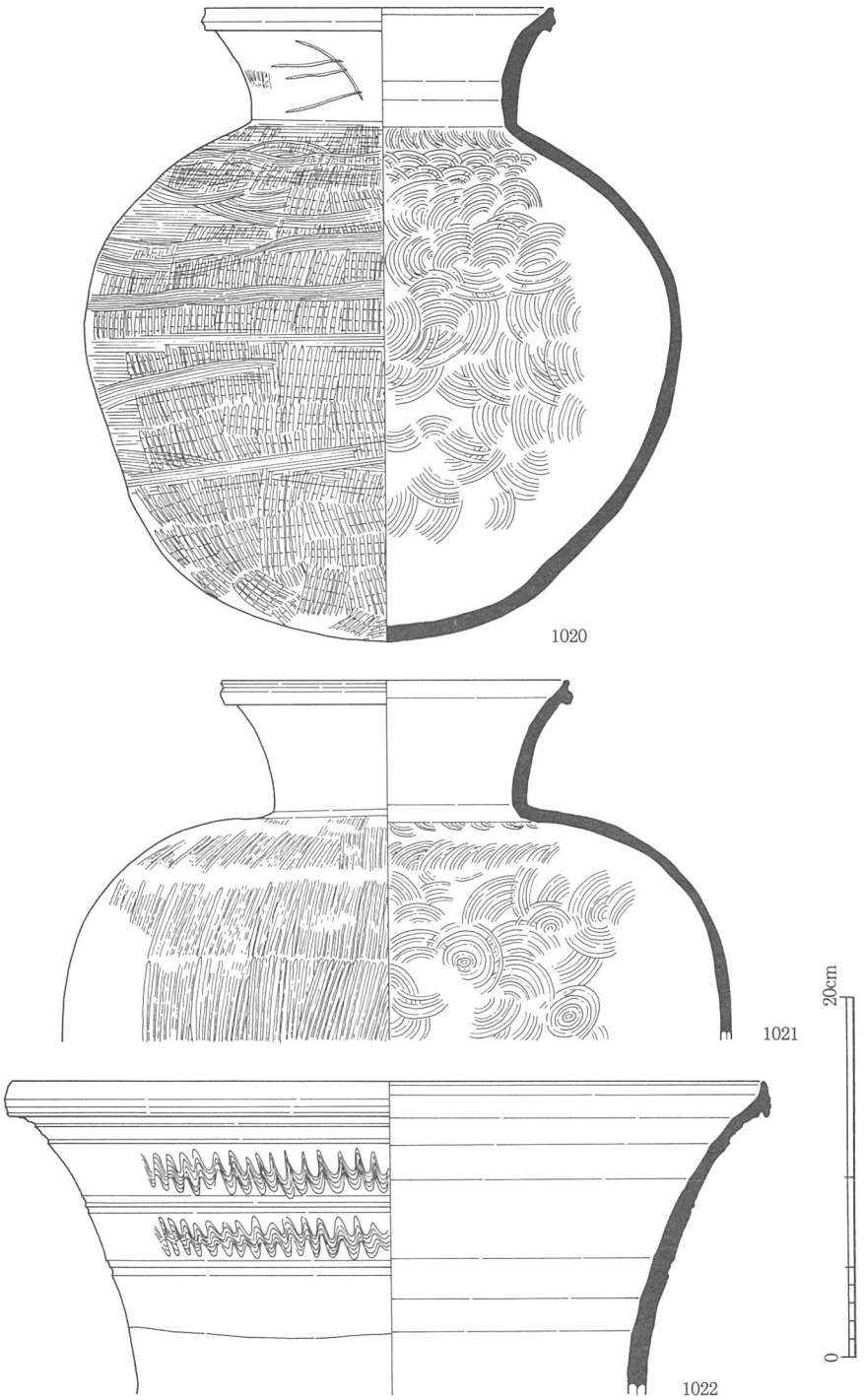
口縁部は，破片資料も数多く出土している。全体形状は，いずれも体部から「く」の字状に短く屈曲させるが，口縁端部の形状から，面をなすもの（1034～1036・1041・1042・1044～1047・1049・1051）と丸みをもつもの（1037～1040・1048・1050）に細分される。また，1034・1036・1040などでは口縁端部をつまみ上げたような肥厚が顕著に観察される。他の出土品もこれらほど顕著ではないが同様の傾向が看取され，当期の長胴甕の特徴のひとつとして認識されよう。



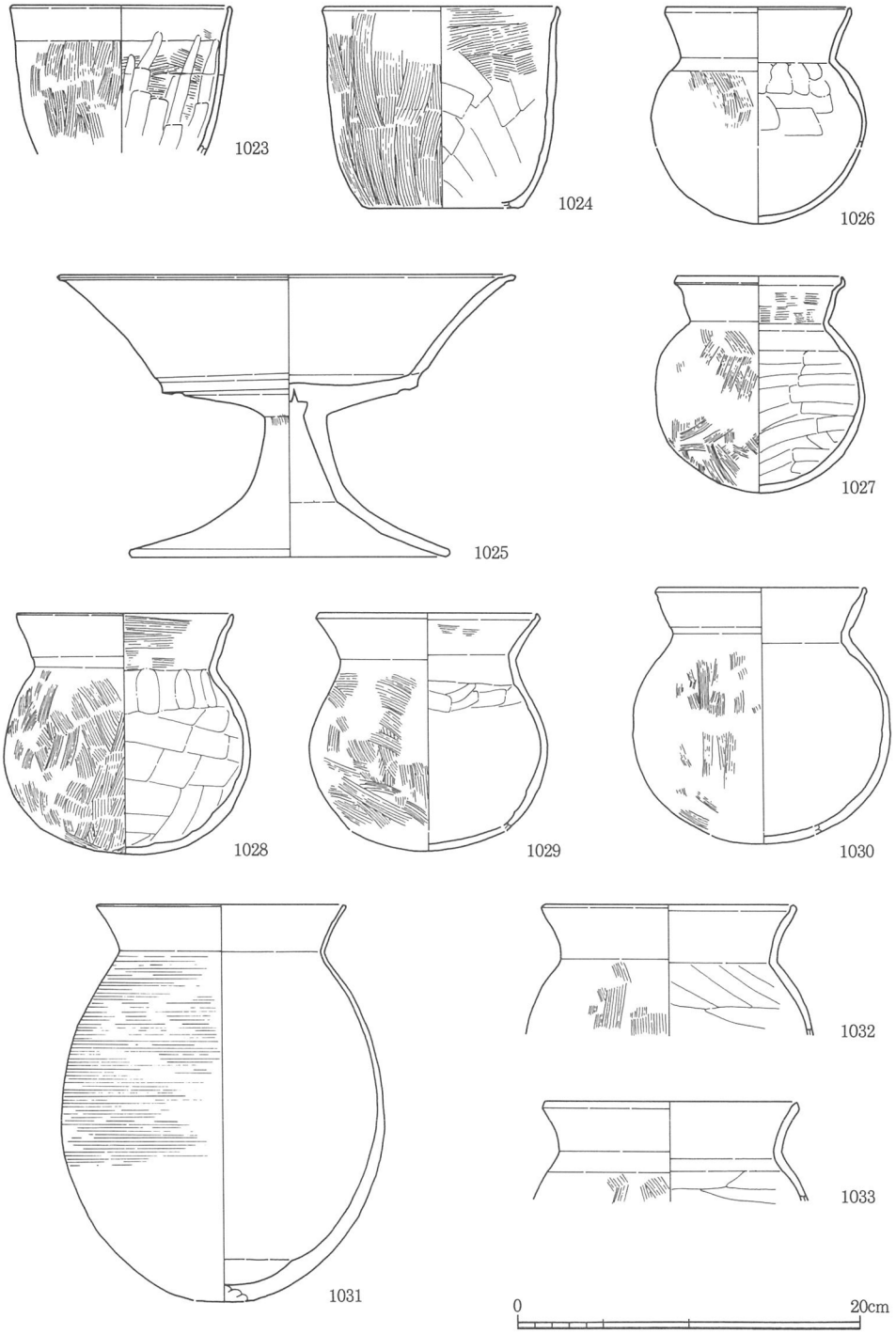
第137図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物１



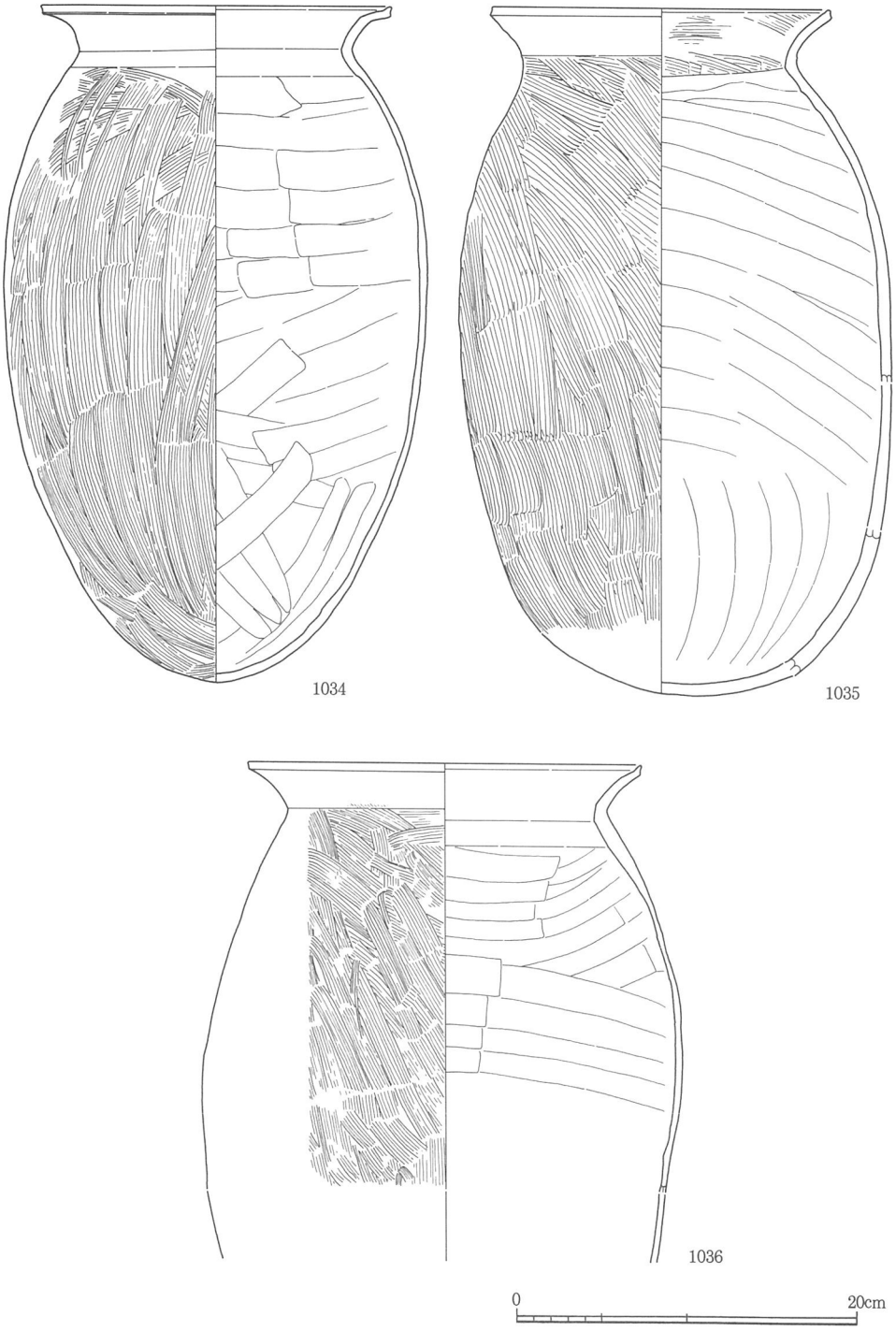
第138図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物２



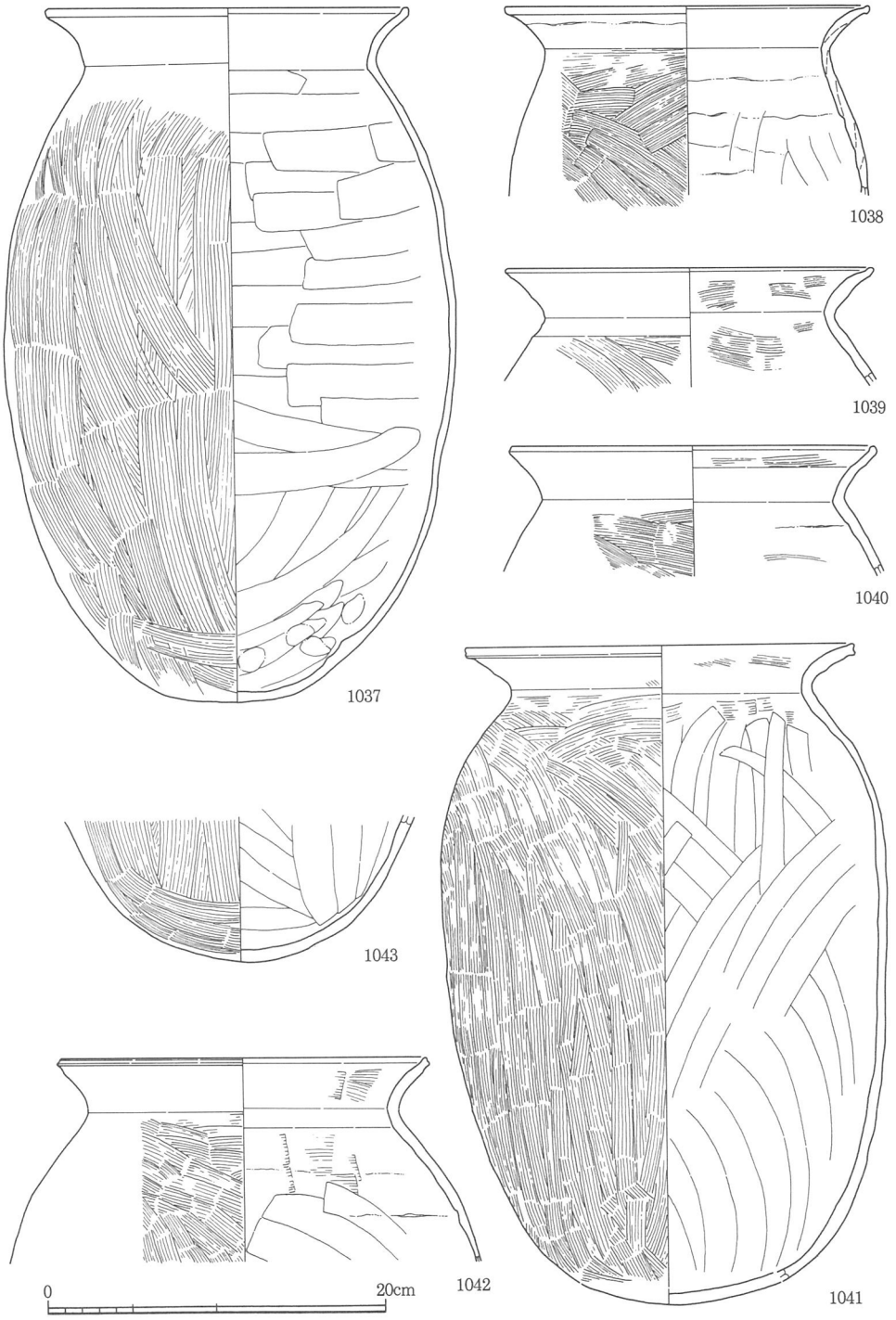
第139図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物３



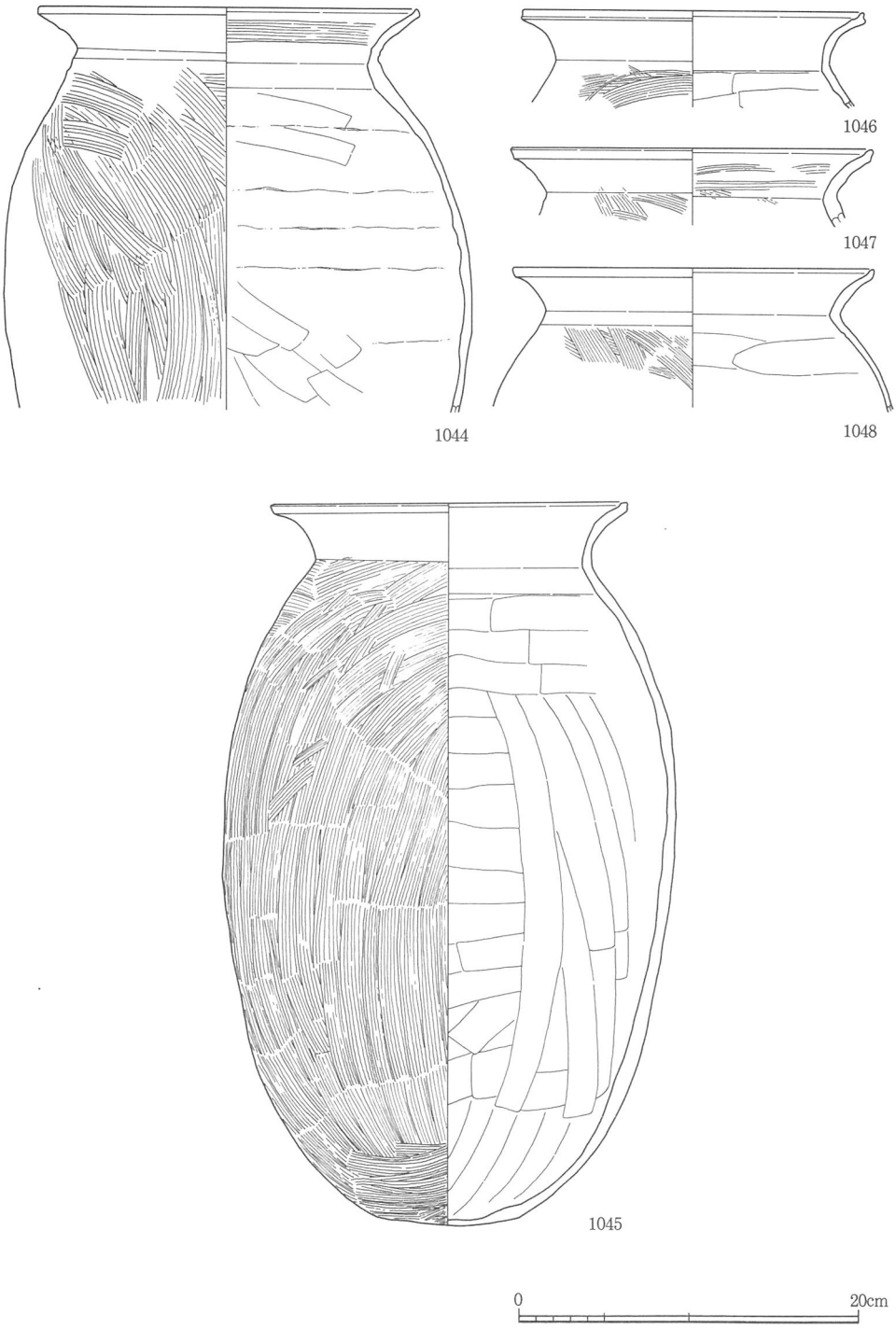
第140図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物４



第141図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物５



第142図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物６



第143図　河川（56－ＯＲ）岸部Ｃ群出土遺物７